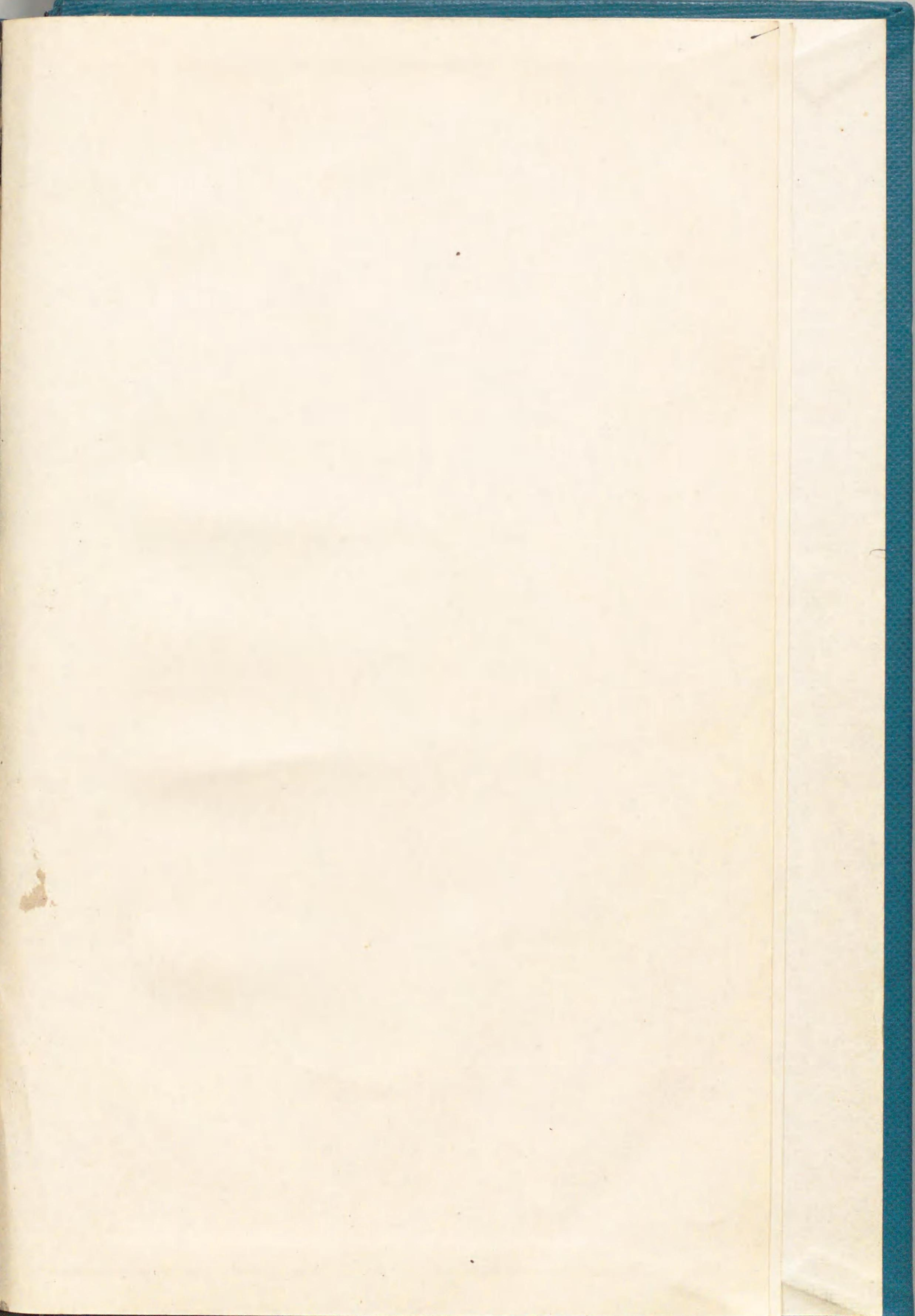
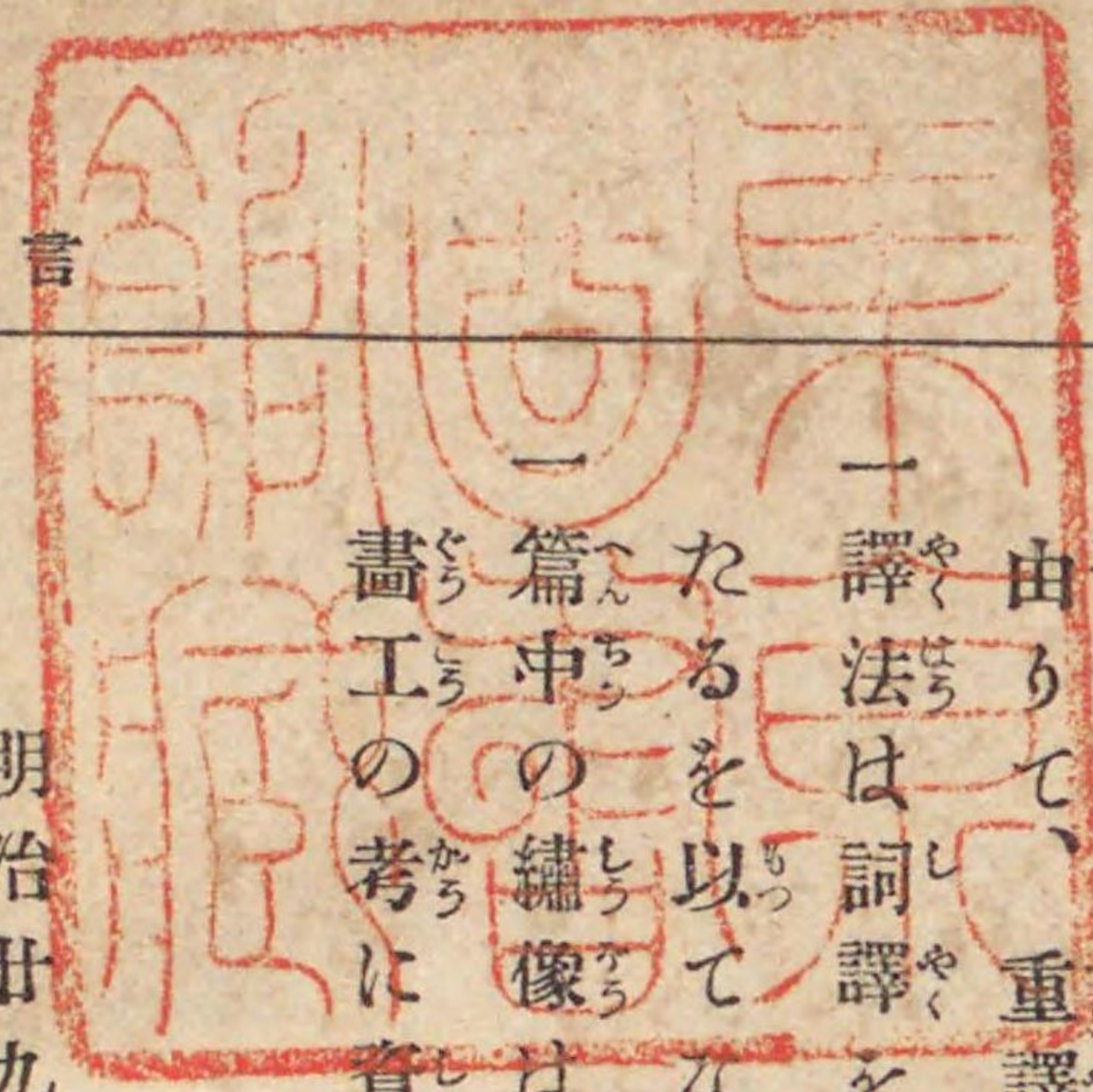


年少五十

譯士居軒思



74-29



例言

例
 一 是篇は佛國ジユウールスヅエルヌの著はす所『二個年間の學校休暇』を、英譯に
 由りて、重譯したるなり。
 一 譯法は詞譯を捨て、義譯を取れり、是れ特に達意を主として修辭を從とし
 たるを以てなり。
 一 篇中の繡像は多く、連君の意匠を煩はせり。余が原書にある所を擇取して以て
 畫工の考に資せる者、亦一二はあり。

明治廿九年十一月廿八日夜根岸の僑居に於て

思軒居士



十五少年目次

第一回	大あらし ○太平洋心の一孤舟 ○只た是等の童子のみ ○陸影 ○船首の叫聲	一頁
第二回	ニッシランドの一饗舎 ○暑中休暇 ○十四名の生徒 ○解纜の前夜 ○漂蕩 ○沙嘴の上	一九頁
第三回	四邊の觀察 ○船中の食糧器具 ○灣北の岬 ○海豹 ○ペンギン ○東方一條の淺碧色 ○新に派せられたる四名の遠征委員	三五頁
第四回	東方一面の茂林 ○岩壁の背後 ○小川 ○徒疋 ○人の手もて作れる小舎 ○湖 ○第二の小川 ○繫舟所 ○舟材の斷片 ○樹皮の上に彫られたる數個の字 ○一大洞居 ○前住者の遺物 ○本島地圖	五一頁
第五回		七四頁

第 六 回

會議 ○移居の準備 ○船体の解きほごき ○筏の編成 ○貨物の裝載 ○解纜 ○佛人の洞 ○駝鳥 ○石中の怪しの聲 ○フハンの失踪 ○一變事

九 四 頁

第 七 回

新洞の發見 ○怪物の本体 ○新宅の經營 ○命名式 ○太守の撰立 ○冬ごもり ○採薪 ○スロウ灣訪問 ○洞内の商議

一 〇 九 頁

烈風 ○車の製作 ○駝鳥の乗ならし ○探征隊の發程 ○第一夜 ○停宿川 ○家族湖の北端 ○さびしき夢 ○酒の木と茶の木 ○第三夜 ○野獸の來襲 ○未來の乳母と未來の良馬 ○歸着 ○兄の情

第 八 回

厩舎の建作 ○砂糖の木 ○狐ガリ ○スロウ灣遠征 ○異様な馬車 ○海豹の油 ○基督誕辰祭 ○來冬の準備 ○東方探征論 ○探征艦の拔錨 ○東方川 ○兩岸の風光 ○欺騙灣 ○巨熊岩上の眺望 ○雲耶山耶 ○弱克の懺悔 ○無言の航行

第 九 回

一 五 〇 頁

報告 ○南澤の一邊 ○珍禽異鳥 ○杜番の人望 ○環投げの戯 ○口論に次げる拳闘 ○傳書燕 ○六月十日の撰擧 ○陰氣なる冬 ○氷すべり ○霧中の人影

第 十 回

一 六 九 頁

二童子の歸來 ○弱克の迷路 ○恐ろしき道づれ ○杜番の義務 ○湖畔の露營 ○四子の分離 ○東方川畔の樹下の一夜 ○新宅の露營 ○欺騙灣頭の新殖民地 ○巨熊港 ○北部探征 ○北方川 ○鏡 ○山毛榉林 ○大あらし ○破れたるボートと二個の人体

第 十 一 回

一 八 七 頁

閣中の討論 ○天明 ○屍体の失踪 ○桑港の一商船 ○佛人洞の掛念 ○大紙鳶の製作 ○林中の一婦人 ○圭兒の物語 ○七個の殺人賊 ○夜中の航行 ○岸上の火光 ○亞米利加虎 ○親切の温き倨傲の水 ○四童子の復歸

第 十 二 回

二 〇 八 頁

洞中の情況 ○洞外の形勢 ○人心洶々 ○圭兒の發案 ○武安の沈吟 ○新式の空中飛行機 ○夜中の試験 ○弱克の懺悔 ○漂流の原因 ○空中旅行 ○遠近二種の火光 ○紙鳶の絲斷れたり

第 十 三 回

二 三 〇 頁

第十四回

二五二頁

武安の復命 ○胡太の恙 ○傳書燕の歸來 ○人心の沮喪 ○ラマの死体 ○一個の煙管
 ○無風無雨の大あらし ○戸外の叫聲 ○濡れくたれし一漢子 ○伊範の物語 ○大苦戦

セベルン號の傳馬船 ○ハノーバル島 ○説明ミ講釋 ○マゼラン海峡 ○將來の計畫 ○
 目下の防禦 ○力取乎智取乎 ○二個の漂流水夫 ○夜半の活劇 ○圭兒の慰解 ○福倍の
 糺問 ○偵察隊の出發 ○第一第二の銃撃 ○武安の失踪 ○杜番の負傷 ○洞邊の叫聲

第十五回

二七八頁

○二個の人質 ○危一髪 ○福倍の改心 ○轟然一聲 ○林中の探索 ○杜番の容体 ○傳
 馬船修履工事 ○二月五日 ○三疊の譚呼 ○煙波渺々 ○マゼラン海峡の航行 ○グラフ
 トン號 ○歸國 ○余輩が學び得たる訓言

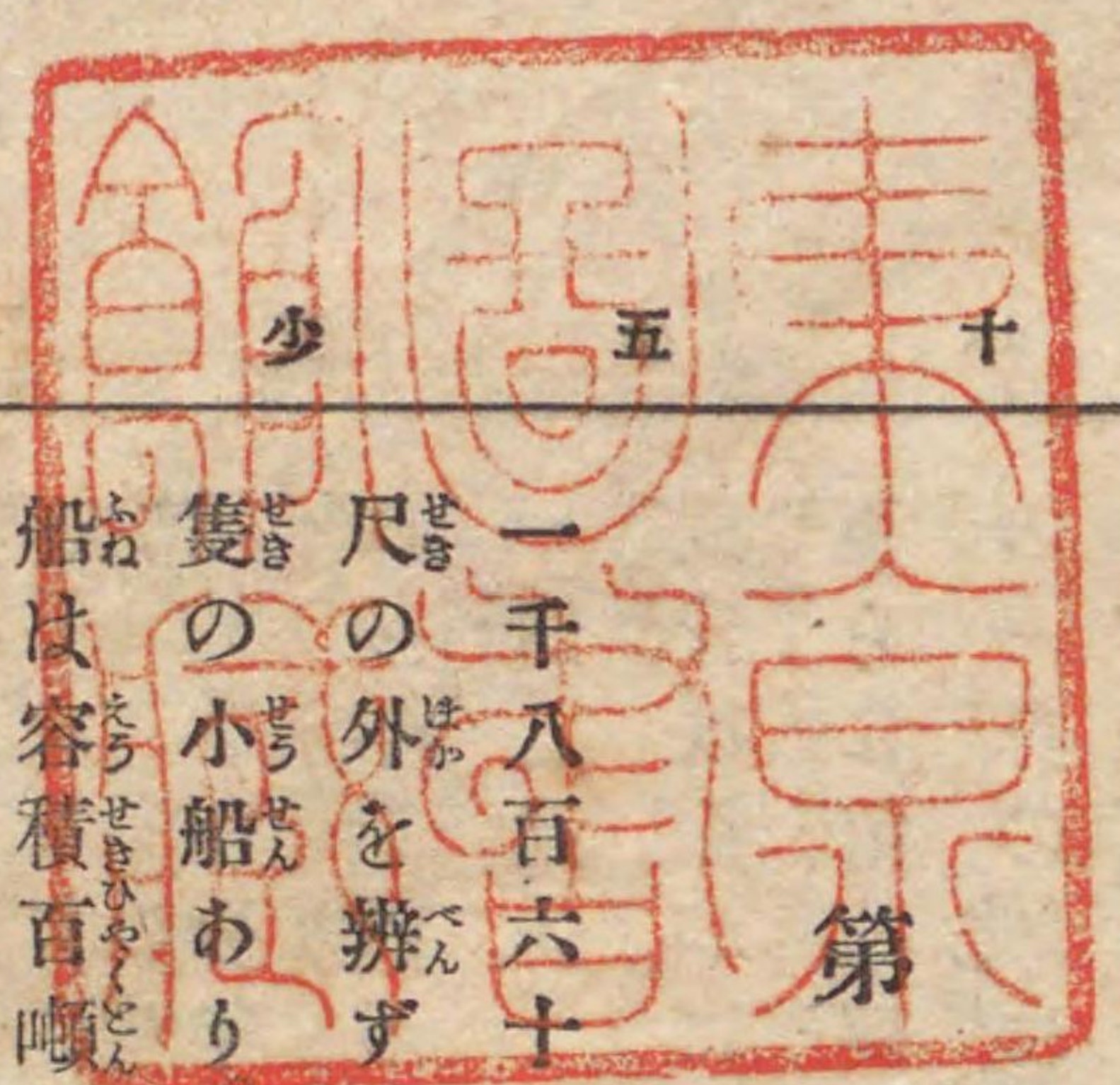
十五少年目次畢

十五少年

思軒居士譯

第一回

大あらし ○太平洋心の一孤舟 ○只だ是等の童
 子のみ ○陸影 ○船首の叫聲



一千八百六十年三月九日の夜、彌天の黒雲は低く下れて海を厭し、闇を濛々咫尺の外を辨ずべからざる中にありて、斷帆怒濤を掠めつゝ、東方に飛奔し去る一隻の小船あり、時々閃然として横過する雷光のために其の形を照し出ださる。船は容積百噸に満たざる、ヨットの一種にして、英國及び米國にて、スリーナ

いと稱する兩櫓的なり。

船は名をスロウ號と呼ぶも、曾て其の名を記したる船尾の横板は、物に觸れてか、浪に洗はれてか、とく剝落し去りて、復た其の名を尋ねむに由無し。

夜は已に十一時を過ぎぬ、此の緯度にありて此ころは、夜甚だ長からざれば、

五時に向ふ比ほひには、早やうす白き曉の色を見るを得べし。然れども天明けなば、スロウ號は能く現時の危難を免かるべき歟、風濤は能く静止すべき歟。』船の上には三個の少年、一個は十五歳、他の二個は各十四歳なるが、十三歳なる黒人の子と共に、各必死の力を奮せて、舵輪に取りつきをり。砰然たるすさまじき響きどもに、一堆の狂濤、來りて船を撃つと見えしが、舵輪は四少年が必死の力を奮せて取りつきたるにも拘はらず、忽焉逆轉して、四少年を數歩の外に擲ちたり。

一個「武安、船には異状なきや」。

武安は徐かに身を起して、再び舵輪に手をかけながら「然り、吳敦」と答へて、更らに第三個に向ひて「しかと手をかけよ、杜番、沮喪する勿れ、余等は余等の一身の外に、更らに思はざるべからざる者あるを、忘るべからず」又た黒人の子を顧みて「莫科、汝は怪我せざりしか」黒人の子「否な、主公武安」。

渠等の操る所は皆な英國語なりき、唯だ武安と呼べる童子の言ふ所に、著るしく佛國人のなまり有るのみ。是時、船室に通ずる梯子の口の戸、突然開けて、

二個の童子の顔現はれ、之に續いて一個のやさしげなる犬の面現はれ出でぬ。犬は二た聲三聲高く吠えぬ、童子の年長なるかたは十歳ばかりなる可し「武安、武安、何事なるぞ」。

武安「何事もなし、伊播孫、何事もなし、返れ、どく船室に返りてをれ。」

他の年小なるかたの一個「されども、余等はあまり恐ろしければ」武安「他の諸君は」。

「皆な均しく恐れをれり」武安「憂ふる勿れ、返りて蒲團にくるまり、兩眼を閉ぢてをれ、しかせば恐ろしきを無かるべし、何等の恐ろしきとも有るなし」。

莫科「氣をつけ、又た一個の巨濤來りたり」。

言未だ訖らず、再び一個の崩濤あり、俄然船尾を來り襲へり、然れども幸ひにして潮水船室に走入するに至らず。

吳敦は少しく聲を勵まして「返れ兩君、君等は余輩の言を聽かざるか」。

二個の童子の顔やうく没し去るや去らざるに、復た一個の少年の姿ありて、梯子の口に現はれ出でぬ、「武安、君等は余輩の力を須ひざるか」。

武安「否な、馬克太、君等は下方にありて、幼年諸君を看護しくれ、此處は余等四人にて十分なり」。

四

然らば、斯の大洋中の最大洋なる太平洋の上に於て、斯の暴風怒濤の中にありて、斯の船の上には、唯だ是等少年童子の外、更らに一個の人無き歟。然り、船は唯だ武安等十四個の童子と、給事のボーイ黒人の子一個とを載するのみ。船員として、少くとも一個の船長、一個の副船長、及び五六個の水夫を有すべき、斯の百噸のスクーターに於て、船員と稱すべきは、唯だ一個の給事のボーイ莫科の在る有るのみ。是れ何を以てずや、抑も船は何の目的あり、何地より何地に往かむと欲して、乃ち斯のあらしには遭ひたるや。若し他の船の洋上にて、スロウ號に邂逅するあらば、其の船長は必ず第一に之を怪しみ問ひたるべく、衆童子は必ず十分の説明をこゝに與へ得たりしならむ。然れども是時洋上には、四方幾百里の間スロウ號の外、復た一隻の船も見えず。あらしは益す其の勢を倍せり、風は疾風烈風より一變して颯風となれり、スロウ號は今にも驚瀾怒濤の中に呑了されむとす、後橋は既に二晝夜以前に吹き折

られて、甲板の上には其の本四尺許を留めて嵌立するのみ、前橋は幸ひにして猶ほ全きを得たるも、風勢益す猛くして、童子等の力もて其の帆を巻收する能はざるがため、其の満帆の風に吹き撓められて、其の根接の處より絶えず左右に搖るぎ動くを見る、若し前橋にして一たび倒れむには、船は坐ながら風濤の恣まゝに弄るぶ所に任して、童子等は手を束ねて、覆没を待つの外、復たせむすべ無かるべし。

渠等は皆な兩眼を睜開きて、前方を瞻つめたるが、只だ是れ闇々濛々として、一寸の陸影、半點の火光をだに見るべからず。

午前一時に及ぶ比ほひ、忽ち一道の物すごき響き、高く風聲怒號の上に聞えぬ。杜番「前橋倒れたり」。

莫科「否な、只だ其の帆の吹き断られしのみ」。

武安「さらば其の帆を截り去らざるべからず、吳敦、君は杜番と俱に留まりて舵輪を看れ、莫科、汝は來り余を助け」。

莫科はかねて船中の給事をつとめて、自然多少航海上の經驗を得、武安は曾て

五

歐洲より濠洲に來るとき、太西太平洋兩洋を航行して、幾分か操舟上の知識を學び得たる所あり、衆童子が兩個を推して斯のスクーナーの指揮を委ねしは是がためなり。

兩個の伎倆は、斯の新らしき厄難に逢ひて、亦た其の一證を示したり。渠等は前橋の下に來りて、其の破損を驗するに、帆は上邊の索を吹き斷られて空中に翻轉せるが、幸ひにして其の下邊は、猶ほ依然として帆桁に結び着きをり、渠等は先づ上邊の索を全く截り去りて、下邊の帆桁を甲板を離る、四五尺までひき下し、初め帆の上邊たりし布の二隅を把て、之を甲板の上に緊と約し着けぬ、渠等は此の如くして、却て前よりも更らに安全に、風を趁ひて進みゆくを得べし。

渠等は此の間に、絶えず甲板を飛越せる巨濤のために其の身を洗ひ去られむと欲しては、纜かに自から支へ得たるもの、雷に五七回のみならず、兩個は満身づぶ濡れとなりて、舵輪の下に歸り來るに、恰かも同時に、梯子の口再び開けて、武安の弟弱克の頭現はれ出でぬ。武安「何用あるや、弱克」

「來れ、來れ、とく來れ、船室の中に海水漏入しはじめたり」。

「真か」と叫びつゝ、武安は、直ちに船室に下りゆけり。船室には一個の吊りラムナ中央に懸り、うす暗き燈光の下に、十個の少年、或はソーッハ、或は臥棚の上に、己がじゝに横はりをり、八歳乃至九歳なる最も穉きは畏れ怖れて、互に相抱擁せるもあり。武安は「余等は既に陸に近づきつゝあり、復た恐るべきなし、憂ふる勿れ」と一同に力をつけつゝ、蠟燭を點して、熱ら室内を驗するに、少許の海水ありて、船の搖動するにつれて、座上を一往一反するを見る、然れども遍ねく室内を索むるに、海水の漏入すべき罅隙あるなし、更らに其の濕痘を追ひて、次の船房に至るに、初めて其の由來を發見するを得たり、蓋し絶えず甲板を洗ふ所の海水の餘滴、甲板の船口より船房に流下して、此より船室に流入せしなり。

武安は船室に返りて、諸童子に之を語り、其の恐るべきもの無きよしを告げし後、再び甲板に上り來るに、夜は既に二時に垂んとせり、一天墨を潑せる如く、風勢は依然として、猶ほ少しも衰へず、時に整艦たる風濤の響きを破ぶり

て一聲頭上を叫過するは、是れ海燕乎。

然れども海燕を聞けるがために、陸に近しとは断ずべからず、渠等は屢ば遠く洋心に翱翔するをあれぼなり、既にして又た一時間を過るほどに轟然として、大砲を發てる如き響き、高く空中に揚りぬ、蓋し前橋二つに折れしなり、寸々断々となりし碎帆布片は、一團の鷗の如く、紛然として空中に散飛せり。

杜番「余輩は復た帆を挂くる能はず」、武安「何ぞ憂へむ、余輩は帆無きも、猶は帆有るの時の如く、疾走するを得べし」。莫科「幸ひにして船は正さに浪を背に負へり、船は一直線に前進するを得べし、唯だ屢ば浪のために、追ひかぶせらるゝを免かれざるべければ、余等は自から身を舵輪に縛りて以て、浪のために洗ひ去らるゝを、防がざるべからず」。

莫科の言未だ全く訖らざるに、一堆の奔濤あり、高く其の頭を船尾の上に擡ぐると見る間に、すさまじき響きを作して、甲板の上に崩下しつ、船口の一半を缺き取りて、救命艇二隻、短艇一隻と、羅針盤函とを洗ひ去り、餘勢更らに船邊を碎裂して、海中に流れ落ちぬ、幸ひにして船邊を碎裂されぬ、若し其の此

の如くして速かに海に流れ落つるなかりせば、船は其の重量に耐へ得ずして直ちに沈没したるならむ。

武安、杜番、吳敦は船室の梯子の口に擲つけられしも、こゝに捉まりて、僅かに海に運び去らるゝを免れしが、莫科はかの巨濤とともに見えぬなりぬ。武安はやう／＼語を發するを得るやうなるや否や「莫科、莫科」。杜番「海中に運び去られしか」。吳敦は忙がはしく船邊に倚りて、海中を俯瞰しながら「何等の影も見えず、何等の聲も聞えず」。

武安「余輩は必ず渠を救はざるべからず、浮囊及び索を投ぜ」といひつゝ、又た更らに聲を高くして「莫科、莫科」。

「助け、助け」と、かすかなる聲ありて、答へ叫べり。吳敦「渠は海中に陥りしならず、聲は船首のかたより來れり」。武安「余往て渠を救はむ」。いふより早く、動もすれば失脚跌倒せんと欲する、甲板の上をつたひ／＼と、船首のかたに走せゆきぬ。武安はやう／＼船口のはどりまで來りて、復た高く給事の名を呼ぶに、答へな

し。武安は反覆せり、かすかなる應聲、再び武安の耳に到れり、武安は更らに其の聲をたよりにて、船首なる絞車盤と舳頭との間に來り、頻りに闇中を摸索するに、終に聲さへ得出ださず煩悶しをる童子の体に摸着れり、蓋し莫科は嚮の巨濤のために、推されて此に至り、帆索に喉を纏はれて之を脱さむと欲して、拵扎げばもがくほど、愈よ喉を緊約られて、今は呼吸も絶えくとなれるなり。』武安は忙がはしく、其のナイフを取り出だして、帆索を断りて、莫科を救ひ出だせり、莫科は數多たび武安に救命の恩を謝したる後ち、相挈へて舵輪の下に返りぬ。

武安の豫言に反して、船は帆を失ひてより、其の速力頗る著るしく減少し、浪は船を追ひこし、疾走すれば、船は今にも浪のために、追ひかぶせられ、覆翻されむとす。今は何等か帆に似たる者をさへ挂くるに由なき童子等は、如何にして能く此の危難を避べきか。

南半球に於ける三月は、余輩北半球に於ける九月と相同じ、故に午前五時に向ふ頃はひには、早く曉の色を望むを得べし、天明けなば、風威或は少しく衰

ふとあるべし、或は更らに幸ひにして、何等かの陸影を望むとあるべし、若し幸ひにして、是等二者の一を得ば、童子等は尙ほ九死の中に一生の望みあるとを得ると謂ふべし。

既にして四時半を過ぎぬ、うす白き曙光は、徐ろに東方地平線上より起りて、次第に天心を射照せり、然れども不幸にして、煙霧猶ほ深く洋上を鎖したれば、童子等は三丁の外を見る能はず、仰ぎ看れば、雲は皆なすさまじき速力をもて、轟然東方に飛行しつゝあり、風勢は毫も減退の色あらず、眸を展べて更らに前方を望めば、眼の届く限り、渾べて是れ混々として一様の湧泡飛沫のみ。

四少年は空しく四邊の狂瀾怒濤を瞻りて、彳立せり。渠等は各自、心の中に、其の運命の次第に望少くなれるを思ひたり。

とたんに、忽ち莫科の聲を聞けり、「陸、陸」。

渠は、是時忽焉破開せる煙霧の間より、一帯の陸影を瞥見したるやう覺えしなり。然れども是れ果して陸なるか、是れ渠の眼花にあらざる無きを得むや。

武安「陸と」。莫科「然り、前方即ち東のかたに」。杜番「汝はたしかに錯らざる

歟。莫科「煙霧の再び破開せむとき、船頭より少しく左を看よ。」
 言未だ訖らず、煙霧は再び破開せり、未だ幾ばくならずして、四邊幾マイルの間、忽ち了々として明かに見るべくなれり。
 武安は叫べり「然り、陸なり、實に陸なり。」
 今は復た疑ふべくもあらず、スロウ號の船頭にあたり、東方地平線上に、一帯の陸影あり、長さ五六マイルに亘るべし、若し目下の速力もて駛せ行かば、スロウ號は一時間を出でずして、彼處に到るを得べし。風勢は益々加はれり、船は轟然一直線に、陸を望みて走せずみぬ。
 漸やく近づきて之を視るに、岸上には百數十尺の岩壁聳起し、岩壁の前面には、黄色の沙嘴平行し、沙嘴の右方は、一簇の喬木ありて之を隈れり、是れ内地なる茂林の端なるべく見ゆ。武安は舵輪を他の三個に委ねて、獨り船首に來りて、岸邊の光景を熱察し、船の錨を投ずべき處を心計するに、岸邊には、一個の港灣らしきものも有るを見ず、且つ最も不便なるは、沙嘴の外は一面の鋸齒の如き岩礁、海底に蜿蜒し、其の起伏の迹、黒く海波の上に隠顯せり。

武安は之を熱察し畢りて、則ち一同を甲板の上に召び集めおきて不虞に備ふる事の得策なるべきを思ひたれば、返りて船室の梯子の口を開てつ、「來れ、一同。最先に上り來りしは犬なり、之に續いて十一名の童子蹙然相踵で上り來りぬ。最も幼年なるは、四邊の光景を一目するよりも、早く畏怖極まりて啼哭するも多し、蓋し是時陸に近づくに隨ひて、海底次第に淺くなるほどに、其の怒濤洶湧の狀の、物すこく恐ろしきは、却て洋心に在る時に倍せしなり。
 午前六時の數分前、船は岸邊に達したり、武安は早くも上着を脱ぎすて、何人にもあれ、海中に陥る者あらば、之を救はむと身がまへたり、蓋し船は必ず岩礁に衝突して、粉砕せむと、十中の八九なるべく見えなければなり。
 俄かにして船は一種の撞觸を感じたり、スロウ號は暗礁の上に坐りしなり、船の外皮は勿論いたく損傷を蒙りたるべきも、未だ海水の直ちに漏入するほどに至らず、既にして第二の奔濤は船を驅りて、更らに五十尺前進せしめぬ、かくてスロウ號は左舷のかたに傾欹したるまゝ、居然止まりて、復た動かずなりぬ。」
 船は此の如くして、幸ひに終に覆没の災ひを免れたりと雖も、猶ほ沙嘴を去る

三丁の外に在り。

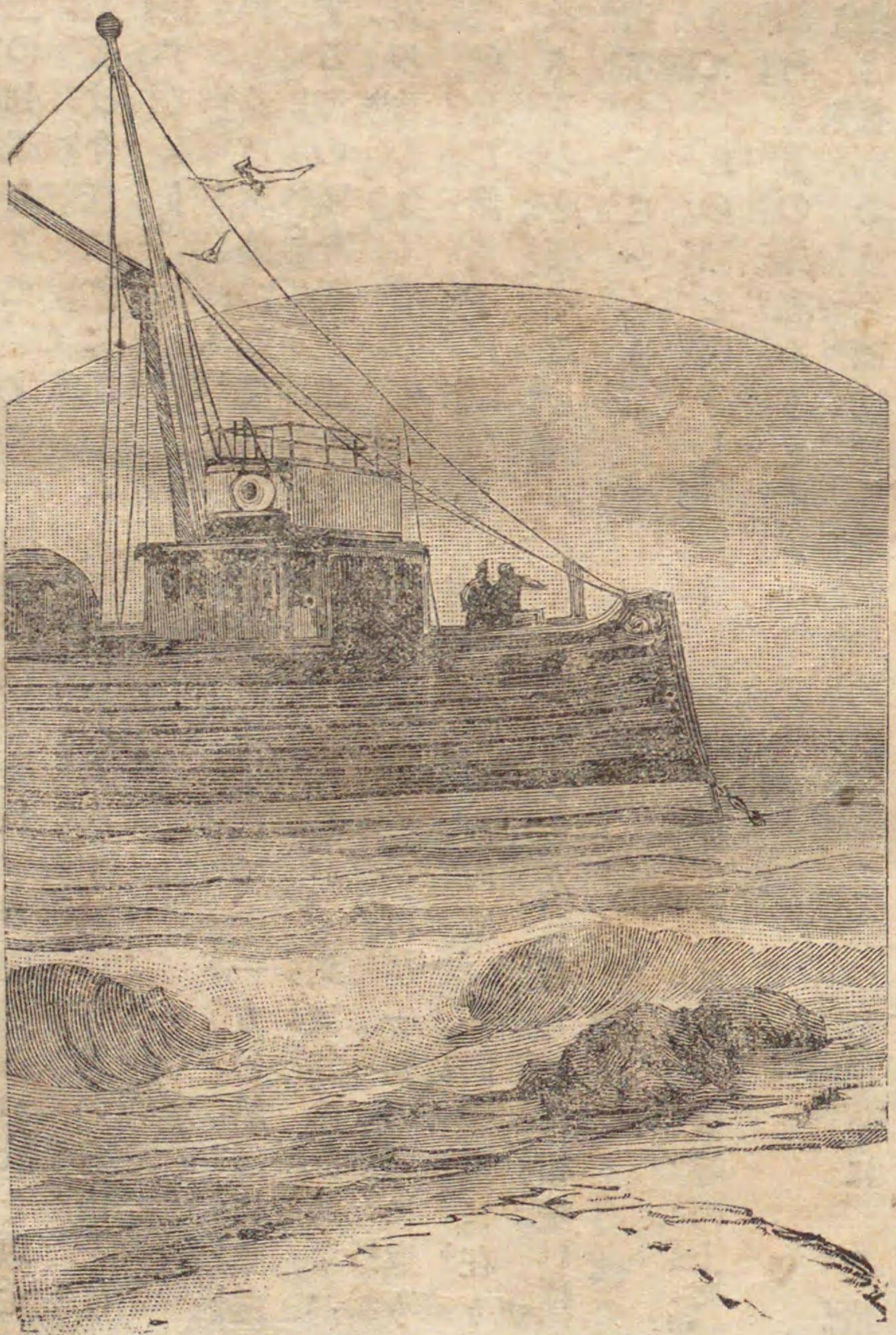
武安と吳敦とは、船室及び船房を驗して、船体の損傷の海水を滲入するに至らざるを知りて、大に心を安じつゝ、甲板に返りて、一同に之を語り、「恐るゝ勿れ、船体は恙無し、且つ陸は目前に在り、暫く少しく待て、余輩は徐かに上陸の計をなすべし」。

杜番「何が故にこれを待つや」。

韋格と呼べる十三歳なる一童子、之に和して「然り、何故に之を待つや、杜番の言是なり、余等は争で之を待つを須ひむ」。武安「何となれば、浪尙ほ此の如くあらければ、若し強て之を涉らむと欲せば、余輩は恐らく岩礁の上に擲たれて、身を壟くに終るべし」。乙部と呼べる韋格と略ぼ同齡の一童子「どかくする間、船体粉碎し了らば如何」。武安「余はそを恐るゝの謂れ無きを思ふ、少くとも潮の退きつゝある間は、船体の粉碎すべき憂ひ無しと思ふ」。武安の説是なり、太平洋の潮の進退、割合ひに著るしからずと雖も、而かも進潮と退潮との間には、猶ほ判然差別あり。武安の説の如く、更らに幾時間待

たば風波の或は静止せざるを必ずべからざるのみならず、幸ひにして岩礁の脊は潮全く落ちて之を歩行し得るの便あるやも亦た料るべからず。

然れども杜番及び他の數子は、尙ほ嗽々として、武安の説に従ふを肯せず。蓋し杜番、韋格、乙部、及び虞路等が事毎に、武安の意見を奉ずるを快しとせず、之に逆らはん



と欲したるは、從來其の例一二に止まらず、然れども其の黙して此に至りしは、唯だ武安が航海上の知識ありて、之に一船の指揮を委ねざる能ざるが故を以てのみ、然れども渠等は今既に陸に達したり、故に乃ち必ず其の行爲の自由を已れに得むを主張するなり。

杜番、韋格、乙部、及び虞路の四個は他の諸童子に離れて、一方の船邊に集處して、洶湧泡沸する海の面を凝視すると、之を久くせしが、到底其の泳過すべからずして、武安の言の如くするの己むを得ざるを見て、再び一同の處に返り來るに、武安は吳敦及び諸童子に向ひて、今に及びても尙ほ、一同一處に在りて以て、緩急相救ふとの必要なるを、諄々として諭しをり、「若し互に相離れば、是れ即ち亡滅の道なり」といへり。

方さにこゝに來りて、此の語を聞きし杜番は、叫びたり「君は敢て余等の上に、法律を制定し、施行するの權利ありと謂ふか」。

武安「何ぞ此の如き權利ありと謂はむ、唯だ共同の安全を保つがために、余輩は互に相離るべからずと謂へるのみ」。

常に深慮ある吳敦は之に和して「武安の説是なり」。かねて武安を信頼する幼年の二三子は「然り、然り」と應呼せり。杜番は黙して再び言はざりき、然れども渠は其の黨の三子と偕に、獨り怫然として、一方に引去せり。

抑もこの陸は、大陸か、島か、岩壁の下に半月形をなせる黄色の沙嘴は、兩端各丘陵の地に至りて而して盡く、其の北なるは高峻にして、其の南なるは稍や低くして夷かなり。武安は望遠鏡を把りて、良や久しく、陸のかたを望視したりしが、又た之を置きて「陸上には一條の煙も見えず」。莫科「且つ濱邊に一隻の舟もあらず」。杜番は傍らより之を嘲りて、「既に灣港なし、何ぞ舟あるを得む」。吳敦「そは未だ以て濱邊に舟無きの十分の理由となすべからず、或は漁舟の出で、此處に魚を打つともあるべきなり。蓋し舟無きは頃來のあらしに恐れて、皆な各其の避所にかくれをを以てなるべし」。

之を要するに此地此邊は、人の居住する者無き荒寥の境なるを知る。是時、風は勢少しく衰へたるが、次第に北西に吹きまはりて、退潮を支へたれば、潮の退きかた極めて遅々なり、童子等は時至らば直ちに上陸せんと欲して、

皆な手にく、必要の物件を甲板に搬び上げす、船中には乾餅、乾菓、鹽、罐づめの肉類、饒く有たれば、先づ是等を包束して以て、負荷携帯に便なるやうす。既にして七時となりぬ、岩礁の上の海水は、著るしく減落したりしが、是がために、船は益々左舷に傾歎して、若し此の如くしてもてゆかば、或は遂に横ざまに覆へるに至らずやどの恐れさへ生じたり、蓋し速力の快利ならむを欲して、其の龍骨を高くし、船底を尖削せる、此のスクーナーの如き構造にては、之を恐るゝも、亦た宜なり。

童子等は、是に於て、深く昨夜のあらしの爲めに悉く其の短艇を奪ひ去られたるの不幸を悲めり、若し是等の短艇だに有らしめば、渠等は或は今ま直ちに、此を藉りて、濱邊までこぎ去くとも得たるならむ、又た上陸の後に及びても、容易に此の船に往來して、現時にては渠等が携帶上陸する能はざる諸種の有用物件を、此に載せて以て、運び去るを得るならむ。

時に忽ち船首のかたに、常ならぬ叫び聲有り。

第二回

ニウジランドの一巽舎 ○暑中休暇 ○十四名の生徒 ○解纜の前夜 ○漂蕩 ○沙嘴の上

この時に當りてチエイマン學校といへるは、南太平洋に於ける英國重要の一藩地ニウジランドの首府、アウクランド市にありて、最も有名なる巽舎の一なりき、此に來り學ぶ者は英、佛、米、獨等の白色人の子に限りて、皆な市の有地者、銀行者、巨商、官吏等の子なり。ニウジランドは北島及び南島と稱する二大島と他の諸小嶼とより成れる一群島にして、二大島の間を隔つる一葦帯水は、即ち有名なる世界環航者の紀念を永く留むる所のクック海峡なり。斯の群島は南緯三十四度より四十五度の間に横亘して、北半球に於ける佛國、合衆國、及び日本の本島等と正さに其の位置を同じくす、北島の北西端は一條の狹長なる半島を成し、其の半島の頸をなせる處は幅二三マイルに過ぎず、アウクランド市は即ち其の頸の上に立てり、其の北島に於ける位置の希臘のコリンスと相肖たるより、往々呼びて南洋のコリンスと倣さる。

一千八百六十年一月十五日の午後百許名の生徒は各其の親たちに隨伴して、方

さに籠の戸を放かれし鳥の如く、欣々然として女皇街なるチエイマン學校の門を出で來れり。

この日は是れ暑中休暇の始めにして此より二個月間は渠等の自由に受用するを得る所なり。中に就て一隊の童子等の尤も得意なりしは、かねて久しく願欲待望せしニウジランドの沿岸週航の遊びの、斯の休暇の間に於て實行さるゝと定まりたればなり。童子等の乗組まむとする美麗なるスノーナーは、童子等の中の一箇の父雅涅氏の所有に係り、週航の費用は勿論童子等一同の親たちの齎出する所なり。

英國の寄宿學校の風は甚く佛國等に異りて、概して生徒をして自助自頼の習ひを養はしむるを専らとすれば、生徒は其の心と共に其の体の發達速かに、其の風采舉動の割合に早く大人びて沈着老成するが多し。チエイマン學校は生徒の級を分ちて五となし、其の第一第二の級に在る者は、尙は其の親たちの頼に接吻するを以て禮となすほどの幼年者なりと雖も、第三級以上の生徒に至りては、既に握手を以て接吻に代るほどの長年者少からず。英國學校の習ひとして、長

年者は各幼年者を保護する代り、幼年者は其の保護者なる長年者のために、朝飯を運び、衣服を刷き、靴を磨き、使命に奔る等諸般の役に服さるべからず、若し之を否む者は、一同のために、疾まれ虐げられて、一日も學校に安居するを能はざるに至る、是によりて英國學校の幼年生徒は又た佛國等に罕れに見る所の奉上勤務の念に厚きの特長あり。いまスロウ號に乘組みて週航の途に上らむと欲するは、第五級より第一級に亘りて、其數十四名にして乃ち左の如し。』
杜番、虞路これ皆な第五級員にして齡十四歳、其の父は各均しく市の富豪なる有地者にして、兩個は乃ち從兄弟なり。杜番は天性伶俐にして學業優等なるがうへ、一種貴族的の倨傲ありて、常に人の上に立たむを欲すれば、儕輩は渠を綽名して相公杜番といへり。されば渠と同級同齡の武安が平素儕輩の間に愛重さるゝを見て、杜番の常に之と相乖き相軋るの傾きあるは、勢ひの自から然るべき所なり。虞路に至りては、只だ常に其の從兄杜番の思ひ言ひ行ふ所を敬服感戴するより外は、他の異處なき平々の童子なり。
馬克太、亦た同級同齡にして市の巨商の子なり。静和にして思慮あり、勤勉に

して才智あり。

乙部と章格とは、十三歳と十四歳にして共に四級に屬し、各中等の才智を具す、其の親戚は皆な富饒なる高等官吏なり。

雅涅と左毗とは、共に十三歳にして同じく第三級に在り、前者は退職海軍士官の子にして、後者は富饒なる移住者の子なり。前者の一癖は小風琴を嗜みて暇あれば輒ち之を弄ぶ、斯の週航の途に就くに方りても、渠は第一に之を携帶して船に上れり、後者は快調にして常に冒險的生活を夢寐し、平生魯敏孫漂流記の外は殆ど復た他の書を讀まず。

次の二名は各十歳の幼年者にして、善均はニウジランド科學協會の會長の子にして、伊播孫は牧師の子なり。前者は尙ほ第三級員にして、後者は尙ほ第二級員に過ぎざるも、皆な將來有望の優等生徒なり。

次の二名は更らに年少にして、土耳、胡太、共に九歳に過ぎず、土耳は其の執拗なるをもて、胡太は其の大食なるをもて、各々著るし。皆陸軍士官の子にして第一級生徒なり。

此外更らに二個の佛國の子と。一個の米國の子とあり。米國の子は吳敦と呼び、齡十五歳一隊の最長年者なり、第五級員にして、杜番の如く才鋒銳利ならざるも、亦た同級中の優等者たるを失はず、幼より父母を喪ひて他人の手に人となり、最も深慮ありて常識に富めり。二個の佛國の子は兄武安十四歳、弟弱克九歳にして、其の父は北島の中央なる沮洳の地の排水工事を董督するために二年前此土に來りたる有名の工學士なり。武安は拔群の記憶力あり、又た非凡の同化力あり、聰明輕快活潑にして親切に、尤も年少者を憐れみて、廣く衆童子の心を得たり。弱克は從來第三級中の最劣等者にして、左毗と相並びて、同級中或は學校中第一のいたづら者なり、弱克は常に人をおかづき儕輩を欺き嚇すを喜び、平生只だ是等頑耍の手段を工夫するより外、復た他の念無きもの如くなりき。然れどもスロウ號が本土を離れてより以後は、渠の人となり俄然一變して、極めて謹直寡黙なる、まじめの童子となりたるは、他の諸童子の皆な怪しみ且つ訝かりて、其の故を解するに苦しむ所なりき。他の諸童子の

スロウ號の船員は副船長一名、水夫六名、料理番一名及び黑人の子にして莫科

と呼べる十三歳の給事一名にして、船長には船主雅涅氏自から之に當り、獵犬としてフハンと呼ぶ吳敦所養の亞米利加犬をさへ併せ載せ、拔錨は二月十五日の午前と定りぬ。既にして十四日の夕となるほどに、十四名の童子等は早くも打つれて船に上るに、船には副船長及び莫科の二名ありて、一行を迎せり、船長雅涅氏は明朝拔錨の際に至らざれば出で來ざるはづにして、水夫等は皆な更らに一杯のホイスキーを傾くるがため、陸に上りてをり、船には唯だ斯の二名を留むるのみなりしなり。既にして、副船長は童子等を各自臥牀に安寝せしめし後、他の水夫等を追ひて、亦た岸上の酒店に往き、ボーイ莫科は船首なる水夫室に退きて、早くも熟睡の境に入りぬ。

如何にして斯の事ありし歟、船は何時のほどにか纜解けて、潮水の引くがまに次第に洋心に流れ出でしを、知る者絶えてあらざりき。夜色黒く灣港を封じて物の色分明ならざるに、をりしも陸上より吹く地あらしの風、潮水を助けて船を驅りたれば、船は看す／＼獨り數十丁を流れ去けり。莫科はふと覺めしに、船の異様に動搖するに疑ひ惑ひて、甲板に走せ上れるに、即ち此の如きを

見たり。給事の叫び聲に驚き醒めて、吳敦、武安、杜番等數名の童子は蹶起して甲板に走せ上り、給事と俱に聲を合せて助けを呼びしが、功無かりき。船は既に三マイル以上も岸を離れ、アウクランド市の火光は、既に闇冥の中に没して見るべからず。童子等は武安の説と莫科の賛成とによりて、先づ帆を揚げて船の方向を轉じ、岸に返らむと務めしが、帆は太だ重くして童子等の力もて自由使用する能はざるより、船は却て是が爲めに益す陸に遠ざかりゆけり。船は既にコレピール岬を遶り、岬と大防壁島との間なる海峽を過ぎ、ニウジランドを離る、數マイルの洋心に流れ出でぬ。童子等は既に助けを陸上より得べきの望みなし、縦ひ搜索船の直ちに渠等を追ひて出でし有りとするも、其の此の如き暗中に、渠等の所在を見出ださむとは難かるべく、縦ひ能く視出だすとすも、其の此處に追ひ及ぶまでには、數多時間を費やさるべからず、而して渠等は其の間に又た幾多マイルを流がさるべし。唯だ渠等萬一の僥倖は、前方よりニウジランドに向ひて來る所の、何等かの船に邂逅して其れに救はれむと即ち是なり、是れ甚だ頼み難きの僥倖なりと雖も、莫科は直ちに前甲板の上

に燈光を掲げて、遠くより之を望む者のたよりと爲せり。幼年の童子等は幸に熟睡してをれば、徒らに之を驚かし怖れしむるの益無きを思ひて、喚び覺ますとを爲さず。武安等は百方術を盡くして船の方向を轉せしめむと欲したるが、皆な功無かりき。船は益す東へくと流れ去けり。俄かにして一點の火光、二三マイルの那方に見えぬ、其の白色なるは分明是れ走行中の汽船なるを知るべし、既にして又た一個は赤く、一個は青き、二個の燈光現はれ出でぬ、其の此の如く同時に二個を望み見るを得るは、其の瀛船の一直線に斯のヨットの如くかたに向ひて走せ來るものなるを推すべし。童子等は各必死の聲を揚げて、瀛船を喚びたるが、洶濤の音、蒸氣機關の響、及び是時次第に愈よ烈しくなれる風の聲は、相合して童子等の聲を没して、瀛船の上へ聞えしめず。瀛船の上にては、縦ひ童子等の聲を聞く能はざるも、スロウ號の上に掲げたる火光を見るを無かるべきやは。不幸にして船の突然一方に傾動するはづみに、燈籠を吊りし索断れて、燈籠は洶然海中に陥りたり。今は復た一物のスロウ號の所在を、闇中に標示するもの無し。瀛船は正さに一時間十二三マイルの速力もて走せつゝあり、

未だ幾秒間ならずして、瀛船はスロウ號の船尾を掠めて、船尾の上の飾り板を擦落し、低微なる撞觸をスロウ號に感ぜしめたるまゝ、驀然西方に走せ去りぬ。童子等は失望せり、船は益す東方に吹き去られぬ。既にして天明けぬ、眼界の中一片の帆影だも見えず、大平洋の此邊は素と船舶の往來割合に少きに、其の濠洲と亞米利加との間を往來する者は、皆な更らに北方或は南方を航すれば、童子等は終日一隻の船に逢はず、既にして夜は來れり、天氣は前夜よりも一層あれ模様にて、風は益す強く、東にくと吹きつゝさぬ。武安は其の齡に罕れに見る能力と勇氣とを顯はして、一同の倚頼する所となり、剛愎なる杜番をさへ其の指令を奉ぜざるを得ざるに至らしめたるは即ち是等の事情の間に於てなりき。渠は船の速力を左右するほどの航海上の知識を有せず、亦た諸種の帆を展用するに必要なほどの奮力を有さざりしと雖も、其の僅かに有する所の知識を善く使用して、常に船の傾覆破損を防ぎ、日又た夜、夜又た日、絶えず甲板に見張りをして、時々刻々、地平線上を凝望し、何等か眼界の中に來る所の助け手あらば、之を逸さじと務むるを、幾週間の久しきを通じて、曾て須臾も

懈らず、或は其の遭難始末を書きたるを數個の儘に盛りて、之を海中に投じ、或は常に幼年者を勵まして、其の失望喪氣に陥るを防ぐ等、皆な渠の卒先盡力する所にあらざる莫し、而して無限の西風は仍ほ依然として、船を東にくと驅り去りぬ。此より以後の事は、讀者の既に第一回に於て見たる所なり。蓋しスロウ號がニウジランドの岸を離れたる後、未だ幾日ならずして、更らに一大暴風の南太平洋を過ぐるあり、全二週間西より東に吹きつゝいさぬ、若し堅牢鞏固スロウ號の如きものに非ずば、船は已でに久しく怒濤のため打碎されしなるべし。

當夜スロウ號の失踪を知りしときの雅涅氏、及び其他衆童子の親たちの錯愕掛念は言ふもさらなり、渠等は直ちに二隻の小汽船を發して搜索せしめしが、翌日に及びて、皆な手を空しくして還りぬ。否な手を空しくして還るよりも更らに悪しかりしは渠等はスロウ號が汽船のために擦落されたる船尾の飾り板の零片を拾ひ得て還りぬ。飾り板の上には尙ほ「スロウ號」の數字の一半を留めて、讀み得べかりき、是に於てスロウ號の既に覆没して、衆童子の皆な溺亡したる

べきは、復た疑ふべき無き事實となりぬ。

却て説く武安等は船首のかたに、常ならぬ叫び聲起るを聞き、走せゆきて其の故を尋ぬるに、嚮きに巨濤のために洗ひ去られしと堅く信じたる短艇の、船頭やりの出しの支柱の間に介まりて、留まりをりしを、馬克太の偶然発見したりしなり。短艇は僅かに五六個人を載するほどの大さに過ぎざれども、今ま之を発見したりしは、童子等にとりて非常の便宜なり。然れども是がため、杜番と武安との間に、亦た一條の葛藤を生じたり。杜番は短艇の無事なるを見るより、直ちに韋格、乙部、虞路の三個と共に之を取り出だして、海上にくり下さむと欲する所に、武安は走せ來りて、「君等は何をか爲す」。韋格「そは余輩の自由なり」君等は斯のポートを下さむと欲するか、杜番「然れども君は之を止むる權利あらじ」。有り、君等は他の諸君を棄て、以て。杜番は武安の言をして詫らしめず「決して棄つるにあらず、余輩上陸の後又た一人再び之をこぞ返して、他の諸君を載せ去るべし」。然れども若し之をこぞ返す能はずば如何、石に

當りて碎けば如何。乙部は武安を排けて「退け、武安」。武安は肯て一步を退ぐか。否、ボートは第一に先づ幼年諸君の用に供へられざるべからず。若し是時吳敦の來りて調停する無かりせば、杜番の黨と武安の黨とは、茲に終に一場の争鬪をも啓くに至りしなるべし、吳敦は最も年長者にして、且つ最も静思沈慮あれば、密かに武安の説を是とし、杜番をなだめて、此の如く浪尙あらしき時に於てボートを下すも、徒らにボートを失ひ併せて人の命を殆くするの危険あり



るのみなればとて、百方論し止めたり。吳敦「スロウ號の坐礁せしは、六時ころなりと覺ゆ、如何武安」。武安「然り」。潮の全く落つるは何時なるべき。十一時ころならむ歟。恰好の時刻なり、然らば余輩は今より食事をなして、上陸の準備せざるべからず、或は海水を泳ぎ渡らねばならぬ處もあるべし、食後若干の時を経ずば、泳ぐに甚だ不便なるべし。是れ極めて有理の説なれば、ジャム及び乾餅を取り出だして、一同早飯をした、ゆめぬ、食事の間も武安は専ら善均、伊播孫、土耳、胡太等の幼年者を監視して、其の暴食を戒めぬ、渠等は殆ど全一晝夜の間、全く食を絶ちたれば、今ま陸に達したるの喜びに、驟かに勢ひつきて、急に其の空腹を満たさむとせば、爲めに病ひを生ずべければなり。潮の落ちかたは極めて徐ろなりしかども、兎に角に海水は次第に減少すると見え、船の傾歎は愈い著るしくなりぬ、然れども莫科が測量索を下して探り試むるに、船側の海水猶ほ八尺以上の深さあり、莫科は諸童子を畏怖せしむるを恐れて、密かに之を武安のみに呬やき告ぐるに、武安は又た密かに吳敦と計議して以爲らく、風は潮を支へて全く退かしむるを許さるに似たり、然りとて明日の退

潮の時まで待たむとせば、船は其の間に満潮に逢ひて、傾覆し或は粉砕すべし、故に渠等目下の策は、唯だ何人か索を持ちて岸に到り之を濱邊の石に約し、由りて以て斯の船を岸に引くの一法あるのみ。而して其の索を持ちて岸に到るの任には、武安之に當るべしと定まりぬ、勿論是れ武安の自から薦めて之に當れるなり。武安は斯の危険なる企を試むるに先だちて、船中にある所の浮囊を悉く取り出だして、之を幼年者に分ち與へぬ、萬一海水尙は深き時に、早く船を去らざるべからざるの急有らむとき、渠等は此によりて身を浮ぶとを得べく、然すれば年長者は船より濱邊に張る所の索を捉へて、隻手に幼年者を扶けつゝ、岸に泳ぎ到るを得べければなり。既にして十時を過ぐる十五分となれり、此より一時間ならずして、潮は其の最低度に落つべし、然れども舳頭の下に於て、海水は猶ほ四五尺の深さあり、縦ひ此より一時間を経るも、更らに數寸を減ずるに過ぎざるべし、船より三十間も前方に往けは、海底頗る淺くなるは、其の海面の黒く見ゆると、處々に岩頭の露出せるとに由りて明かなり、故に尤も困難なるは、船より三十間ほどの前方まで至るの間なるべし。武安は外衣を脱ぎ

て、中ぶどの索を擇みて、其の一端を把りて胸の邊に約しつけぬ。杜番等四名の童子も、武安が一同のために危険を冒して、此の如き重要な使命に赴かむとするを見ては、復た手を束ねて傍觀すべきに非れば、吳敦等と共に武安を助け、逐次其の索をくり出だすの勞に服さむと欲す。武安は一切の準備を了りて、將さに海中に跳り入らむとするとき、弱克は聲を揚げて號泣しつゝ、兄のほとりに走せよとて「兄うへ、請ふ往く勿れ」往く勿れ。武安「恐るゝ勿れ、弱克」と答へしまゝ早くも海中に跳り入りて、抜き手をさりて泳ぎはじめぬ。然れども風は正さに退潮と相逆ひ相擊つに加へて、海水凸凹せる岩礁の上に激盪して、盤渦をなせる處さへ多ければ、武安は早や次第に体疲れて、手足の働き自在ならず、俄かにして、渠の身は一大盤渦の裡に吸ひこまると見ゆたるが、「助け、助け」と叫べる聲を遺したるまゝ、忽ち没して見ゆずなりぬ。吳敦は一同と共に、直ちに索を手ぐりて、昏々として人事不省となれる武安を船の内に拯ひ上げぬ。幾ばくもなくして、武安は蘇息するを得たりしが、其の濱邊と交通せむと欲したりし企は、茲に全く望絶えぬ。兎角するうち早や正午を過ぎぬ、潮は

再び進しはじめぬ、浪は愈よあらくなりぬ。時正さに新月に向ひたれば、潮は前夜に比して、一層高かるべし、即ち満潮のときに至らば、船は其の膠着の處より浮び上がりて、他の更らに高さ巖頭に撞觸し、粉砕し、或は覆没するに終るべし、孰れの場合に遭はしむるも童子等は能く命を逃るゝと難かるべし。然れども渠等は復た施すべきの術無きなり、渠等是一同船尾に集立して、空しく一個又一個巖頭の次第に進潮の下に没し去るを瞻りてをり。加るに不幸にも、一たび北に吹きかほりし風は再び西に吹きもどりて、船を直ちに岸に擲たむとす、潮益すすみて、岩礁の上の海水益す深くなれば、船は必ず益す高く岩礁の上ののり上ぐるばかりなるべし。此より以往は、只だ上帝の大み心に在るのみ。童子等の斷續せる哀禱悃祈の聲は、畏怖號泣の聲と相間りて、高く天に揚りぬ。午後二時に向ふ比は、次第に進潮に擡げ起されて、傾斜したりし船の左舷は浮び上がりたるが、船首は猶ほ海底に膠着し、船尾は尙ほ岩間に介まりて自由なるを得ざれば、船は一頃又一頃來りて其の側面を撃つ所の浪に振盪されて、はげしく左右に動搖し、童子等は互ひに相抱擁して、以て纒かに跌倒を防

ぎたり、俄かにして、一堆の小山の如き巨濤あり、船の後邊に近く其の頭を撞起すると見ゆしが、忽ち大川を決する如き、すさまじき勢ひをもて、轟然船尾を來り打つと共に、岩礁の上は一面の沸泡噴沫をもて掩蔽され、船は一種の撞觸を感じて、突然昂起前進したりしが、轉瞬の間、既に沙嘴の一端なる沙場の上に在り、嚮に遠く望みたる一簇の茂樹の前列は、近く眼前二百尺の那方に在り。顧みれば船をこゝに推進したる巨濤は己でに退却して其の後には依然たる海水の岩礁の上に激盪迸射するを見るのみ

第三回

四邊の觀察 ○船中の食糧器具 ○灣北の岬
○海豹 ○ペンギン ○東方一條の淺碧色
○新に派せられたる四名の遠征委員

船は幸ひに巨濤に驅られて、一躍して岩礁の上を超越し、其の底板は勿論許大の損傷を蒙りたるにも拘はらず、無事濱邊に到るを得たるが、船の沙場に坐りてより、既に一時間以上を過ぐるも、未だ一個の人の影をも見ず。茂樹の那方には小さき川の流れありて、海中に入るを望めども、亦た其の上には一個の漁

舟の浮ぶある無し。吳敦「余輩は幸ひにして陸に達したり、然れども是れ一個の無人の野なるに似たり」武安「余輩のさし向き求むべきは、余輩殊に幼年者を庇護すべき屋宅なり、其の此地の何處の邦に屬するやの如きは、余輩が假りに身を托するの所を求めたる後ち、徐ろに探究するを得べきなり、先づ余輩をして此地四邊の光景を觀察せしめよ」。かくて武安は吳敦と偕に甲板を下りて、かの茂樹のかたに赴くに、茂樹は岩壁と川との間にありて、岩壁のかたに近づくに隨ひて愈よ益す鬱密し、其の中に分け入れば、多くの喬木は自から僵れたるがまゝに朽腐し、落葉は陳々相因りて、高く地上に堆積して、兩個の膝を没するばかり、閑々又た寂々、絶えて人の踪跡を見ず。然れども時に禽鳥の兩個の來るを見て、紛然として驚飛し去る有るは、其の既に人を識りて人の恐るべきを知る故なるべき歟。茂樹を穿ちて行くを十分間ばかりにして、岩壁の下に至るに、岩壁は直立二百尺、平面板の如くして、雷に洞穴の類の童子等が假りの棲居に充つべきもの無きのみならず、縁りて以て其の頂きに攀ぢ登るべき足がとりの罅隙さへある無し。因りて岩壁の下に沿ひて又た南のかたに行くと

半時間許するに、嚮きに望める所の川の右岸に出でたり。兩個は岩壁の頂きに登らば以て四方の光景を一目の下に俯覽するを得べしと思ひて、此に至りしなるが、岩壁は依然峻削屹立して、路は早く此に盡きたれば、兩個は僅かに、川の此方の岸は美木鬱蒼たるに反して那方の岸は一面の平原にして全く青緑の色無きを、看取したるのみにて、ひとまづ船に歸り來れり。兩個は一同に其の見たる所を語りて、乃ちさし向きは仍ほ船を以て一同の起居の所となすの得策なるを説けり。船はいたく龍骨を破損され、且つ其の体傾欹して穩坐すべからざるも、尙ほ以て一時風雨を庇遮するに足れり。武安等は先づ一條の繩梯子を取り出だして、之を船の右舷に懸け、以て幼年者も容易に甲板より沙場に上下出入するを得るやうにし。莫料は左毗の助けを假りて、其の多少知得せる所の料理法によりて晩飯を準備し、一同に薦むるに、一同はニウシランドを離れてより以來、久さくにて始めて少しく心を安じて食味を味はふを得。善均、伊播孫、土耳、胡太等の無邪氣なる幼年者は早や時々嬉笑の聲をさへ發するに至りたり。唯だ怪しむべきは、平素學校中第一のいたざら者と稱せられたる武安

の弟弱克は、善均等の此の如く愉快たるを見るも、獨り別に一隅に退きて悄然として群を離れてをり、或は其の模様もようの常ならぬを見て、其の故を怪しみ問ふ者あるも、渠は顧みて他を言ふのみ。食事畢れば、一同は廿餘日來の疲れに早く睡氣を催して、各自臥牀に退き寝ねたるが、武安、吳敦、杜番の三個は萬に一つ猛獸蠻人などの不意の來襲あらむを虞れて、更るく甲板に見張りして、以て夜を徹せり。翌日は朝まだきに一同起き出で、上帝に感謝の詞を捧げたる後、是日の事務にかゝりしが、第一に先づ爲すべきは、船内にある食物其他を精査するに在り。食物は乾餅の外、乾菓、鹽漬の豚肉、鷹づめ、燻牛肉、鹽漬の魚等、儉約して之を用ふれば略ぼ二箇月を支ふべし。然れども渠等は斯の限有るの食物を以て、期無きの將來を永く支ふべきにあらざれば、渠等は或は銃獵じゅうりやく或は漁業りやうぎやうに由りて、其の食物を補給するの計を爲さるべからず。因りて先づ幼年者には、船内に多く有る所の釣絲を授けて、莫科をして之に隨はしめ、濱邊に往きて釣魚を試みしめ、年長の童子等は船内に留まりて諸物を點檢するに、乃ち其の目左の如くなりき。

大小の帆布、繩索類、及び鐵鎖、錨碇等一式、是れ一應斯の船に具へられし者の補欠として別に備へられしもの。
 投網、釣絲等の漁具、大小若干。
 施條銃八個、射鴨銃一個、連發短銃一ダツン、硝包三百個、各二十五磅づゝの硝藥を装れる木函二個、鉛塊及び大小鉛丸若干。
 夜中の信號に用ふる狼火具一襲、船上に具へたる二個の大砲に装るべき硝包、及び彈丸三十個。
 食膳及び庖厨に用ふる所の器皿、鍋、釜等は、二十餘日のあらしの間に毀損したる者の少からざれども、現存のものゝみにても、猶ほ童子等今後の用に供して十分餘有るべし。
 毛絲、綿絲の織物、フランネル及びリネンの類、亦た多く之れ有り。
 臥具、大小の蒲團、枕の類、童子等の數に視べて餘有り。
 此外晴雨計二個、百度わりの寒暖計一個、時辰表二個、遠距離に通話する喇叭。望遠鏡三個。コムパス大一個小二個。將さに來らむとする暴風雨を豫示

する暴風雨計一個。英國旗若干。信號旗一式。木匠器具一式。針、

四〇

絲、鉗鈕

*書籍室に

は英佛二

國の著名

なる旅行

者の遊記

胃險譚等

若干あり。

又た筆、

鉛筆、イ

ンキ、紙、

並に今一

千八百六

十年の曆一册あり、馬克太は此より斯の曆に就き、日を逐ひて有りし所の事



圖數枚、これは目下童子等に用
無かるべきも別に全世界圖一枚
あり、是れ大に用有るべし。*

マツチ、
及び燈
石火鎌
若干。

ニウジ
ランド

沿岸の
詳細地

を記さむとす、又た金貨にて五百磅の財あり。酒類の時へたる樽は、破漏し
て其の實を亡ひしも少からざれども、尙ほ葡萄酒及びセリー百ガロン即ち二
石四斗、ジン、ブランデー、ホイスキー、五十ガロン、麥酒無慮二十五石許
を剩し有せり。

之を總ぶるに、童子等は若干月の間は兎に角に百事不足を告ぐるを無くして生
活しゆくを得べし。正午に及ぶ比はひ、幼年者等は多量の貝類を拾ひ得て、莫
科と僭に歸り來りたり。莫科の説に據れば、岩壁の一處に數千の鴿の群集しを
るを見たりと、因りてかねて銃獵を嗜みて且つ多少の熟練ある杜番は、他の夥
伴を率て明日往きて之を獵すべしと議定したり。中飯は幼年者等の拾ひ來りた
る貝類を第一の主品とし、其の他は些の燻牛肉と、川より汲み來りたる水に幾
滴のブランドーを注ぎたる者とのみなりしが、一同は皆な舌を鼓ちて貝類の珍
味なるを賞翫せり。午後は船体のさし向き修繕を要する所にして、且つ童子等
の手を以て修繕し能ふ所の破損處を修繕し、幼年者等は川に往きて釣魚を試み
などして、打ち過ぎたり。晩飯の後は一同直ちに寢に就き、是夜は馬克太、韋

四一

格の兩個更るゝ甲板に見張りせり。

抑も此地は島なるか大陸なるかとは。武安、吳敦、杜番等年長者の此地に漂着して以來、常に關心しつゝありし所の第一問題にして、渠等は屢々是がために首を聚めて、其の意見を聞はすことあり。然れども兎に角に此地は熱帯に屬せざることは、かの茂林中の木に太平洋中の赤道國に見るべからざる柏、樺、松、檜、山毛櫸等多きを觀て知るべきなり。且つ地上は既に落葉のために蔽はれて、松檜の外殆ど復た其の青翠を持するもの無きを觀れば、此地はニウジランドよりも更らに南に偏りたる高緯度に在るやも、未だ知るべからず。果して然らば、其の冬は更らに一層の嚴寒を齎らすを期せざるべからず。今まは三月の中旬なれば、四月の下旬に至るまでは、尙ほ或は好天氣の打ち續くをも望み得べきも、五月即ち北半球の十一月より以後に及びては、或は意外の險惡なる天氣に遭逢せむも料るべからず。故に渠等は此より六週日内外の間に於て、去留ともに其の運動を成就するを要す。渠等は幾回の商議を経たる後、兎に角に、先づ灣の北端を界斷する所の岬頭の高地に攀りて、此地の模様を觀察し、其の觀

察の結果によりて、復た計議する所あるべしと定め、其の觀察の任には武安之に當るべしと定めたり。此の間武安と杜番とが屢々互に其の意見を異にして相反目するを、吳敦の毎ねに間に居りて調停せるは、言はむもさらなり。岬は船の在る所と相距ると、直徑五マイルに過ぎざるべければ、濱邊の曲折を算するも、武安の踏過すべき路程は七八マイル即ち三里内外を出でざるべし。岬の斗出したる頭は、海面を抜くと三百尺以上なるべく見ゆれば、少くとも傍近幾マイルの間の光景を展望するを得せしむべし。不幸にして三月十二日より天氣再び曇りはじめ、雨さへ屢ばふりたれば武安は其の探檢の途に上るを能はず然れども時は決して空費されざりき、渠は此の間に於て、水夫等の行李の中より發見したる衣類を取り出して、莫科と共に不手ぎはながら之を縫ひ縮めて、童子等の身に稱ふやうになして以て將さに來らむとする冬を禦ぐの準備をなせり、他の童子等も亦た爲すを無くして徒らに日をば送らざりき、幼年者等は雅潔或は馬クスの監視の下に、或は川に漁り、或は濱邊に貝類を拾ひて、自から勞作すると共に自から歡娛せり。渠等は其の双親を思ふ毎に、悲哀の情胸を塞

きて、涙を催すに至らざるには非りき、然れども渠等は未だ曾て再び其の父母を見るの望み無しなどおもふ念の、其の頭中に浮びたるをあらざりき。杜番、草格、乙部、虞路の四名に至りては、日に獵犬フハンを従がへて銃獵に出であるきて、他の童子等と借にあるを幾ど稀れなり。渠等の獲ものの中には、鷓鴣、鴨等一同の珍味として賞翫せる所の者も多かりしが、亦た莫科が之を奈何ともする能はざる所の鷓鴣、鷓鴣等の類も少からざりき。

十五日に至りて、天氣も稍や霽に向ひ、晴雨計も亦た明日の快晴を豫示したれば、武安は是日より準備をなして、翌朝は味爽起き出で、其の探檢の途に上りたり。渠は護身の用として一條の箒、一個の連發短銃を携へたる外、其の帯に繫けたる小さき袋子の裡には、若干枚の乾餅、些の鹽漬の肉、及びブランダールと水とを調合して盛りたる一個のフラスクを納め、又た一個の望遠鏡を携へたり。渠は行く途一時間にして、既に杜番等の足跡の未だ及ぼざる所に達して、已でに路程の半ばを來りたり、渠は心に若し此の如くにして進まば八時には岬に達するを得べしと算したり。然れども此邊より、岩壁と海際との距離次第に

縮まりて、道の幅次第に狭くなり、之に加るに、是までの平軟なる砂場とは異なりて、脚下は一面の凹凸せる堆崕、蒙茸たる海草團となりたれば、跋涉の困難なるは言ふもさらなり、或は靴を脱して、膝を没するばかりなる海水の中を徒渉せるも、雷に一二所のみならず、或は足を失して磯上に跌倒したるも、亦た三五次に及びたり。渠は十時に至りて、即ち豫算より二時間を遅れて、やうく岬の下に達したりといはれ、讀者は武安が後の三四マイルを跋涉するに、如何に困苦を極めしかを推量するに難からざるべし。武安は石の上に腰をおろして、其の袋子の裡より、食物及びフラスクを取り出だして、其の飢渴を療しつゝ、熟ら四邊の光景を看るに、海中には無數の魚族波上に盤渦を印して潜遊し、其の間に二三隻の海豹の出沒嬉戯するあり、渠は之を見て此地の、其の是まで思ひをりしよりは、更らに高緯度に在るを推斷せり。をりしも颯然聲を成して頭上を過ぐるは、ペンギンと呼べる鳥の群にして、斯の鳥は南極地方に於て特に見らるゝ所のものなり。武安が此地を以て意外の高緯度に在るものとなせる推斷は、益す確かとなれり。

休息すると一時間ばかりにして、武安は再び身を起こして、岬に攀りはじめしが、岬は無数の巨岩大石の累積して之を成したるものなれば、其の岩石より岩石に つたはりて、爬登るとの困難なるは、亦た常に非りしが、百難に撓まざる武安は、やうくにして其の頂きに達するを得て、先づ望遠鏡を把りて東方を展望するに、灣に面して屏立せる一帯の岩壁及び己れの現に立てる所の岬頭の背後は、皆な内地に向ひて陵夷走下し、内地は只だ是れ一平の坦野にして、鬱蒼たる茂林之を蔽ひ、茂林の間を破りて此處彼處に隠見する川流は、皆な其の末海に入るものなるべし、武安が展望せる東方左右十一二マイルの間は只だ斯の如きのみ、更らに北方を展望するに、武安の脚下より七八マイルの間は、濱邊一直線に打ち續き、濱邊の窮まる處に、亦た一帯の岬ありて之を界斷し、岬の那方には沙漠の如き廣遠の砂場ありて、海に沿ひて蜿蜒す、又た南方を回顧すれば、武安が立てる所の岬と相對して灣の他の一端を成す所の岬の那方は、濱邊次第に南東に折れて、濱邊の内がは、一面の沼澤なり。則ち若し此地をして一個の島ならしむるも、其の一大島なるを知るべし。武安は更らに望遠鏡を舉

げて西方の海上を眺望するに、正さに西に傾きたる太陽は斜めに波面を射て、搖光目に眩き中に、三個の小さき黒點ありて海上に凸出するを見る、武安は初め覺えず「船」と叫びしが、熟視するに及びて、其の不動なるを知り、是れ三個の小嶼なるべきを料りたり、小嶼は此處と相距ると十五マイル内外なるべし。既にして二時となれるに、武安は復た久しく此處に留まる能はず、將さに岬を下らむとしたりしが、其の下り去るに先きだちて、更らに一たび望遠鏡を取りて東方を展望せり。蓋し太陽の益す傾きて、其の光線の射點變ずるにつれ、嚮きには見ると能はざりし所のもの、今は見を得るやうになれるも、或は有るべしと思ひたればなり。武安の爲せし所は徒勞ならざりき、眼界の盡くる處茂林の梢の那方に、北より南に横曳せる一條の淺碧色ありて、遠々地に天際に浮出せり、武安は大に疑ひ惑ひて「是れ何物なるべきや」と獨語したるが、復た之を熟視して「海、然り是れ海なり」と叫びて、望遠鏡は殆ど渠の玉より落ちむとせり。此より十五分の後は、渠は既に岬を下りて磯上に在り。五時には無事スロウ

に歸り着きたるが、一同は皆な領を引て渠の歸るを待ちてをり。是夕晩飯を
りて後渠は一同に其の觀察の結果を語り、東方亦た海ありとせば、此地の大
に屬せずして、一個の島なるは、復た疑ひ無きよしを告ぐるに、一同の失望
膽は言はむもさ
らなり。然れど
も常に喜びて武
安に反對する杜
番は一には武安
の言ふ所に反對
せむと欲すると、
二つには武安の
言ふ所の成るべ
く實ならざらむ
を希がふとより、*



四八
是れ或は武安
一時の幻視なり
しならむも知る
べからず、己れ
は自から往きて
其の海の有無を
探視したる後に
非れば、之を信
する能はずとい
ひ、杜番に黨す
る諸童子は皆な

之に賛成し、吳敦も亦
た、是れ第一の重要な
問題なれば、更らに
之をたしかむる爲めに
東方に遠征して其の海
の有無を探視するを可
とすといひ、遂に遠征
委員として、武安、杜
番二人の外に章格左
の二人を遣はすととな*



三月は既に逝きて、四月の一日となりぬ。更らに一ヶ月せば冬當さに來るべき
に、此ごろの寒さの日にまして甚しくなるは、其の冬の如何に猛烈なるかを想
像するに餘有り、縦ひ此地をして果して大陸に屬せしめて、童子等は東方の人
あるかたを尋ねゆくとするも、渠等は冬過ぎて暖和なる氣候の回へり來るを待

四九
*りたるが、翌日
より雨再びふり
出で、連日休
まず、一同は或
は船体の破損處
を修繕し、或は
雨の小歌を見て
銃獵に出で、川
に漁りして、以
てくらす間に、

たざるべからず。即ち此より五六個月は仍ほこゝに留まらざるべからず。而してスロウ號の破損處は、日炎雨淋のため、其の罅隙日に益す大きくなりて、到底此より五六個月の間其の体を全くして、童子等を庇護する能はず。故に遠征委員は東方に於て、海の有無を探視すると共に一同の栖居に適すべき處を求め、若し已む無くば、新らしく家を建つるの計をもなさざるべからずと議定せり。是日晴雨計は俄かに昇りて、明日以後の快晴を豫示し風も亦た全く死ぎたれば、四名の遠征委員は直ちに發足の準備をなし嚮きに武安が望み見たる海色は、此方の濱邊より六七マイルの距離に在りしといへば、此處より往復一日乃至二日を費やさば十分なるべきに似たるも、不知案内の道をゆく者なれば、不測の障碍あらむを慮かり、每人四日分の食物を負ひ、各一個の施條銃と一個の連發短銃を撃へ、外に斧二個、懷中磁石一個、望遠鏡一個、毛布數枚、マツチ及び磁石、火鎌若干を携へたり。吳敦は自から一行に伴ひて、武安と杜番との間を調和したしと思ひたるも、然かしては、内に留まりて幼年者を看護すべき者無きにり、心ならずも其の念を斷ちたるが、渠は武安を人無き處に招きて、

くれぐれも遠征中杜番との不和合を生ぜざるやう説き諭して、武安が決してさる事あらざるやう自から戒しむべしと誓ふに至りて、纒かに心を安せり。日没前には天全く霽れて、蒼穹復た一點の雲無く、夜に入りては南半球の群星宿燦然として各光を放つ中に就て一きは目を惹くは、特に南極地方に於てのみ仰ぐことを得る南方十字星なり、吳敦等諸童子は、明日發足せむとする四名の遠征委員の前途の身のうへを氣づかひて、一同悵然たるをりから、不圖首を擧げて是等の群星宿を仰ぎ見たるときは、皆な忽ち其の父母の事故郷の事を憶ひ起して、幼年者等は皆な宛がら寺院の十字架の前に跪拜する如く、南方十字星の前に跪拜して、前途の好運を禱りたり。

第 四 回

東方一面の茂林 ○岩壁の背後 ○小川 ○徒
 紅川 ○人の手もて作れる小舎 ○湖 ○小川 ○徒
 小川 ○繫舟所 ○舟材の斷片 ○樹皮の上
 彫られたる數個の字 ○一大洞居 ○前住者の
 遺物 ○本島地圖

翌二日朝七時四名は、吳敦の勧めにより獵犬フハンを従がへて、スロウ號を出

で、遠征の途に上りたり。是日は北半球の十月に屢ば見る如き、小春の好天氣にして、四名は先づ其の門出のさいさきよきを祝しつゝ、濱邊を北に進み行けり。渠等は己むなくば、嚮きに武安の攀りたる岬のほとりまでゆきて、岩壁に登るべき道を求め、是より其の背後に下りて、武安の望み見たりといふ海色のかたに一直線に進み行かむと欲するなり。スロウ號の所在地より以南には、岩壁の頂きに登るべき道無きは、武安と吳敦とが探究して既に明かなる所なればなり。四名は岩壁の下に沿ひて行くを一時間ばかりにして、前頭に進みたる左岬のフハンと共に忽焉見えたりたるに、他の三名は驚きて之を求めむと欲するうち、左岬の喚はり叫ぶ聲と、フハンの高く吠ゆる聲、相和して聞えたり、三名は聲を尋ねて其の處に走せ至るに、左岬は獵犬と共に、岩壁の一巖折を成せる所の陰に於て、岩壁の破裂痕の前に立ちてをり。蓋し寒氣熱氣の作用によりてか、或は濕氣の浸潤したりし爲めか、岩壁の面、頂きより地に達するまで一條の縦裂痕を生じ、縦裂痕の裡面は寛濶にして、人の身を容れて餘有るに、又た四十度乃至五十度の斜面を成し、其の斜面のうへは凸凹一ならざれば、恰

好の足が、りを爲すべきに似たり。杜番は武安が危険なりとして止るをも、聽かずして、早やこれを登りはじめたり、他の三名も續いて登りゆくに、幸にして無事相踵で岩壁の頂きに達するを得たり、三名の頂きに達したるときは、杜番は既に望遠鏡を取り出だして、熱心東方を展望しつゝありき。韋格は之を見て「何等か水の色を見るか」杜番「否な」。韋格は杜番がわたす望遠鏡を受けて、亦た展望するを良久くせるが「眼の届く限り、只だ一面の茂林を見るのみ」。武安「此處はかの岬より百尺内外も低くしと見ゆれば、其の眼界の更らに限られて、かの岬より望み得る所を望む能はざるも宜べなり、若しかの茂林を突貫して、一直線に東に進まば、余の見し所の果して誤れるや否やを證するは甚だ容易なり」杜番「そは極めて勞多くして、而かも余は其の勞の甚だ無用なるを思ふ」。武安「然らば杜番、君は此處に留まりて待て、余は左岬と二人して往て之を探り究めむ」。韋格「余等も勿論同行すべし、來れ杜番、余等をして更らに進ましめよ」左岬「然り、然れども先づ腹をこしらえて後」。四名は各其の携へたる處の食物を取り出だして、十分早飯をしたためたる後、再び岩壁を東

に下りはじめぬ。

最初一マイル許の間は、平軟なる草原にて、此處かして三五個の小石丘の藪
 苔に被はれしが散點するあるのみ。其の間亦た一二の灌木叢あり、灌木は柘
 一ベリ一等、極寒の地方にも繁生するを得るといふたぐひの者に限り。既
 にして茂林の中に進み入るに、幾多の僵木は僵れたるがまゝに朽腐し、密艸
 やがうへに雜生して、童子等は手づから榛莽を斫り開きて、然して後ち始めて
 進み行くを得るも、屢ばなり。故に其の疲勞の甚だ大にして、進行の極めて
 遅きは、言はむもさらなり。數時間を費やして、僅かに三四マイルを徑り得た
 るのみ。午後二時に至りて、一條の淺き小川の上に出でたり、童子等は草を藉
 きて暫らく此處に休息せるが、川の水は清くして底の石を見はし、且つ其の水
 面に一介の枯枝一片の草芥をさへ泛べざるは、其の源の此處を去る遠からざる
 とを推すべし。川を横ざりて、幾個の平石あり、點々互に同じ距離をもて水中
 に立ちたるは、宛がら人の手を以て、故さらば按排して、徒疋を作りたるにも
 似たり。川は北東に向ひて走れば、是れ或は武安が嚮きに東方に望見せし所の

海に注ぐ者ならむも、知るべからず。故に童子等は、且らく試みに川を追ひて
 其末の注ぐ所を檢討すべしと議決して、先づ徒疋をわたりて對岸に到りたり。
 是れ下流に至らば、其の幅員の次第に廣がりて、或は之を濟らむと欲するも、
 能はざるをあらむを慮かりたればなり。川はよりく密樹のために其の水面を
 蔽はれて、其の所在を失ふとあるも、童子等は多くの困難なく、其の岸に沿ひ
 て下りゆくを得たり。川は急轉慢折、一にして足らざりしが、其の大体は依
 然東方に向ひて走りたり。然れども其の末は尙ほ甚だ遠しと見えて、水の流れ
 は依然として徐かに、其の幅員は依然として些しの廣さをも加へず。五時半に
 至りて、童子等は遂に斯の川の全く北方に走るものなるを發見して、大に失望
 落膽せり。渠等は川を捨て、再び路を東方に取りて進み行けるが、密樹鬱葱
 として晝尙ほ暗き處多きに、長艸は往々渠等の頭を没して、互に相喚び相應じ
 もて行かざれば、動もすれば相失はむとするの懼れ有り。既に七時に垂んとせ
 るに、未だ茂林の外に出づる能はず。武安杜番は相議して、今夜は此處に宿し
 て、明日復た其の進行をつゝくべしと決しぬ。

是時天已昏に黒くして、十分物の色を辨する能はざりしも、一方に一團の茂樹ありて、下枝四面に廣がり延びて、恰かも屋蓋の状を成せるを望み見て、一同其の中に分け入りて、持ち來りたる毛布を展べ、燻牛肉乾餅等取り出だして、各飢を療せしが、未だ幾ばくならずして、一同横に臥すどそのまゝ熟睡して、前後も知らずなりになり。獵犬フハンは戸を守りて、茂樹の外に見張りせしが、是れさへ遂には目を合せて動かさずなりぬ。

翌朝七時、一同は眼覺めて、此處をたち出でむとせしが、獨り先づ茂樹の外に出でたる左毗は、忽ち恐ろしき聲を揚げて、「武安、杜番、章格、どく來りて之を見よ」。三個は驚きて、走せ出づるに、左毗「どく來りて、昨夜余輩の宿したる處の何處なりしやを見よ」。童子等の宿せしは、昨夜想像したる如き、茂樹の中にはあらずして、一個の小舎の中なりき、小舎は樹の枝を編みて屋蓋となし亦た壁となしたる粗製のものにして、黒人が稱してアジョウウパとなす所のものなり。創建以來、已でに許多の星霜を経たりと見え、屋蓋及び壁ともに、僅かに其の形を存するばかり。杜番「さては、此地は、無人の郷に非ず」。武安「少く

ども、昔しは無人の郷に非ざりき。章格「此によりて昨日の徒缸の原因も亦た判然せり」。然れども此地にして若し野蠻なる黒人の住む所ならしめば、童子等は又た更らに一段の憂へを加へたるものと謂はざるべからず。童子等は再び小舎の中に入りて、仔細に檢尋するに、一面に地上を蔽ひたる枯葉の底に於て、一個の土器の破片を拾ひ得たり、是れ亦た一個の人工的遺物なり。一同は此處を出で、磁石を手にして一直線に東方に進み行くに、十時に向ふ比はひ、やうく茂林の外に出づるを得たり。打ち看れば、茂林の外は一面の平地にして、たち麝香艸へザ一等叢生し、八丁許の前方には、一帶の白沙、限り無きまで長く左右に曳きて、白沙の上には武安が嚮きに望み見たりといふ海の千波萬浪、徐ろに打ち寄せ打ち返す。

今は復た疑ふべき無し、此地は大陸にあらずして、一個の島なり。童子等は平地を徑りて邊濱に赴きつ、白沙の上に坐を占めて、早飯をしたまめしが、一同愁然として、言を發する者さへあらず。既にして食事畢りしかば、杜番は先づ身づくろひして、「いざ、打ちたゝむ」。蓋し渠等は若し早きに及びて歸途に就か

ば、或は日没以前にスロウ號の在る所に達するを得べし。四個の童子は、最後に復た齊しく首を回して、恨めしげに海の面を看たるまゝ、再び茂林のかたに返らむとするに、如何にしけむ獵犬フハンは、突然として海際に走せゆしが、忽ち口をさし入れて、海水を飲みはじめぬ。杜番は從ひゆきて、亦た掬して之を飲むに、水は些しの鹹氣無き純然たる淡水なりき。即ち此地の東方に横はれるは、海には非ずして一個の湖なりしなり。

是れ島か是れ大陸かの一問題は、此に至りて復た不分明の中に落ちぬ。斯の湖の看わたす限り、前方及び左右二方、殆ど涯無しと見ゆるまでに甚だ大なるは、或は亦た此地の大陸なるやを疑はしむる者も無きにあらず。武安「若し大陸ならむには、應に是れ亞米利加なるべし」。杜番「余は初めより、しか信ぜり、余の説果して誤らざりしに似たり」。武安「兎に角に、余が嚮きに望見したるは、やはり水の色なりき」。杜番「然り、然れども是れ海にはあらずなりき」。若し此地をして大陸に屬せしむるも、童子等が人有る郷を尋ねて、東方に旅行せむことは、數月の後、春暖の候の回へり來るを待ちてならざるべからず。既

に數月を此地に消さざるべからずとせば、西方の濱邊に於て、其の栖宅に適當なる洞穴の類を發見する能はざりし、渠等は斯の湖のほとりに於て、何等か其の棲居に適當の處ありや無しやを探究せんとも、亦た緊要の一事なり。加るに、かの徒疋の如き、小舎の如き、曾て人の此地に住みしもの有りしを證するの遺迹多く此邊に在するを觀れば、更らに仔細に探討せば、或は又た更らに幾多前人の遺物を發見するを得て、童子等が進退を定むるの參考とすべき良材料を得るをもあらむ歟。四個の携帶せる食物は、尙ほ四十八時間を支ふるに足るべく、天氣も亦た幸ひに激變を來すべくも見えず。故に四個が目下決すべき問題は唯だ是れなり。曰く渠等は此より北に向ふべきか、南に向ふべき歟と。蓋し北に行くは、スロウ號に益す遠ざかるものにして、南に行くは、稍や之に近づくなり。故に渠等は南に向ひて、湖邊を探究しゆくべしと定めたり。

湖邊は一樣の平地打ちつときて、歩行に困難少なかりしかば、四個は大なる疲労もなく、是日十マイル許を行きて、歇まり宿せり。途中曾て一縷の煙の樹外に騰り、一雙の足跡の砂上に印するを見ざりしは、此地已に久しく人の住む

もの無きを料るべし。又た曾て一個の猛獸、或は食草的動物に逢はず。唯だ二三回一種の巨鳥が、茂林の裡に出没するを望み見たり、左毗は初めて之を見たり。武安「若し渠等をして駝鳥ならしめ、此地をして大陸に屬せしめば、是れ極小駝鳥」。ず亞米利加なり、亞米利加は即ち尤も駝鳥多き處なれば。四個は午後七時復た一條の小川のはどりに出でたり、川は分明湖より流れ出づるものなり。此の時天漸やく晚れたれば、明朝を待ちて川を濟るかた安全なるべしとて、乃ち是日は此處に歇まり宿せるとせしむるなり。四個は獵犬と共に、沙上に横臥して眠りしが、翌朝目を開けば、既に七時を過ぎたるに、驚き起きて、先づ川の對岸を展望するに、川の那方は眼の届く限り、只



だ是れ一面の沼澤なりき。一同は相顧みて、昨日強て川を濟らむには、直ちに斯の沼澤の中に陥るべかりしに、此方に歇まり宿せるは、幸なりしと相賀しつゝ、川の右岸に沿ひ、流れを趁ひて進み行くに、渠等の右方に一帶の岩壁ありて、遠方より來りて次第に隆起聳立するを見る、是れスロウ灣の上に屏立する岩壁のつゞきなるを莫きかとは、一同の齊しく心に思ひたる所なりき。スロウ灣とは、童子等が此のころ、スロウ號の漂着せる所の灣を、假りに稱する標語なりき。章格は忽ち叫びたり、「看よ、あれを看よ」。章格の指さすかたを視れば、是れ繫舟の所となしたる者なる



六二
 べし、幾多の石の、人の手を以て累積されたるが、半ば残破しがらも、猶は舊
 時の形を存してをり。武安「此邊に曾て人ありて住みしは、益す明かなり」。杜
 番「然り」と答へつゝ、繫舟所の一方に、茂草の間に横はりたる幾多の木片を
 指させり。是れ當時の舟の破片なるをば、其の形に由りて甚だ明かなるのみな
 らず、舟の龍骨をなしたりし者の破片なるべしと見ゆる木片の一端には、猶ほ
 一個の鐵環ありて附着せり。四個は宛がら、曾て斯の舟を用ひ斯の繫舟所を築
 きたる人の、今まにも突如として、渠等の面前に現はれ出でむとする如く思は
 れて、各四邊を看まはしつゝ、默然として立せり、然れども四邊は閑として、
 一個の人の影も見えず。唯だ蕭々たる水の軽く岸を洗ひて、悠然として逝くあ
 るのみ。舟の此處に棄てられてより、既に幾多の年所を経たると覺しく木片は
 皆な蘚苔に蔽はれて、鐵環は通身赤く鏽を生ぜり、而して曾て斯の舟を用ひし
 人は、今ま安くに在るや、渠は何許の人にして、何様の終りをなせるや、是れ
 四個が皆な知らむと欲して、知る能はざる所なり。
 既にして獵犬フハンの異様なる動作は、又た忽ち童子等の驚きて、目を注ぐ所

どなれり。フハンは双耳を張り、尾を掉りつゝ、しきりに地上を俯し嗅ぐは、
 何等か異常の臭を聞きいだせしなるべし。既にしてフハンは足を擡げ、口を開
 きて、暫らく猶豫ふさまなりしが、又た忽ち一方なる樹叢を望みて、まっしく
 らに走せ去りたり。樹叢は湖の畔に於て、岩壁の下に傍て立てる所なり。一同
 はフハンの後に従ひて、樹叢のほとりに至るに、前頭に一株の舊き山毛櫨あり
 て、其幹の皮を刻みて、

F. B.

1807

の六字を記るしあるを見たり。童子等が足を停めて、之を諦観する間もなく、
 フハンは再び少しく却走して、岩壁の角を遶りて、忽ち見はずなりぬ。
 武安「此處へ、フハン、此處へ」と喚びたるがフハンは歸り來らず、那方にあ
 りて、俄かに常ならぬ聲して頻りに狂ひ吠ゆる響聞ゆ。武安「一同一緒にかた
 まりて、自から備らざるべからず」。この言杞憂にあらざりき、或は猛獐なる恐
 るべき黒人の、近く渠等を窺ふもの有るなるやも料るべからず。童子等は各武

器を提げて、一團となりて、かのフハンの聲するかたに走せゆくに、岩壁の角を遶りて行くを、未だ數間ならず、杜番は忽ち足を停めて、地上に遺ちたる一個の物を拾ひあげぬ。是れ一個の鋤なりき、而かも是れ未開人の作りたるものに非ず、必ず亞米利加或は歐羅巴、文明人の製に係るものなり。其の嚮きの鐵環と同じく通身赤く鑄びたるは以て其の亦た幾多の年所を経たるを推すべし。更らに意を留めて其のほとりを視るに、岩壁の下に、當時耕作せし迹と見え、髣髴として溝の痕あり。又た一どかたまりの芋の、今まは野生のものど變じて、肆まゝに蔓延したる有り。時に再びフハンの哀しげに叫ぶ聲聞えしが、フハンは忽ち童子等の前にかけて來りて、いたく激昂したるさまにて、童子等の顔を仰ぎては、往きつ反りつ、走せまはる、宛がら童子等に已れに隨がひ來るべしと催促するものに似たり。童子等はフハンの導くがまゝ、隨ひゆくに、やがて一簇の荆棘灌木雜生せる岩壁の下に至りて、止まりたり。童子等は心を用ひて、恐るゝ荆棘を抜き、灌木を拂ふて、其の中を窺ふに、岩壁の面に、黝然として黒く見ゆるは洞の口なるべし。武安は手ばやく枯草を聚めて、之に火を點じ、

洞中にさし入るゝに、依然として熾燃せるは、洞中の空氣の呼吸に害なきを知るべし、武安はまた川の上に往きて、松樹の枝を折り取り來りて、之に火を點じて、早速の火把となし、之をかざして、一同相率ゐて洞中に進み入るに、口は高さ五尺幅二尺に過ぎざるも其の中は呀然として、二十尺四方の一度室を成し、地上は一面に美しくしき乾沙平布して、毛氈を履むが如し、室の口の右方に、一個の粗製の卓子ありて、卓子の上には、土製の水さし一個、巨なる貝殼數個あり。貝殼は蓋し皿として用ひられたるものなるべし。又た一個の缺折したるナイフの赤く鑄びたるがあり、二三個の釣魚鉤、一個の錫のコップあり、一方の壁ぎには、一個のあら木製の匣ありて、内には衣服の破片若干を藏せり。疑ひも無く、斯の洞中には曾て人ありて住みしなり、而して是れ何人にして、何時の事なりしならむ歟。次第に進みて室の奥に至るに、此處に破爛せる藪ぶとん有りて、其の上に色褪めたる毛布被ひあり、斯の臥具のほとりに、一個の凳几ありて、凳几の上に、亦たコップ一個と、木製の蠟燭たて一個とあり、童子等は此處に至りて、覺えず慄然として一二歩あとに退却せり。斯の臥具の中

にこそ定めて昔し斯の洞の主たりし所の人の遺骸あるべしと思ひたればなり。杜番は自から勇氣を奮ひて、進みて毛布を掲げ起しぬ、然れども臥具の中は空虚なりき。

洞中を檢搜し畢りて、四個は出で來るに、フハンは仍はやツきとなりて、狂ひ叫びをり、四個は獵犬の導くがまゝに再び隨ひゆきたるが、川の岸に沿ひて下りゆくを十間許にして、渠等は齊しく悚然として足を停めぬ。川の上の一株の巨ひなる山毛櫨ありて、其の下に一堆の白骨横はり臥せり、是れ蓋しかの洞の主たりし薄命の人の遺骸なるべし。四個は默然として立したるまゝ、身動きだもするもの有らず。斯の人は是れ何人ならむ歟、或は破船水夫の此地に漂着して、空しく救ひを待つうちに、遂に病みて死したる歟。若し然らば、渠は其の間如何にして其の生活をなしたる歟。渠が洞中に貯へたる諸種の什具は、渠が本船より僅かに取り出だし得て、此處に持ち來れる者なる歟。或は渠が手づから作り出だせし者なる歟。抑も尤も知りたしと欲する所の者は、若し此地をして大陸に屬せしめば、渠は何故に

内地或は沿岸の、人有るかたを尋ねゆくをば爲さずして、空しく病みて死したる歟。或は其の旅行の甚だ困難にして、渠は終に其の目的を達するを能はざりし歟。或は其の路程の極めて遼遠にして、之を跋涉せむとの、到底能ふべからざりし歟。若し斯の人に於て、昔し此地より人有る郷に尋ねゆかむと欲してゆく能はず、遂に此處に終りたりとせば、争で獨り今日のスロウ號の破船者のみが、之を企て、成功するを望むを得むや。兎に角に童子等は、更に仔細に洞中を檢搜せば、或は斯の人の書きかきたる日記などの類の、童子等に、斯の人の身のうへと始末とにつきて、更らに詳密なる知識を與ふべき者あらむも、料られず。

四個はフハンを従がへて、再び洞中に還り來るに、先づ渠等の目につきは、右方の壁に掛りたる一個の袋にして、袋の中には、獸の脂肪と船中にて用ふる所の填絮とを以て製したる蠟燭數個あり。左毗は直ちに其の一個を取り出だして、之に火を點して、嚮に見たる所の蠟燭たてに之を植て、さて一同熱心に洞中を檢搜しはじめたり。洞中は唯だ其の口を經由して、風を通ずるのみなれ

ども、些しの濕氣なく、四方の壁は淨然燥きて花崗石の如く、東方の壁は恰かも海上より來る所の風を防ぎて、海氣の此裡に入り來るを拒げり、洞中の甚だ闇きは眞に一歛點なり、然れども前方の壁に二三の窓を穿たば、以て斯の缺點を補ふを得べし。洞中の面積は二十尺四方に過ぎざれば、(即ちたゞみ二十二枚をしくに過ぎざれば)十五名の童子の棲居として、十分の廣さありと謂ふを得ざれども、兎に角に以て數月を此處に消すべからざるに非ず。かの山毛櫨の下の白骨と化したりし斯の洞の主が、初め此處に上陸したりし時は、蓋し一身の外多くの物を齎らす能はざりしなり。童子等が洞中を檢搜して、新たに發見し得たるものは一個の斧、一個の鋤、二三の割烹器具、ブランドーを盛りたる者らしき一個の樽、及び槌、鑿、鋸等なり。想ふに渠は是等の諸品を携へて、今まはかの茂草の間に横はる零細の木片となり了りたる一隻のポトに駕して、以て此處に漂着したりしなり。童子等は更らに査索しゆくに、又た一個の懐中ナイフ、磁石、湯わかし、鐵鍋、索つぎ針を發見せり。然れども未だ曾て一個の火器の類あるに逢ず、時に韋格は忽ち一個の物を取りわけて、

「是れ何物なるべきか」。他の三個も來りて共に之を視るに、是れ二個のまるき石を索もて緊と約しあはせたる者にして、南亞米利加の黒人は、之を投じて走獸を撃つに、百に一を失はずと云ふ。想ふに斯の洞の主は、自から之を製し之を用ひて、以て其の火器の闕を補ひしなるべし。韋格は又た壁の上に一個の懐中時計懸り居るを發見せり、時計は通例水夫の持つ所のものには異なりて、白銀の双蓋にて、鎖鑰ともに同じく上等の白銀なり。蓋は鑄びつきて容易に開かざるを、やうく開き視るに、長短の針は正に三時廿七分を指せり。杜番「蓋の裏に製造者の名あるべし、そを觀れば以て其の所持者の何の國の人なるかを推するを得べし。」武安「君の説是なり」。蓋の裏を反へし視るに Delplench, Saint MaLo, と刻みあり。武安「さては渠は佛人なりき、余が同國の人なりき」。渠の佛人なりしことは、更らに一個の確證ありて、愈よ益す明かになりぬ。杜番は臥具を打ちかへせるに、其の間より一冊の手帳現はれ出でぬ。手帳の紙は多くの年所を経たるがために、皆な黄みて、其の面に書ける文字も、多くは讀むべからずなりたるが、唯だ其の間に屢ば『法明、慕員』の二語ありて、是のみはやうく



語を讀みあきらめぬ、是れ遭難せる本船の名なるべし。手帳の首めに一千八百

讀みわくるを得たり。二語の頭字は即ち、嚮きに見たる山毛櫟の幹に刻みあ

七〇

りし二字と相符すれば、是れ斯の人の姓名なるべし。手帳に記るせし所は、渠が此處に漂着して以來の事どもを録せるものなるべし。武安は又た手帳の中に就て、『デュゲートロイン』の一

零七年の年號記るしあり、亦たかの幹に刻みある年號と相符すれば、是れ其の破船の年なるべし。然れば法朗慕員が此處に上陸してより、今に至りて五十三年なり。更らに仔細に手帳を査閲するに、手帳の間に一枚の疊みたる紙あり、開きて之を視るに、是れ一個の地圖なりき。杜番「地圖」。武安「想ふに、慕員が自から書ける所のものなるべし」。童子等は一目の下、直ちに己れ等が現に其の西岸を探究しつゝある所の湖及びスロウ灣、スロウ灣上の岩壁等を、地圖の上に認め得たり。而して之を周匝する者は、皆な森々たる一樣の大洋なり。武安が想像せし所は遂に誤らざりき、童子等の現に立てる所は一個の孤島なりしなり。是れ慕員が幾年或は幾十年の久きを閲みして、終に此處を脱がれ出づるを能はず、かの山毛櫟下に病死したりし所以なり。

蓋し地圖は慕員が躬親ら全島を遍歴して、其の目撃せる所に由りて、調製したるものなるべく、かの茂林中の小舎及び徒疋は、即ち其の跋涉のをりに造られしものなるべければ、斯の地圖の示す所の精確なるは、復た疑ひを容れず。但

七一

其の距離の尺度に至りては、勿論測量器具ありて之を測量せしに非ず、渠が
 経過の時間の長短に由りて、之を臆算せしに過ぎざるべければ、或は多少の差
 誤あるを免れざらむ歟、地圖に據るに、島の大形は蝴蝶に似て、其の中央に湖
 あり。湖の四面は皆な一樣の茂林なり。湖は東西五マイル、南北十八マイルあ
 り。幾條の川此より流れ出で、海に注ぐ。現に斯の洞の外に流るる川の如き
 即ち其の一にして、斯の川は即ちスロウ灣の南端に於て海に注ぐ者と同一つ
 の流れなり。島中一個の山なく、概して一樣の平野にして、其の北方は乾燥に
 して沙場多く、南方は沼澤沮洳多し。全島面積は東西約そ二十五マイル、南北
 五十マイルなるべし、但斯の島の位置の南半球に於て何の邊に在るかは、地圖
 の示す能はざる所なり。要するに、幕員の遂に此處に終りしを觀れば、斯の島
 の人の來り訪ふと希れなる絶海の中に在るものなるを推すべくして、童子等の
 此處に消すべき歲月は將來尙は悠遠なりと想定せざるべからず。兎に角に、其
 の棲宅に恰好なる斯の洞を發見したりしは一同の幸ひなれば、嚴冬の烈風のメ
 ロウ號を來り襲ふに先きだちて、速かに其の食物其の他を運搬して、此處に移

居するの計を爲さざるべからず。
 四個は今までは只だ速かにスロウ號に還へるべき一事あるのみ、渠等は地圖に據
 りて、洞外に流るる川は、其の末スロウ灣に入るを知られば、斯の流れに
 沿ひて、スロウ號に還へるべしと定めたり。川の長さは七マイルに過ぎずと見
 ゆれば、是れ僅々三五時間の路程なるべし。四個は此處を去るに先きだちて、
 洞中に在りし鋤を取りて、幕員が其の姓名の頭字を刻みたる山毛櫨の下を掘り
 て、其の遺骸を此處に葬り、又た洞の口を塞ぎて、野獸の此の中に闖入するを
 防ぎなどし、畢りて岩壁を右にして、川の流れを左にしつゝ、進み行くに、此
 邊は樹木も稀れにして、途上の障礙少なければ歩行意外にはかどりて、一時間
 の後は、岩壁の次第に川より遠ざかりて、斜めに北西のかたに走せ去る處まで
 來りたり。武安は斯の川の或はスロウ灣と湖との間の交通を助くべき便道とな
 るとあるべしと思ひて、行く／＼意を留めて之を觀るに、川は十分ポート或は
 筏を容れて、之を航通せしむるだけの餘地あり。進潮に乗じて棹ささば、多く
 の勞力を須ひずして、流れを溯るを得べし。

四時に至り、一個の大なる沼澤ある處に來りたれば童子等は已むを得ず、北西のかたに路を迂して、進み行きしが、雜木地を蔽ひて、歩行次第に困難となり、既にして六時となり、七時となり、天は漸やく黒くなるに、茂林は益々密になりて、八時に及びては、夜色已に四方を罩みて全く方位を辨すべからざるに至れり。

時に忽ち茂林の一方に、燦然たる一道の明光ありて、空中に閃めき騰るを望めり。左毗「あれは何物なるべきや」韋格「蓋し流星ならむ」武安「否な狼火なり、スロウ號より擧ぐる所の狼火なり」杜番「即ち吳敦の余輩に示す所なり」と呼はりて、其の銃を發ちて其の信號に答へ應じつゝ、最先きに走せ出だせり。四十分の後は一同恙なく、スロウ號に歸り着きぬ。

第五回

- 會議 ○移居の準備 ○船体の解きはどき ○筏の編成
- 貨物の裝載 ○解纜 ○佛人の洞窟 ○駱鳥
- 石中の怪しの聲 ○フハンの失踪 ○一變事

翌日朝まだきに衆童子は甲板の上に集聚して、四個の遠征委員が遠征の結果を

聽き、今後の進退につきて、相議する所あり。地圖に據るに、斯の島は東西十里南北二十里ありて、必ずしも世界輿地全圖に載せられざるほどの極小なるものに非ず。然れども輿地全圖を照査するに、南亞米利加の海岸に近き處に於て、著名なる群島より以外に、當さに是れなるべしと想はるゝ孤島もあらず。若し斯の島をして、是等群島の中に屬する一島にして、即ち其の左右に近く他の島有る者ならしめば、幕員が其の地圖の上に、其の事を記さずしては已むべからず。武安「要するに目下の第一策は、先づ余等の居を、かの湖畔の佛人の洞に移すに在り」馬克太「洞は余等一同を容るゝだけの大さあるか」杜番「否な、然れども余等は更らに岩壁を穿ちて、之を廣むるを得べし」吳敦「縦ひ多少の不便あるとも先づ其のあり形のまゝに用ひて、然る後ち徐るに他の計を講ずるも、亦遅からじ」蓋し是時スロウ號は、其の甲板及び側面の破損處次第に益々大きくなりて、殆ど風雨を庇ふべからざりしのみならず、烈風一たび怒濤を送りて、其の背を打たむには一二時間ならずして、全船体粉碎し了るべき状を呈せり。故に移居は渠等にとりて、焦眉の急なりしなり。杜番「移居の事を了

るまでは、余等は何處に宿すべきや。吳敦「天幕の下に、川の上に天幕を張りて以て」。渠等が船中の有らゆる物を荷づくりし、船体を解きて其の有用なる木材其他を擇りわくるには、少くとも一個月を要すべく、渠等が此處を發足するは、早くも五月の初めとなるべし。五月は余輩北半球の十一月にして、即ち冬の初なり。渠等が一日をも空費すべからざるは是が爲めなり。吳敦が其の假宅の地を川の上に擇みしは智かりき、渠等が船中の物を、佛人の洞に運搬するには、川に由りて筏を用ふるより善きは莫し、則ち川の上は其の發足に最も便利なる位置なればなり。衆童子は是日より、直ちに其の假宅工事に着手して、先づ川の上に繁生する山毛櫨の枝と枝との間に、長き木材をわたして、之に大小の帆を張りて、屋蓋となし、亦た壁となし、此裡に其の火器、藥及び諸般の食物、其の他必須欠くべからざる鍋釜器皿の類を納めぬ。毎日風は強かりしも、幸ひにして快晴打ちつゝきたりしかば、渠等は着々其の工事の歩を進むるを得て、既に船中の物を悉く、天幕の内に運搬し了り、次に船体の外皮を解きはじめぬ。外皮を包める銅飯は、後來諸種の用あるべきを思ひ

たれば先づ丁寧に之を剥ぎ取りたり。然れども熟練無く膂力弱き童子の手を以て、百噸の船体を解くとは、甚だ容易の業にあらざりき。然れども四月二十五日に至りて、不思議の助ありて、大に渠等の勞を省きぬ。是日夜半より烈風吹き起りて、天明まで吹きどほし、翌朝渠等濱邊に往き視るに、スロウ號は全然破壊し了られて、唯だ大小幾多の木片の、地を蔽ひて堆積亂布するを見るのみなりき。此より後兩三日は只だ濱邊に亂布せる木片を拾ひて、之を天幕の前、即ち川の右岸の中に運搬するのみに消されしが、是れ亦た決して容易の業にはあらざりき。其の最も年長者と稱する者さへ未だ十五歳には満たざる一群の童子が、或は長き木材を楨杆として重きを起すあれば、或は團き木材をコロとして重きを轉ばすあり、或は擔ふあり、或は昇ぐあり、互にゑいゝ聲をあげて、一心に奔走勞作するさまは、如何に憐れにも、しほらしく、勇ましき觀ものなりしとすらる。二十八日の夕がたには、既に一切、絞盤車鐵竈水桶等の甚だ重きものに至るまで凡そ船体に附屬せる者にして有用なる者は一切悉く川の右岸に運搬

し了られたり。明日よりは筏の編成に着手すべしといふ、筏編成の工事は、馬
克太主として之を統督し、他の諸童子は多く馬克太の指揮に従ひて運動せり。
蓋し馬克太が天生一個の木匠たるの才は、今回假宅の工事及び船体解さほごき
のそにつきて、
大に衆童子の
間に顯はれて、
衆童子は自然
渠に倚頼して、
其の力を籍る
と多かりしな
り。渠等は先
づスロウ號の
龍骨を截りて
二つとなした*



七八
*る者、前橋、
また後橋の下
半、帆桁等、
スロウ號より
取り來りたる
諸種の長き木
材を把りて、
川の中に投じ、
其の長さを縦
にし、其の短
さを横にして、

緊く相約し以
て、堅五間幅
二間半の筏の
骨格を作りた
り 骨格既に
就りしかば、
次にはスロウ
號の甲板及び
側面より剥ぎ
取りたる板を
以て、其の上
て日に繼ぎて、
纒かに其の工
事を了りしは、
五月二日なり
き。翌三日より
は直ちに貨物
をつみはじめ
しが、善均、伊
播孫、土耳、胡
太等の幼年者
は各其の体力
に稱ひたる小
量輕量の貨物
を肩にして、
之を筏の上に
運搬し、筏の上
には、



*に平布して、
之を釘粘にし、
かくして不手
ぎはながらに、
遂に一個の筏
を編成し了り
たり。然れど
も是れなから
この困難工事
なりしかば、
衆童子は夜以

武安馬克太等ありて、吳敦の指揮に従ひて、偏輕偏重の患ひなきやう、之を按排陳列す。又た鐵竈水桶銅飯等重量のものは、絞車盤の助けを籍り、年長童子等の手を以て、之を筏の上につり下ろせり。之を總ぶるに、衆童子の一心協力によりて、五月五日の午後には、天幕の内外にありし一切の貨物、悉く筏の上につみ了られたり。今まは只だ明朝八時を待ちて、進潮の流れに乗じて、纜を解き川を溯るべきの一事あるのみ。吳敦「然れども、余等が此處を去るに先きだちて、尙ほ爲しおくべき一事あり、余等既に此處を去るからは、縦ひ船の斯の沖を過ぐるあるも、余等は復た之を望みて、之に信號し、其の救ひを乞ふと能はざるべし、故に余等はかの岩壁の頂きに、一個の竿を樹て、常に信號旗を掲げおきて、以て斯の沖を過ぐる船もあらば、其の船の注意を惹かむと欲す、諸君は以て如何となす」。他の諸童子も勿論斯の用心の策に異議あるべきにあらねば、直ちに旗を掲ぐるに決し、是日の午後は斯の事のために消し了られたり。翌朝は一同早くより起き出で、天幕を卸して、之を筏の上なる貨物の上に被ひ、莫科は三四日分の食物を準備して、之を筏につみなどす。七時には既に一

切の事畢りて、一同筏にのり移れり。長年者は各手に、棹を把りて、潮の進むを待ちてをり。八時を過ぐる三十分許するほどに、今まで海に注ぎし川の水は、次第に進潮に推されて、海より湖のかたに向ひて、逆さまに流れはじめぬ、筏は直ちに纜を解きぬ。不手ぎはなる筏が、其の尾にスロウ號唯一の遺物なる短艇を挽きつゝ、徐ろに川を溯りはじめたるときは、衆童子は齊しく手を拍ちて、自から喝采驩呼するを禁ずる能はざりき。渠等は縦ひ世界第一の良船美艦を造り出だしたりども、これより更らに喜ばしくは感ずる能はざりしなるべし。筏は常に川の右岸に沿ひて、すゝめられたり、是れ潮の流れの此方に於て、特に急迅なるを見しと、又た二には右岸は、左岸より更らに高く水面に抜をりて、棹を擡ふるに尤も便利なればなり。然れども進行は甚だ遅々にして、解纜より二時間を経て、尙ほ僅かに一マイルを來りたるに過ぎず。スロウ灣より湖に至るまでは、少なくとも六マイルはあるべければ、毎進潮の間に於て、一マイル半乃至二マイルづゝを進行するとせば、渠等は尙ほ數回の進潮を経ざれば、其の目的地に達する

と能はざるべし。十一時に至りて潮は再び退きはじめたるに、渠等は筏を繋ぎて、暫らく此處に休息せり。午後にも勿論又た一回の進潮ありと雖も、吳敦は夜中の進行は、危険無きにあらずとて、明日まで之を待つととして、是日は此處に宿したり。翌日は午後一時、嚮きに遠征委員の一行がスロウ灣に還るとき沼澤に逢ひて路を轉じたりし處まで、來りて筏を繋けり。頃來寒氣日に加はりて、日中さへ身にしむばかりなれば、夜間は殊に甚しく、此夜沼澤の面には既に薄氷のはるを見たり、衆童子は或は進行のあまりに遅々として、川の面も亦た凍結するをあらば、進行益す困難なるべしなど、杞憂せしが、次日午後には、遙かに湖の碧色を前方に望むを得て、三時幾分には無事佛人の洞の前面なる、川の右岸に着したり。

一同の喜びは言はむもさらなり、善均、伊播孫、土耳、胡太等の幼年者は早くも岸に登りて、何事か相語り相罵りつゝ、譁然として嬉戲跳躍す、筏の上より之を望める武安は、其の弟弱克を顧みて、「汝も那處にゆかざるか」。弱克「否な、余は此處に留まるべし」。武安「弱克、余は汝が近來の舉動を解する能はず、汝

は何事か心中に隠くしをるもの有るに似たり、汝は近來病あるか。弱克「否な」。武安は更らに深く推詰せむと欲したるが、今は久しく是等の問答に従事しをるべき時にあらざれば、問答は茲に終りて、一同と共に筏を岸に緊く約しつけたる後、岸に登りて佛人の洞に至り、嚮きに口を塞ぎおさし灌木を拂ひて、其の内を檢するに、洞の内は前日のまゝにして、些しの異状もある無し、渠等は先づ一同の臥具を取り來りて、之を洞内に按排し、スロウ號食堂の大卓子を把りて、洞の中央に安置し、又た雅涅は幼年者を統督して、鍋釜器皿等の包みを解きて、之を洞内に運搬せしむ。一方には、莫科が洞外岩壁の下に、俄かに石を布きて竈を造り、スープの鍋をかけ、又た小鳥の申を炙りなごす、小鳥は杜番等が、此處に來る途すがら、筏の停泊せるをり／＼に、岸に登りて獵獲せし所にして、今更其の申を轉し／＼て之を炙るは、伊播孫と土耳との擔當する所なり。七時には一同洞内の大卓子の周圍に、堯几、柳條椅子等スロウ號より取り來りて此處に運び入れたるを環列して、之に坐し、大卓子の上には、湯氣のたつスープ、燻牛肉、小鳥の炙りもの、少許のブランドーを點せる清水、及び乾

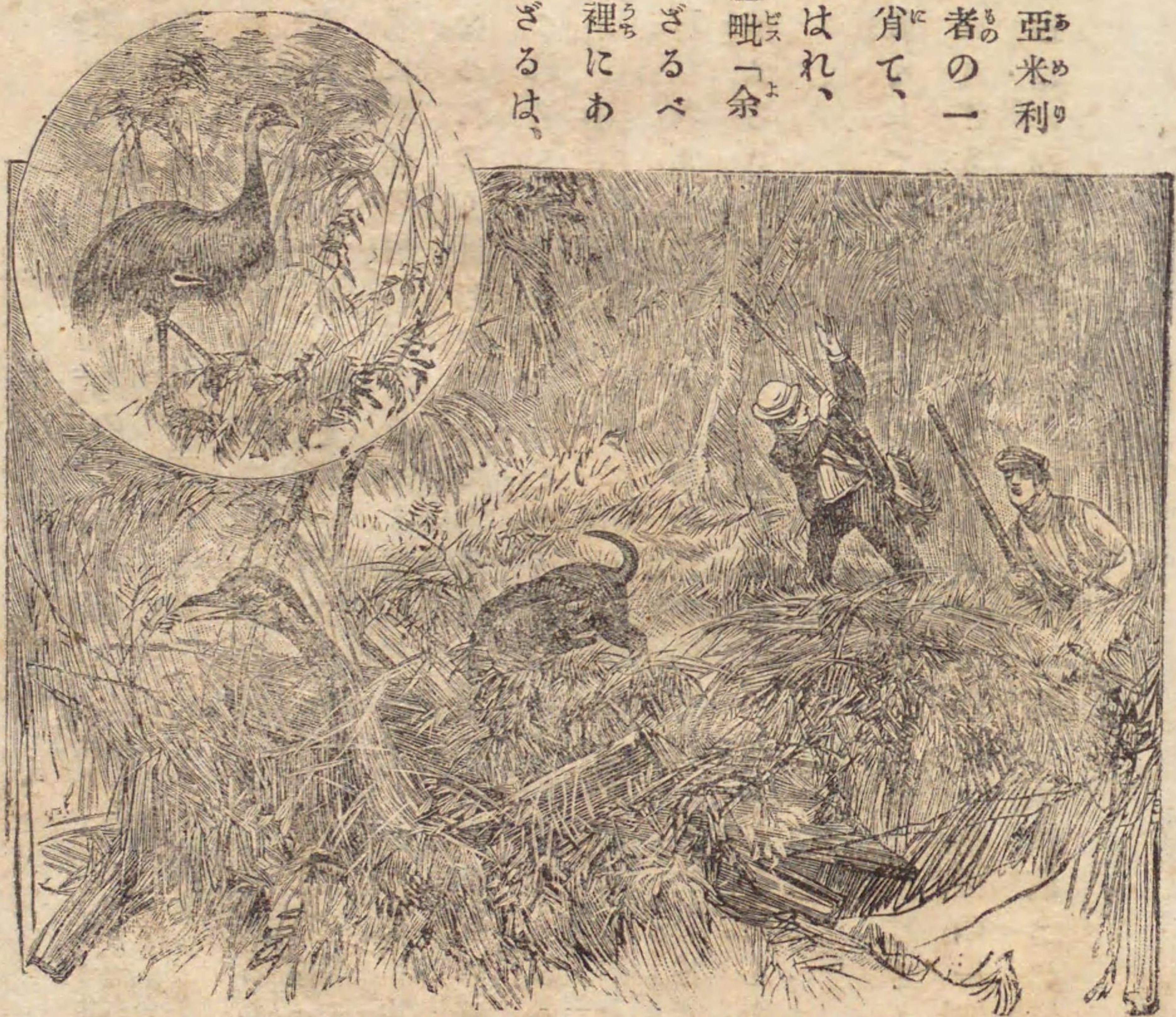
酪、セリー酒等あり。一同舌を鼓して飽くまで此等の美味を賞したる後は、頃
 來の疲勞一時に發するを覺えて、早くも睡りを欲せしが吳敦の發議によりて、
 一同打ちつれて募員の墓に詣りて、斯の薄命なりし破船者のために、哀禱の詞
 を捧げぬ。かくて九時に及ぶ比はひには、見張りの番に當りたる杜番韋格兩人
 を除く外は、一同皆な酣然として臥具の中に睡りたりき。
 翌日をはじめとして三日の間は全く、筏の上なる貨物を洞内に運び入るゝに、
 消せられぬ。次の若干日は又た、筏を解きて、其の木材を取りかたづくるが爲
 に、消せられぬ。これは等の木材の又た他日に用あらむを、思ひたればなり。
 五月十三日にはコロを用ひてかねて洞外まで運びおきたる鐵籠を、洞内に運び
 入れて、洞口の右方に取りついたり、馬克太は洞壁の甚だ堅からざるを見て、
 試みに之を鑿ちたるに、遂に洞の前面に於て、鐵籠の上に、一個の穴を穿つを
 得たり。此裡より煙突を通ずれば、渠等は自今洞内に於て、一切炊煮を了する
 とを得べし。是等の事畢りし後は、杜番韋格乙部虞路の四名は、毎日銃を肩に
 して、傍近の茂林沼澤を跋涉して、夕には必ず多少の獲禽を持ちて歸り來るを、

常どせるが。一日渠等は湖畔に沿ひて、佛人洞を距ること半マイル許の北方な
 る、茂林の中にわけ入りしに、圖らずも此處かして、人の手もて掘りたるに
 疑ひ無き深き坑ありて、散點せるを發見せり。坑の上には多く樹枝など、縦横
 にかけてわたしあり、其の一個の坑の若きは、其の底に、何等か動物の遺骨らし
 き者ありて、散落するを見たり、蓋し募員が、當時由りて以て諸動物を掩取し
 たる所の、陥穽の迹なるべし。四名は是等の坑を歴看したる後、再び佛人洞に
 歸り去らむとするとき、韋格「余に一案あり、更らに斯の坑を蓋ひおかば、或
 は又た何等かの動物ありて、自から來りて此の裡に投ぜむも、知るべからず」。
 他の三名は、韋格の想像のひやうきんなるを笑ひつゝも、渠の説に従ひて、其
 の上に土などふりかけて、歸り去りぬ。
 四名は此の如く遊行する間に於て、川の對岸なる沼澤の周圍にセレリー（荷蘭
 みつばの屬）茂生するを發見し、又た水芹多くある處有るを發見せり、二植
 物は口に旨くして、且つ衛生の効ある者なり。天氣は日を逐ひて次第に益す寒
 きも湖及び川どもに未だ凍結するに至らざれば、幼年者は毎日水邊に往きて、

釣糸を垂るゝを自由なり、故に莫科は又た其の庖厨に魚無きを憂へざりき。
 五月十七日武安及び若干の童子は、何等か物置に用ふべき洞などの、傍近岩壁
 の面にあるをあらざやと、之を検討せむと欲して、佛人洞を出で、北方なる
 茂林の中にわけ入りて、嚮きに杜番等が発見せしといふ陷穽のほとりに近づけ
 るに、忽ち異様の噂聲ありて、渠等の耳を劈けり。武安は最先きに、杜番等は
 之に續きて齊しく、聲するかたに走せ到るに、聲は一個の坑の裡より起る。坑
 の上に近づき視るに、土は散落し、樹枝は摧け折れて、何等か動物の此の裡に
 陥りしは明かなり。然れども童子等は未だ其の何物なるやを知らざれば、むざ
 と坑の口に立ち寄るべきにあらず、「フハン、此處へ、フハン」フハンは坑の口
 に至りて、略ぼ其の中を瞰一瞰するや否や、些しの懼るゝ色もなく、躍然坑の
 裡に跳り下ぬ。

武安杜番は獵犬に續きて、來りて坑の底を窺ひしが、一齊に首を擧げて、「來れ、
 諸君」。事の險夷を料りかねて、數歩の後へに停立せる童子等は、皆な走せ來て、
 乙部「豹か」。虞路「クーガル（亦た豹の一種）か」。杜番「否な、一個の二足動

物、駝鳥なり」。實に是れ亞米利
 加駝鳥と稱せらるゝ所の者の一
 個なりき、頭は酷だ鵝に肖て、
 全身灰色の羽毛をもて被はれ、
 其の肉尤も口に佳なり、左毗「余
 等は生きながら之を捕へざるべ
 からず」。斯の巨鳥の坑の裡にあ
 りて、脱がれ出づる能はざるは、
 坑の内狭くして、其の翼
 を奮ふに由なきを以てな
 り、左毗は忽ち身を跳ら
 して坑の裡に飛び下りし
 が、巨鳥の嘴に二たび三
 たび啄ばみ撃たるゝを事



ともせず、手ばやく其の喉を扼して、半ば其の氣力を奪ひし後、他の童子等が投げ下す幾條の手布を結び合はせて、緊く其の兩足を縛し、他の童子等と共に、難無く之を地上に曳きあげぬ。虞路「余等は將に之を奈何にせむとするや」。左毗「問ふまでもなし、洞につれゆきて、之を馴らして、余等が騎騁の用に供ふるのみ」。其の果して容易に騎騁の用に適するやうなるべきや、否やは、甚だ疑ふべかりしも、之を洞につれゆくは亦た極めて容易なりき。吳敦は初め諸童子の斯の龐然たる大物をつれもどろしを見たるときは此の如くして更らに一個の人口を、洞内に増すとは、洞内の經濟のために計りて、得失如何なるべきやに、頗る疑ひ感ひしが、再び考ふるに及びて、斯の新來の客は、單に草或は木葉を食ひて以て、生活し能ふるものなるを憶ひいだして、乃ち心を安んじたり。

佛人洞の傍近に於て、物置として用ふべき洞のたぐひを發見するを能はざりしかば渠等は再び最初の案にもどりて、斯の洞をほり廣げて以て、物置の一室を作るべきに決したり、岩壁は幸ひに其の質甚だ堅からず、馬克太は嚮きに鐵竈

の上に煙突の穴を穿ちたる後、續て洞の口を廣げて、此處にフロウ號より取り來りし戸板の一個を嵌め、又た其の左右に各一個の窓を穿てるに、勿論衆童子の熱心盡力に由るとは雖も、皆な既に成功するを得たりき、故に渠等が今ま洞をほり廣げて、別に一室を作らむと欲するも、勿論多大の勞力をば須つべきも、決して爲すべからざるの事を爲さむと欲する者にはあらず。かくて渠等が始めて鶴嘴及び鏟を揮ひて、洞の右壁即ち湖に面せるかたの壁を穿ちはじめしは、五月二十七日なりき。武安「一直線に此處をほりゆかば、余等は湖に面したる岩壁の下に出づるなるべし、若し風烈しくして、前面の戸を開く能はざるをりには、此の如くして側面の口に由りて、洞外に出づるをも得べし」蓋し洞内より湖畔岩壁の下に出づるまでの距離は、直徑七間乃至八間なるべし。渠等は初め先づ狭きトンネルを穿ちて、然る後之を次第に上下左右にほり廣げゆくべき設計なりしなり、此方は岩壁又た殊に軟脆にして、ほりゆくに隨ひて、左右に木材の支柱を施して、其の崩壊を防がざるべからざる處さへ、少からざりしほどなりしかば、三日許の間に於て、工事は意外に速かにはかどりたり。

此の間吳敦は他の手あきの童子等と共に、嚮きに筏を解きて得たる所の木材を
類別區畫して、其中よりトンネルの支柱に用ふべき者を、擇りわくるなどの
をなし、幼年者は又た皆なトンネルの中より、岩屑石片を運び出だして、之
を洞外に棄つるなどのを手つたふ。

かくて三十日の午後には、既に五六尺の長さのトンネルを穿ち成すまでに至り
しが、時に駭くべき不思議の事起りたり、武安は例の如く、トンネルの奥にあ
りて、しきりに岩壁を穿ちをりしに、己れを距る遠からざる岩壁の一方に、何
物か呻吟する聲あるに似たり。武安は愕然として、覺はず手を停めて耳を敬つ
るに、疑ひもなく呻吟の聲なり。武安は忙はしく匍匐却行して、吳敦馬克太に
斯のよしを語るに、吳敦「そは君の幻聽なるべし」。武安「試みに君往きて之れ
を聽け」。未だ幾分ならずして、吳敦は再びトンネルの中より現はれ出で、「君
の言眞なり、何物か低く咆吼しつゝあり」。馬克太も入りて之を聽けるが出で來
りて、「是れ何物なるべきや」。三個は直ちに杜番章格乙部雅涅等の年長童子を喚
びて、更るく入りて之を聽かしむるに、聲は已でに息みたりと見、渠等は

皆な聞く所なしといひ、是れ三個の幻聽に欺むかれしならむといふ、兎に角に
是れがために、工事を中止すべきに非れば、武安等は再びトンネルを穿ちゆき
たるが、夜九時に至りて、此のたびは前に比すれば更らに明かに、咆吼の聲を
聞きぬ。時に恰かもトンネルの中に入り來りしフハンは、之を聞くより早くも
トンネルを跳り出で、不穩の色を作しつゝ、洞内を走せめぐれり、是夜は一
同掛念の中に眠りに就きて、屢ば悪夢に驚かされしが、翌朝は早くより起き出
で、馬克太杜番の二人先づトンネルの中に入りしが、寂然として何等の聲も
聞はず。フハンも亦た平然として、昨日の如く怒りくるふ態をも作さず、二人
は又た相議して洞外に出で、路を求め岩壁の巔に登りて、佛人洞の頂より、
其の四邊を遍ねく檢索せしが、一縷の風を通はすべしと見ゆる極小の罅隙さへ
あらず、二人は再び洞内に還りて、他の諸童子にも之を語りて、さて例の如く
一同又た終日岩壁を穿ちゆきしが、是日は聲全く息みて、復た聞はず。唯だ鑿
の岩壁に觸るゝとき、中虚の物を打つやうの響きを反射しはじめしは、或は岩
壁の一方に亦た一個の洞ありて、渠等が穿ちゆく所のトンネルの、次第に其の

洞に近づいたために非るなき歎。果して然らば、渠等は由りて以て多大の勞を省くことを得べく、其の幸ひは非常なりと謂ふべし。

一同は是日の業を畢りて、晩飯の膳に就けるに、常に其の主公の椅子の側らに座を占めて、食事に伴ふ所のフハンは、如何にせるか、是夕に限りて見えず。

一同「フハン、フハン」と喚びたつるも、答へ無し、吳敦は戸のきはに往て、高く之を喚びたれども、亦た應聲無し、杜番は湖畔に往き、韋格は川の岸に登り、其の他一同手を分ちて、洞の四邊を索めたれども、遂ひに發見する能はず、時既に九時を過ぎたれば、渠等は復た遠く茂林沼澤の中にわけ入るを能はず、一同愀然として、再び洞内に還り來りぬ。渠等は互に目と目を視あはせて、長嘆短吁するのみ、敢て一言を發する者なし。

俄かにして、はげしき咆吼怒號の聲聞ゆ。武安「聲は正さに此の裡より來ると叫びつゝ、トンネルの中に走せ入りたり。年長者は皆な蹶起して、不虞の變に備ふべき身がまへし、幼年者は恐怖して、皆な蒲團を首より被りて、そこに俯伏せり。武安はトンネルの中より出で來りて、「必ず岩壁の一方に、他の洞あ

るに定まれり。吳敦「而して幾個かの動物の其の中を以て棲處とするなり。杜番「余も亦たしか想像せり、明日を待ちて余等は更らに仔細に、其の洞の口にある所を尋ぬべし。再び物すごき怒吠の聲、恐ろしき吼咆の聲、相續で洞の壁を震へり。韋格「フハンが何等か動物と聞ひつゝあるなり。武安は再びトンネルの中に入りて、耳を帖けしが、復た何等の響きも聞はず。是夜は一同殆ど睫を合はさずして、以て天明に至りたり。

杜番等の一隊は、朝まだきより出で行きて、仔細に湖畔岩壁の上下を探り索めしが、遂に洞の口を發見する能はず武安馬克太は例の如く、トンネルの中に拮据して、正午までに、更らに二尺をほり進みたり。中飯の後、再びトンネルの中に入りしが、トンネルは愈よ益す他の洞に近づきゆくやう覺るに、幼年者は悉く洞外に出だしやりて以て、預め不虞の變を避けしめ、杜番韋格乙部等の年長者は、各手に武器を持ちて、トンネルの中なる諸童子と、緩急相應するの備へをなせり。午後二時に至りて、武安は忽ち驚叫の聲を發せり、渠の方さに岩壁の面に揮ひ下したる鶴嘴は、忽ち岩壁を透し穿ちて、俄然そこに一個の大

なる穴を現じたりしなり。武安は忙はしくトンネルを出て來りて、諸童子に斯のよしを語らむと欲するをり、又た瓦刺々地響き起り、續で轟然トンネルの中より、洞内に飛び出で來る者あり、是れ獵犬フハンなりき。

第六回

- 新洞の發見
- 怪物の本体
- 新宅の經營
- 命
- 名式
- 太守の選立
- 冬ごもり
- 採薪
- ス
- ロウ灣訪問
- 洞内の商議

フハンは一直線に水盤に走せゆきて、先づしたゝかに水を飲みたるが、擧りて主公吳敦のほとりに來りて、戯れ跳るさまは、毫しも常に異ならず。童子等は之を見て、其の懼るべきもの無きを知れるに、武安を前頭に、吳敦、杜番、韋格、馬克太、及び莫科等相踵で、提灯をさげて、トンネルに進み入りつ、岩壁に開きたる穴をくぐりて、次の洞に入り視るに、洞は其の高さ及び廣袤ともに佛人洞と相若て、亦た二十餘疊をしくべし。打見たる所は、外邊との通路全く無きに似たれども、若し眞に之れ無からしめば、獵犬の此處に入らむすが有るべからず、韋格の何物にか躓きたりといふに、提灯を擧げて之を視るに、

是れ一個のジャツカル（豺の屬）の屍体なりき。武安「是れフハンの噬み殺したるものならむ、是れ以て一切の不思議を解くに足れり」。唯だ斯の野獸の、何の處より此裡に入り來れるやは、童子等の未だ知ること能はざる所なり、武安は他の童子等を洞の中に留めて、己れは獨り佛人洞より、湖の畔に出で、湖に面したる岩壁の下に沿ひて、行く／＼高聲に叫び喚はるに、遂に洞中の童子等の答呼の聲を聞くを得たる處有り。仔細に驗するに、岩壁の足に、殆ど地上と平面をなせる處に、一個の低き穴あり。ジャツカル及び獵犬の、洞中に入りたるは、即ち此の處よりなるを曉り得たり若し斯の穴を更らにはり廣げば、童子等は此の處に、湖畔に出づべき他の一個の口を得むとは容易なり。童子等が斯の新らしき洞を發見せる懽喜は、言はむもさらなり。渠等は初めに倍せる熱心をもて、トンネルをほり廣げて以て、兩洞の通路を作るに従事せり。渠等の設計に依れば、新洞を以て寢室及び讀書室に充て、舊洞は之を専ら庖厨食堂及び物置に用ふべしとなり。渠等は先づ其の臥牀を新洞に移して、之を按排し、ソーフハ、臂かけ椅子、卓子、及びスロウ號の船室に會て用ひられたる大スト

一ツ等を此處に移して、それ／＼舗設陳叙せり。其の湖畔に通ずる穴をほり廣げて、此處にスロウ號より取り來りたる戸板の一個を嵌めたるは、馬克太の少からぬ勞力を費やして、遂に成就せる所にして、渠は此の外亦た其の戸の左右に於て、各一個の窓を穿ちて、以て洞内に光亮を引くの處を作れり。寒氣は未だ堪へ難しといふには至らざれども、毎日烈風吹きつゞきて、戸外の勞作はやがて復た爲すべからざるやうなるべく見わたるに、童子等は夜を日に繼ぎて、其の工事を急ぎしが、二週間を費やしてやう／＼是等の洞内の整理を完くするを得たり。童子等の此の地に滯留することも、何時を限り定まりたるにあらねば、空しく光陰を消過せむは、愚かの至りなりとて、吳敦の發議により、冬ごもりの間は、一定の課程を立て、年小者は年長者に就て、其の未だ學習せざる所を學習すべしといふに決したり。課程は明日を始めとして、毎日踐修さるべしと定りたる六月十日の午後、晩飯己でに畢りて、一同はスト一ツを圍みて相語れるが、偶々一童子の、此の如きをりに於て、本島の要地要地の名を定めおかば、平生の稱謂談話の上に甚だ便利なるべしと發議する者あり。一同皆な之を賛せり、杜番「余等は既に余等の船の漂着せし處を名づけて、スロウ灣といへり、余は永く斯の名を保存したしと思ふ」。虞路「無論のとなり」。武安「余等は亦た斯の洞を呼ぶに、先住者の紀念に因り佛人洞を以てせり、是れ亦た永く保存したき絶妙好號にあらざるや」。韋格「スロウ灣に注ぐ洞外の川は」。馬克太「余等の故郷を紀念としてニウジランド川と呼ぶむ」。雅涅「湖は」。杜番「余等は既に川に於て、余等の故郷を紀念したれば、湖には余等の更らに親愛する所を紀念して、家族湖と命名せむ」。此の如くして岩壁にはアウツランド岡、岡の北に盡くる處、武安が登りて以て東方に海を望みたりと誤まり想ひし高地には幻海臺の名を興へぬ。陷窰の迹を發見したる茂林のほとりは陷窰林、遠征委員がスロウ灣に還る途中、沼澤に逢ひて路を迂せしニウジランド川の畔の茂林は沼澤林、ニウジランド川以南、即ち本島の南部を全く掩ふ所の大沼澤は南澤、遠征委員が始めて徒疋を發見したりし小さき流れは徒疋川と名づけられぬ、此の外渠等の未だ跋涉せざる所の諸地は、他日親しく之を經るを待ちて、其の名を定むべし。但だ募員の地圖に於て、明に指點し得る重なる岬／＼は豫め

り。一同皆な之を賛せり、杜番「余等は既に余等の船の漂着せし處を名づけて、スロウ灣といへり、余は永く斯の名を保存したしと思ふ」。虞路「無論のとなり」。武安「余等は亦た斯の洞を呼ぶに、先住者の紀念に因り佛人洞を以てせり、是れ亦た永く保存したき絶妙好號にあらざるや」。韋格「スロウ灣に注ぐ洞外の川は」。馬克太「余等の故郷を紀念としてニウジランド川と呼ぶむ」。雅涅「湖は」。杜番「余等は既に川に於て、余等の故郷を紀念したれば、湖には余等の更らに親愛する所を紀念して、家族湖と命名せむ」。此の如くして岩壁にはアウツランド岡、岡の北に盡くる處、武安が登りて以て東方に海を望みたりと誤まり想ひし高地には幻海臺の名を興へぬ。陷窰の迹を發見したる茂林のほとりは陷窰林、遠征委員がスロウ灣に還る途中、沼澤に逢ひて路を迂せしニウジランド川の畔の茂林は沼澤林、ニウジランド川以南、即ち本島の南部を全く掩ふ所の大沼澤は南澤、遠征委員が始めて徒疋を發見したりし小さき流れは徒疋川と名づけられぬ、此の外渠等の未だ跋涉せざる所の諸地は、他日親しく之を經るを待ちて、其の名を定むべし。但だ募員の地圖に於て、明に指點し得る重なる岬／＼は豫め

其の名を命しかくを便宜とすべしとて、北端の岬は北岬、南端なるは南岬、西岸に斗出せる三個は、童子等が所出の本國を紀念して佛人岬、英人岬、米人岬と名づけられぬ。然れども猶ほ斯の島有り、渠等は斯の島の名を定めざるべからず。胡太「余は一個の好き名をおもひつきたり」。杜番「君が歟」。左毗「おもふに、赤ン坊島など呼ぼんと欲するならむ」。武安「請ふ嘲けるを休めて、渠をして試みに其の思ふ所を言はしめよ、胡太、君の妙案は」。胡太「余等は皆なチエイアマン學校の生徒なり、故に呼でチエイアマン島となさむ」。是れ實に好名なりき、一同は大喝采をもて胡太の説を賛せり。胡太は一國の帝王になれるよりも、更らに得意なりき。

武安は更らに一同に向ひて、「余等は既に斯の島の名を定めたり、更らに進みて斯の島の太守を立つると、善かるべし」。杜番「太守を立つると」。武安「若し一個の首長を設けて、百事其の人の指揮を仰ぐとせば、平生の號令一途に出で、庶務の運行更らに圓滑なるべし」。然り、然り、余等をして太守を選擧せしめよ」と衆童子異口同聲に呼はりたり。杜番「太守を選擧するも可なり、唯だ其

の任期に定限あるべし、譬へば六個月、或は一年」。武安「而して其の人は、次の任期に再選せらるゝを得べし」。杜番は仍ほ掛念げに「善し、而して余等は何人を先づ選ぶべきや」。見るべし杜番の満腹の妬忌は、唯だ一同の選びの、或は武安の上に落ちむを是れ恐れしなり。然れども杜番の恐れは無用なりき、武安「何人を先づ選ぶべきと、勿論最も賢明の人、即ち吾が吳敦を」。然り、然り、吳敦萬歳」の聲は一齊に衆童子の口より起れり。吳敦は初めは己れの其の任に非るを謝して、之を辭さむと欲したりしが、再び考るに、動もすれば武安、杜番の二黨の間に萌生する不和をおさへて、之を調停するには、己れが首長の權力を有しをると、なか／＼に便宜なるべしとおもへるに、乃ち辭さずして敢て之を諾ひきぬ。

若し童子等の想像せる如く、斯の島をしてニウジランドより更らに遙かに南方に偏りたる位置にあらしめば、渠等は此より五個月の間、即ち十月の初旬に至るまでは、多く戸外に出づるを能はざるべし。即ち吳敦が課程を定めて、毎日幼年者に學問を攻めしむるとせしは、光陰を空しく費やさむる最妙の策なり

しなり。毎日午前及び午後二時間づゝ、一同新洞の讀書室に會して、第五級員の武安、杜番、虞路、馬克太、第四級員の韋格、乙部、輪番に教師となりて、第三、第二、第一の諸級員に數學、地理、歴史等を、或はスロウ號の文庫より取り來れる書籍に由り、或は語記せる所に由りて、講授口傳す。是れ獨り之を學習する幼年者に益あるのみならず、之を教授する年長者に、亦た其の曾て學得せし所を、遺忘せしめざるの利有り。之に加るに、毎週二次、日曜日と木曜日とは、一同の討論會を開きて、科學歴史及び現在日常の事に係る活題目を捉らへ來りて、其の利害得失を討



論す。天氣快晴にして風無きをりは、湖畔に散歩し、或は競走會を催して、以て其の筋骨を鍛鍊し、怠惰不活潑の病に流るゝをを防ぐ。大小諸種の時計を捲きて、其れをして常に精確の時刻を指さしむるは、韋格と馬克太との務めにして、毎日寒暖計晴雨計の示す所を録するは乙部の任なり。其の他日を逐ひて有りし所の事どもを記すは、馬克太の初めより自から擔當して、一日も怠らざる所なり。日曜日の夕には、音樂會を開きて、雅涅の奏する所の小風琴につれて、一同國歌を合唱す、中に就て最も美聲として推さるゝは武安の弟弱克なるが、かねて學校にありて、此の如



きをりには、第一に人に先じてうたひたる渠は、常に黙然として、衆童子の背後に坐するのみにて、未だ曾て一たびも其の喉を音樂會に開きしをわらず、是れ武安の益す怪み訝かるに堪はざる所なりき。

六月下旬に及ぶほどに、寒暖計は漸やく降りて、零點以下十度乃至十二度の間を上下するに至れり、洞内は薪のあるに儘せて、鐵竈及びストーヴを常に燃やしつゝいたれば、勿論零點以上の温度を保つを得たり。寒威少く減ずる日は、多く一天の大雪を下し來る。ある日童子等は、例の如く洞外に出で、雪なげの戯れして、相戯れるたるに、虞路の擲ちたる一個の雪丸誤りて、傍らに立ちて他の童子等の爲す所を看をりたる弱克の面に中りて、鼻を打ちしと見え、鼻衄さへおびたしく流れ出でぬ。虞路は之を見て、「余は君に擲つ心にてはあらざりしに」と言ひしのみにて、走せ去らむとするに、武安は之を扣へて、「君がその心ならざりしは、然もあるべし、然れども、君も亦た少く意を用ひば可ならむ」。虞路「君の如く言はば、元來雪なげにも加はらざる弱克の此處に立るが不用意ならずや」。杜番は高聲に「然ばかりの事に、何等の譁びすしきとなる

ず」。武安「勿論言ふに足らざるとなり、但だ余は虞路に向ひて其の、嗣後少しく意を用ひむを望みたるのみ」。杜番「そは君が虞路に、改めていふまでも無し、渠は既に其の過まちなるを陳謝せしを、聞かざりしか」。武安「杜番、余は君が何の故ありて、喙を此に容るゝやを審らかにせず、是れ唯だ余と虞路との間の交渉なり」。杜番「然れども、君の如く言ふときは、余は之を黙視する能はず」。武安は拳を握りて「君の欲するがまゝになせ」。杜番も臂を擡げつゝ、「勿論、君の指揮を須たず、恰も好し吳敦の此處に是時走せ到りて、兩個の相打ちとするを止め、杜番の所爲穩やかならずと宣言せるに、杜番は再び争ふべき言も無く、脆然として洞内に入り去りしが、兩個の争ひの、斯のまゝにては已むまじとは、吳敦はじめ諸童子の憂慮せる所にして、亦た決して謂はれ無き憂慮には非りしなり。

六月の末に及びては、雪は次第に深くなりて、常に三四尺を下らざるものとなりしかば、童子等は復た洞外に、萬己むを得ざる要事の外は、一步を出づると能はず、爲めに最も不便を感じしは、汲水の一事なりき。吳敦は馬克太と、さ

ま、斯の事を商議せるが、馬克太は遂に一策を建て、地中に管を埋めて、川の水面以下幾尺の處より水を洞中に引かば、音に出で、汲むの勞を省くのみならず、寒威益す加はりて、川の表面全然凍結するに至るも、猶ほ水の供給を欠かざるを得る便宜ありと。一同この策を善しとしたりしが、是れ言ふに甚だ易くして、行ふに甚だ難き者なりき。若し幸ひにして、スロウ號の浴室に具へて水を引きし所の鉛管の、童子等の手に在る有りて、恰好の材料を、斯の工事に與ふる無かりせば、馬克太の熱心盡力と、諸童子の銳意戮力とを以てすると雖も、到底其の成功を見るべからざりしなるべし。童子等は幾回の敗績を重ねたる後、ミヤウ水ミヤウの供給に不足無きを得るに至れり。夜間の光明は、船中より取り來りし油ミヤウは十分ありて、數月の間に不足を告ぐべくはあらざりしが、冬の末には、或は新たに油の供給の道を求むるか、或は蠟燭を製して之を用ふるの必要あるに至るべし。故に莫科は、かねて斯の心がまへして、大切に諸動物の脂肪を貯蓄せり。目下童子等の尤も掛念する所は、食物の次第に乏しくなるとなり。渠等は久しく銃獵及び打魚に出づる能はざれば、唯だ莫科が意を用

ひて貯藏しおける鴨、七面鳥の肉、並に鹽漬の魚、及びスロウ號より取り來りし諸食品に頼りて、其の供給を仰ぐのみ。渠等は勿論さし向き食物空缺の憂へありといふには非るも、十五名の少年、最も大食健啖を喜ぶの齡なる九歳乃至十五歳の少年十五名が、毎日坐して消糜する所の食物は、其の額の甚だ少小ならざるを知るべし、渠等が食物の貯藏の、日を逐ひて減じゆくを見て、そゝるに心細く覺はしは、決して其の謂はれ無きに非るなり。之に加るに、左毗の願ひにより、洞内に畜ひおける駝鳥も、亦た渠等の一累たるを免れざりき。地上には常に幾尺の雪を堆くせるけふ此の、斯の鳥のために、毎日樹の根をほり、飼ひ草を聚むるは、極めて容易の業にあらざりき。然れども左毗は獨り之を一身に引きうけて、肯て他の童子等の手を勞さず、毎ねに他の童子等に向ひては誇りていふなり、「渠は如何なる見事の乗馬になるべきぞ」と。

七月九日には、洞内の温度僅かに零點以上五度を示し、洞外の温度は零點以下十七度に降り、是日洞内の薪已でに盡きたるよしを告ぐるに、童子等は陷穿林に抵りて、薪を探りぬ。莫科の發意にて、洞内にある長さ十二尺横四尺の

卓子を倒ましにし、早達の橋となして、積雪の上を推しゆくに、従前渠等が或は負ひ、或は肩にして、運搬せしには異りて、勞省けて功倍し、朝九時より午時までに、既に橋に二はいの薪を洞内に持ち來るを得、此の如くして、全一週間を働かしに、以て若干週間を支ふるに足るだけの薪を洞内に積むを得たり。曆に據るに七月十五日は、正さに聖スフィン日に當れり。武安「若し今日雨ふらば、此より四十日の間、復た青空を見る能はざるべし」。聖スフィンには北半球に於ける如き勢力の南半球にあるべくもあらざれば、童子等は此地に在て、之を憂ふるを須ひざりしのみならず、亦た雨模様も幸ひにして見えず、但だ風は南東に吹きまはりて、寒威益す酷だしきに至り、童子等は洞内に瑟縮して、出でゆくを幾ど希れに、皆な運動の不足を覺えしが、八月十六日に至りて、風は西にまはりて、寒威と共に其の勢大に減じて、空氣の稍や靜着するに隨ひて、温度も稍や堪ふべくなりぬ。

杜番、武安、左毗、韋格、及び馬克太は、己でに久しくスロウ灣訪問の事を思ひをりたれば、天氣稍や定まらば、之を試みたとすいふ。スロウ灣訪問は、管

に以て渠等の久しく屈したる筋骨を舒ぶるのみならず、定めて己でに弊破爛殘したるべき目じるしの英國旗を、取りかへんと欲すればなり。五童子は首長吳敦の許可を得て、八月十九日、朝まだきに、佛人洞を發し、滑かにして且つ堅く凍結せる積雪の上を度りて、沼澤林の中に分け入りしが、今次は沼澤も只だ一面の厚氷となりたれば、復た爲めに路を迂するを須ひず。直ちに之を踏み過りて、九時には、既にスロウ灣の濱邊に至り着きぬ。濱邊には、無數のペンギン（海鳥の名）群がり集まり、岩礁の上には、幾個の海獅跳り戯るを見る。前者は何等の用をもなさざれども後者の脂肪は以て蠟燭を作るべし。ニウヅラノド川より幻海臺に至るまで、一帯の濱邊は、一面に白皚々として深數尺の雪を布き、海上は眼界の及ぶ限り、寂寥として一鳥の飛ぶをも見ず。五童子は朝飯をたうべたる後、かねて持ち來りたる新らしき旗を取り出だして、舊き旗と取りかへ、又た杜番の發意にて、木板の面に、斯の川の上六マイルの處に佛人洞ありて、諸童子の栖居するよしを、詞短く記したるを、併せて竿頭に結びつけぬ。是れ或はこの沖を過ぐる船の、斯の旗を認めて、短艇など下して、人

を此處に寄せむをり、斯の人をして直ちに諸童子の在る所を知らしめて、速かに來り救はしめむと欲したればなり。午後一時に、再び此處を發して歸途に就きたるが、其の吳敦に復命して、其の所見を報告せるは、午後四時にして、天色既に漸やく黒くなる比なりき。

八月の末より九月の初めにかけては、温度日に益す昇りて、之を一箇月前に視ぶれば、著るしき相違あるを覺えぬ。久しく恐れ懼れたる冬も漸やくたちゆきて、春暖の候の次第に近づきはじめたるを知るべし、既にして九月十日となりぬ、スロウ號のスロウ灣に坐礁して、十五少年の斯の島に上陸してより、既に全六個月を経過したりしなり。

斯の島の西方は、即ち渠等少年が此處に漂着するまで幾週の間走り遍ねくして、而かも一寸の陸影だも望み見ると能はざりし所なれば、此方に、何等の陸もなきは、勿論問ふまでもなし。然れども、其の他北南東の三方は如何なるべき。

幕員の地圖に據れば、勿論何等の陸影あるを記さず、幕員の地圖の精確なるは更らに疑ひを容れざる所なり。然れども渠は望遠鏡を有さざりき、則ちアウツ

ラソド岡の上に立ちて、四方を熟察したりとするも、肉眼の着る所直徑二三マイルの外に出でず、若し此より以外の邊に、何等かの陸影ありとするも、渠が肉眼之を視る能はず、其の地圖の面に之を載する能はざるは言ふを須たずして明かなり、故に今日精良なる望遠鏡を有する所の渠等少年は、或は當時幕員の視るを能はざりし所の陸影を、地平線上に視ると能ふやも料るべからず。幕員の地圖に據るに、島の東岸には、恰かもスロウ灣と相對して、深く家族湖のかに凹入せる一灣有り、佛人洞より東行するを十二マイル許せば、乃ち其の灣頭に達するを得べし、故に春暖の候の回へり至るを待ちて、先づかの灣頭に遠征して、島の東方の地平線上を熟察すべしとは、渠等が冬もりの間に洞内にて、計議商定せる所なりき。

第七回

- 野獸の來襲
- 兄の情
- 烈風の發程
- 車の製作
- 第一夜
- 駝鳥の乗りならし
- 家族湖の北端
- 酒の木と茶の木
- 停宿川
- 探征
- 未來の乳母と未來の良馬
- 第三夜
- 歸着

110
 九月の中旬より天氣あらし模様となりて、嚮にスロウ號が吹き流されしときのものに譲らざる烈風、連日吹きつけて岩壁は根より揺り上げ揺り下さるゝ如き心地して、佛人洞の窓を吹き飛ばされ、戸を吹き破られしも、管に一再のみならず、童子等の困苦は、かの百度わりの寒暖計の水銀が、零點以下三十度にまで降りたる嚴冬の間の、困苦よりも甚しかりき。之に加るに、鳥獸は是がために陰處を求めて遠く逃れ、湖中の魚は波濤の洶涌泡沸せるに懼れて深く潜みたれば、童子等は亦た其の獲禽を得べき道を失ひたり。然れども渠等は此の間を決して空しくは消過せざりき、地上の積雪次第に解くるにつれて、從來重きを引くに用ひたる橇の漸く無用となるは、言ふを須たざる所なり、馬克太は一同と共にかねてより、かの卓子の橇に代ゆべき、車のたぐひを作らむを計較せるが、ふと渠の心に浮びしは、スロウ號より取り來りし絞車盤のとなり、絞車盤に屬ける大小諸種の輪の中に就て、其の大き相同じき二個の輪を擇み取りて、之を車輪に轉用せば、其の車の輿を作るは甚だむづかしき業にあらざ、絞車盤の輪は、勿論其の輪邊に鋸齒やうの齒つきをれば、之を車輪に轉用せむと

111
 欲するには、其の齒を先づ除きて、之を平滑にするを要す、馬克太は百方其の齒を除かんと試みて、竟に無功に歸したる後ち、木片をもて其の齒の間を填平し、其の外を鐵の帶もて周約し、以て二個の車輪を作るを得たり、此の如くして十月上旬には、遂に一輛の粗造なる車を作り成すとを得たり。久しく吹きつゝきたる烈風も、此ころより漸くやくなぎはじめて、中旬にはあらし全く息みて、果々たる太陽の、靜着せる蒼穹に徐々として再昇するを望むを得、煖氣驟かに加りて、終日戸外に立ちたたくも自由なるを得るに至りしより、童子等は俄かに佛人洞を出で、附近の地を逍遙跋涉し、或は薪を探り、或は魚を打ち鳥獸を獵しなごす。吳敦は渠等を戒めて、濫りに硝薬を用ふるを許さず、獵手は主として陷阱、係蹄、羅網等を用ひしが、渠等は由りて以て多くの小鳥及び野兎の類を捕得せり。然れども渠等は又た屢ばジャツカルの爲めに、其の係蹄等を擾亂され、其の獲禽を竊み去らるゝを免れざりき。この月二十六日、童子等をして覺えず一場の大笑をなさしめしは、是日左毗が其の久しく畜ひたる駝鳥をひき出して、之を乗り試むべしといふ、童子等は皆な湖畔の廣場に出

で、左毗の試乗を見物す、左毗は駝鳥に繩繩をつけ、其の兩眼に瞑胃を掛けたるを、馬克太及び雅涅の二名に牽かせて、徐かに廣場の中央に歩み進みぬ。左毗は其の背に乗りむとして、乗りそこね、すべり落つると、五七回に及べらる後、やう／＼之に跨りて、二名を塵ねき退けて、自から繩繩をさばきつゝ、其の瞑胃を除くに、今まで兩眼を塞がれたる爲め、身動きもせず凝立せし駝鳥は其の蔽ひを除かるゝや否や、躍然として跳一跳ると見はしが、茂林を望みて驀地に走せいでせり。左毗は心慌て手忙しく、繩繩をしぼり、或は兩足を緊閉せて、之を止めむとあせりたるも、功無かりき。駝鳥はひとより身を振りて、左毗を地上に振り落としたるまゝ、早くも陷穽林の密樹の裡に没して見えぬ。暖氣は日を逐ひて益す如はりて、今は戶外に兩三夜を過すも危害無かるべしと、見ゆるまでに至りしに、吳敦は先づ試みに自から一隊の童子を率ひて、陷穽林に沿ひて家族湖の西岸を探征し、其の地理を察し其の物産を検して、然る後ち戶外露宿の危害無きをたしかめむには、更らに武安を隊長として、一

隊の遠征者を湖の東岸に派して、かねて議定せる如く、東方の地平線上に陸影の有りや無しやを、精査せしむべしといふ。一同直ちに是説を可として、探征者は吳敦、杜番、馬克太、韋格、乙部、虞路、左毗の七名、發程は十一月五日と議定されぬ。七名は各腰に一個の短銃を佩び、吳敦、杜番、韋格の三名は各更らに一個の施條銃を肩にしたり。然れども渠等は、成るべく硝薬を用ふるを畜まむと欲したれば、募員の遺物たる飛彈（一すぢの索をもて二個の石を緊約し之を走獸に投じて以て之を拘住する獵具、第四回を參看せよ）を修復して、馬克太をして之を携帶せしめたり。此の外一雙の斧と、ハルケット式のポート一隻を擧へたり。斯のポートは之をたゞめば靴ほどの大さとなり、其の重さ亦た十磅即ち一貫二百匁許に過ぎず。地圖に據るに、湖の西岸には二條の流れありて湖に注げば、渠等は或は之を渡るに、斯のポートを用ふるの必要あるべきを、慮かりたればなり。斯のポートの亦たスロウ號の庫中に於て發見され、洞内に收藏されし者なるは、言はむもさらなり。地圖を案ずるに、湖の西岸は其の長さ十八マ

イルに満たざれば、渠等は意外の障碍無き限りは、其の往復三日をば出でざるべし。

吳敦等の一隊は、佛人洞を出で、陷穽林を左にして、湖畔に沿ひて北にくと進みゆくに、行くを二マイル餘りにして、渠等に前驅せる獵犬フハンは、忽ち足を停めて、一同の來り到るを待つさまなるに、一同疾歩して其の處に到るに、地上に許多の穴ありて、フハンは其の穴の一個のはどりに在りて、足もて頻に其の土を搔きつゝ、高く吠ゆるを見る。杜番は早くも穴の中に、何等かの獲もの、伏しをるを知りて、其の銃に裝藥せむとするを、吳敦「杜番、君の硝藥を濫りに費やすを休めよ、待て、余に一段あり、一粒の硝藥を用ひずして、穴中の動物を悉く驅り出ださむ」。吳敦は他の童子等の助けを籍りて、灌木叢の間に茂生せる雜艸を抜き取りて、之を穴の口にさし入れつ、之に火を縱つに、未だ幾分ならずして煙に咽びつゝ、うろたへて穴中より跳り出でたるは、十餘頭の兎なりき、渠等は恐驚狼狽して、急に逃げも得せざるうち、左毗乙部は早くも銃の臺じり或は斧をもて、四五頭を撲倒し、フハンも亦た三頭を噬み

斃せり、童子等は不意の獲ものに、互に造化精妙を喜びつゝ、之を荷ひて、灌木叢を離れ、仍ほ濱邊を進みゆくに、十一時には嚮に武安等が始めて募員の遺跡を發見したりし所の徒疋川の流れの、注で湖に入る處に來りたり。地圖に據るに、佛人洞より此處に至るまで六マイルなり。渠等は湖畔に坐を占めて、先づ三頭の兎を料理してシチュとなし、少許の乾餅を合せて之を食ふに、其の味の美なると言ふべからず。川を渡りて再び北に進みゆくに、濱邊は次第に沮洳の場多くなりて、遂に脚を投ずる能はざるに至りしに、湖畔を去りて更らに茂林のかたに就きて進みゆくに、茂林の樹木は佛人洞附近のものに概ね同じくして、啄木鷯鷯等の羽色美しくし鳥其の間に翻翻し、又た松鷄多し。杜番は途中、吳敦の許可を得て、一個のベツカリ（豚に形似せる厚皮獸）を銃斃せり。ベツカリは其の肉味甚だ美にして、童子等の晩飯及び明朝の早飯に、亦た一段の好膳を供するなるべし。午後五時に及ぶ比ひ、復た一條の川の上に出でたり川は幅四十尺に餘るべし、地圖に據るに、是れ湖より出で、アウツラン

岡の北端を遶りて、スロウ灣に注ぐものにして、此處は佛人洞を距ると十二

マイルなりといふ。是の日は此處に停宿することとして、斯の川に直ちに名を命じて停宿川と曰ひ、一同食事を畢りし後は、晝間の疲勞に直ちに睡を催して、見張りの番に當りたる杜番と韋格とを焚火のほとりに獨り留めたるまゝ、早くも熟眠の中に入りぬ。翌朝一同起き出で、先づ川の淺深を測るに、川は到底徒渉りするを得べき水量にあらざり。同はかの護謨製のたいみ舟



りしを喜びつゝ、直ちに之を取り出だして、此を用ひて川を渡りはじめしが、ボートは一時に一人を濟し得るに過ぎざれば、七

童子が渡り畢るまでには、全く一時間餘を費やしたり。然れども渠等は頼りて以て食物及び硝薬を濡



て、湖の對岸の樹木の梢の點々として水天相運なる際に浮み現はるゝを望み見たり。此より湖の幅は次第に益す狭くなりて、午後三時には、益す明かに對岸の樹木を望み得るに至れり。計るに、此處は兩岸の相距ると、二マイルを出で

ざるべし。此邊四顧荒涼寂寞として、唯だ二三の海鳥の時に來りて湖上に翱翔
 するを見るより外、殆ど一個の生物の遊處するもの有る無し。若し嚮にスロウ
 號をして此邊の如き地に漂着せしめて、童子等をして此邊の如き地に彷徨せし
 めたらむには、童子等は已でに久しく餓に死したるべかりしならむ。既にして
 湖は次第に益す狭くなりて、日没の比はひには、兩岸相蹙り相合して、一帯の
 濱邊を成せる處に來りぬ。是れ即ち湖の盡頭なり。
 一同は此處にこの夜を過すに定め、地上に毛布を展べて、坐を占めつ、熟
 ら四下を看まはすに、此邊は一面の沙場にして、一莖の艸一株の灌木すらも生
 長するを見ず。火を燃すよすがさへ無きに、携帶し來りたる乾餅燻牛肉等も
 て僅かに其の餓を療したる後、さびしき夢を結びたり。
 翌朝目を開き視るに、渠等の露宿せし處を距る二丁計の那方に、一堆の沙丘あ
 り、高さ五十尺ばかりなる可く、此に登らば以て四方の地形を概覽するを得
 べし。一同は早飯を畢りたる後、此に登りて四方を展望するに、此より北東は、
 地圖の示めせる如く、一面の沙漠にして、其の涯際を見る能はず。地圖の尺度

する所に據るに、此より北、海濱に達するまでには十二マイル、東七マイルあ
 るべし。渠等が徒らに沙漠を徑りて此の如き長途を行くとの、渠等に何等の益
 もなきは、言ふを須たざる所なり。虞路「さらば、余輩は此より如何にすべき」と。
 吳敦「再び故路に返るべきのみ」。杜番「若し家に歸るより外に、爲すべきを無
 しとせば、何等か來路には異なりたる新らしき道を取りて行くを、更らに妙な
 らずや」。吳敦「君の説是なり、余等は湖畔に沿ひて、停宿川の上まで返り、此
 より右に折れて、岩壁の下に抵り、アウクランド岡に沿ひて家に歸らむ」。杜番
 「若し岩壁に沿ひて家に歸るを目的とせば、此より一直陷穿林の北端に抵り。
 而して岩壁の下に出でむと、更らに捷からずや、陷穿林の北端は此より三四マ
 イルを隔つるに過ぎじ、湖畔に返るは迂回ならずや」。吳敦「直ちに陷穿林に分
 け入るも、必ず一たび停宿川の流を渡らざるを得ざるは論ずるまでも無し、川
 は海に近づくに隨ひて愈よ廣くなり險しくなりて、或は渡る可らざるほどにな
 らむも、知るべからず、故に安全を計る者は、川の南岸に達して後、路を轉ず
 るを智しとす」。

一同は再び露宿の處に返りて、毛布を巻き銃を肩にして、昨日來りし路を返りゆきしが、途中杜番が二隻の鳩を撃ちて新に中飯の料を得たりし外、かはりたる事もなく、早くも九マイルを走りて、十一時には停宿川の上に抵り、又た一時間の後は、一同難なく南岸に渡り畢るを得たり。杜番の獵取せる鳩は、各重さ三貫五六百あり、首より尾に至るまで長さ三尺に餘るべし、左毗は他の童子等どもに其の一隻を料理せるに、唯だ一隻にて七名の腹を満たしめ、其餘りの骨はフハンをさへ屬屢せしめたり。一同は食事を畢りて、川畔を發したるが、渠等は此よりは、陷窰林中に於て従前曾て探征したるをわらざる所の新らしき方面に向て、進み入らむとするなり。地圖を案ずるに、停宿川は此より北西に斜走して、幻海臺より數マイルの北に出で、海に注ぐ者にして、即ち渠等の此より取らむと欲する所の路とは、正さに反對の方向に奔るものなるを知る。故に渠等は川を右背に遺して、一直西のかた岩壁を望みて進みゆくに、茂林は佛人洞附近の如く稠密ならず。或は樹木全く斷れて、日光地上を遍射して、青草薺の如く、野花其の間に亂開し、長さ三四尺にも餘れる幾株の百合の

輕風に戦ぎて其の頭を左揺右擺する所の、隙地に逢へるも、雷に一再のみならず。かねて本草的知識に富みたる吳敦は、此の間に於て、諸種の有用なる植物を發見せり。一個の木の、葉小さくして全身に刺あり、豆ほどの大さの赤き實を着けたるは、トラルカと稱し、黒人は斯の木の實をとりて、此より一種の酒を製出すると云ふ。又た一個の木は、南亞米利加及びその附近の諸島にのみ特生する、アルガロツベと呼ぶ者にして斯の木の實も亦た以て酒を醸すべし。童子等は吳敦の指揮に従ひて、多く二木の實を採聚せり。又た一個の灌木は、即ち茶の木にして、童子等は又た其の葉若干を採聚せり。日常必要の茶及びブラッデーが、佛人洞に於て、漸やく匱乏を告げむとする際に方りて、是等の植物を發見せる渠等の喜びは非常なりき。

午後四時に及ぶ比ひ、一同は岩壁即ちアウクランド岡の北端に達し、此より岩壁の下に沿ひて、南のかたに進みけるが、行くと二マイルにして、一條の細き水、岩壁の腹より迸出して東方に奔馳し去るを見たり、是れ蓋し徒紅川の源頭なり。時既に五時を過ぎて、到底是日家に歸り着くを能はざるは明かなれば、

渠等は斯の流れの南岸に宿するとの、水に近くして便宜なるを思ひて、乃ち此處に其の行李を卸しぬ。左毗が他の童子等と共に、晩飯のこしらへに致々する間に、吳敦は馬克太と偕に、傍近を逍遙して、此邊の樹木其の他の模様を観察するうち、忽ち一方の樹木の間に、徐々として現はれ出たる一群の動物あり。馬克太は之を指さして「山羊が」。吳敦「實に恰かも山羊に像たり、請ふ試みに之を捕へむ」。生ながら歎「然り生ながら」。俄かにして颯然空気を切る響きして、飛弾は馬克太の手中より飛び出だせしが、群がり行ける動物の中に落ち來りて、其の一個の足に縊み着けり。かくと見たる自餘のものは、駭き怖れて、右往左往に散りゆきたり。兩童子は走せゆきて、索を脱れむと拵扎する、かの動物を捉らへて之を視るに、是れ一個の母獸にして兩個の兒どもは其の母親の側を去り得ずして惘然として猶ほ其のほとりに立ちてをり。吳敦「余思ふにこれヴィンヤなるべし」。馬克太「ヴィンヤには乳汁ありや」。有「好し、ヴィンヤ萬歳」。

吳敦の説是なりき、これヴィンヤなりき、斯の動物は形酷だ山羊に肖て、

足較や長く、毛較や短かし、又た頭に角を有せず。兩童子は一人は其の母親を牽き、一人は其の兩兒を抱きて、川畔に歸り來るに、諸童子の喜びは言はむもさらなり、かくて一同は食事を畢りて、快然眠りに就きたるに、午前三時に及ぶ比ひ、焚火のほとりに見張りせる杜番の、俄かに渠等を喚び醒す聲するに、一同は驚き覺めて「何事なるぞ、杜番」。杜番「かの聲を聴け、何等か野獸の來りて、余等を窺ふ者あるに似たり」。吳敦「ジャグワー（亞米利加虎）若くはクウガル（豹の屬）なるべし、何れにするも甚だ懼るゝに足らず、然れども若し其をして、多數一時に來り襲はしめば、亦た大に懼るべし、然れども渠等は敢て焚火を越えて、此處に突入するとは無かるべし」。物すこき咆吼の聲次第に此方に近づき來れり、フンは憤怒の狀をなして、しきりに彼方に走せゆかむとするを、吳敦の辛ふじて制し住めぬ。蓋し是等の野獸は毎夜斯の流れに來りて、水を飲むを例とせるに、今夜童子等の此の處に露宿せるに遇ひて、之に平かならず、乃ち咆吼しはじめたるなり。

俄かにして十間許の前面に、幾點の閃めき耀やきたる眼睛の光、闇を破りて見

え来れり、同時に一發の銃聲空氣を震ひて、四邊に反響し、續いて前に倍したる物すどき咆吼の聲、長く暗中に揚れり。一同は手に短銃を執りて、猛火を盾に立ちてをり。馬克太は正さに熾に燃えつゝある一條の枯枝を取て、之を渠等の群がり立ちたりと見ゆるかたに投じ、其の光を藉りて前方をすかし視るに、嚮きに杜番の放ちたる銃丸に中りて殪れたる一個を、其の處に遺し、まゝ、自餘のものは既に在らず。虞路「渠等は既に遁逃せり」。乙部「再び襲ひ來ると無きを得むや」。吳敦「多くは、さる事無かるべし、然れども余輩は不虞に備へざるべからず」。かくて一同は焚火のほとりに、是夜をわかして、翌朝六時、此處を發したるが、此處より佛人洞に達するまでは尙ほ九マイルありといへば、渠等は遅々すべきにあらず。

是日の路は單調にして、右には常に削れる如き岩壁を仰ぎ、左には常に殆ど脚を容るゝ能はざる密林うち續きて、途中に彼等の心を惹き其の歩みを停めしむる所の者少かりしかば、進行意外に速やかにして、午後三時には、既に家を距ること僅かに數十町の處に來れり。ヴァンンヤは、渠等更るゝ、其の兩兒を

抱き、其の母親を牽きて行くに、渠等は甚だ抵抗するさまも無く、一同に隨ひ來れり。

是時杜番乙部虞路の三名は、他の四童子に先き立ちて、フハンを伴ひて一丁許前方に進みをりしが、忽ち後隊を顧みて「氣をつけ、氣をつけ」と連呼する聲聞ゆるに、後隊の吳敦章格馬克太左毗は、何事かは知らざるも各武器を手にして、身がまゆる、間もあらず渠等の前面に茂林の陰より突出せる一個の巨獸あり。馬克太はいち早く、かの飛彈を取り出して擲てるに、ねらひを失なはず、かの巨獸の首に纏み着きぬ。然れども渠は力甚だ強くして、此方にありて飛彈の索を把れる左毗を牽きずり、再び茂林の裡に入らむとするに、他の三童子は左毗に力を協せて、飛彈の索の一端を、此方の大木の幹に纏ひて、やうやう之を繋ぎ住めぬ。杜番等三名も其の處に走せ到りて共に之を観るに、是れ渠等が博物學に於て學び知る所の、ラマなり。ラマは駱駝の屬にして、形頗るこれに似たるも駱駝の如く大ならず、之を馴らし之を養へば、以て馬の用をなすべし、南亞米利加の土人の中には、現に之を用ひて馬に代る者あり。

渠は性甚だ怯懦なりと見ゆ、繋ぎ住めてより未だ幾ばくならざるに、早くも氣沮みて、復たもがき争はず、馬克太が其の頸に索を改め係ぎて、牽きいだすに、渠は再び抵抗する擬勢も無く、をめぐとして渠等に随ひ去りぬ。

渠等の斯の家族湖西岸の探征は、實に徒勞に非りき。渠等は由りて以て茶の木及び酒の原料となるべき二木を發見し、ヴィンヤ及びラマを活捉し、又た由りて以て、飛彈の頗る實際の用をなすをを知り得たり。是れ成るべく硝薬を吝まじと欲する所の渠等にとりて、又た動物を傷けずして之を生捕するを必要とするをりも定めて多かるべき渠等にとりて、一大便宜なり。六時に及ぶ比ひ一同は無事、佛人洞に歸り着けり、偶々洞外に在りて獨り遊びゐたる胡太は、之を望み見て、早くも洞内に報じたるに、武安はじめ留守の諸童子は皆な洞外に走せ出で、七名の探征者を迎へて、互に萬歳を祝呼しつゝ、一同相擁して、洞内に進み入りぬ。

吳敦が不在の間洞内の庶務は、武安の親切なる監督の下に、百事都合好く運ばれて、幼年者は皆な益す武安の徳に懐き服せしが、武安が獨り心を病ましめし

は、弟弱克の舉動なりき。渠は吳敦等諸童子の不在を時として、弟を人無き處に招きて、靜かに其の鬱憂の故を問ひ、其の常に他の諸童子に面を視らるゝを避くる如き状あるは何を以てなるやを詰りたるに、弱克は只だ「是れ何等の故も有るにわらず」と答ふるのみ。武安「汝は余に打ちあくるを肯せざる歎、余にすら之を秘さむと欲する歎、余は汝の兄ならずや、余は復た久しく汝の日に益す鬱憂の底に沈みゆくを默視する能はず、余は必ず汝が哀傷の原因を知らねばならず、汝は何の故ありて、かく自から悲むや」。弱克は終に自から堪ふる能はず「何の故ありてとや、嗚呼、汝は或は余の罪を恕るさむ、然れども他の諸君は」。あどは只だ涕泣して「饒るせ、饒るせ」とわぶるのみ。武安の掛念は愈よ深くなりぬ。

曰く「然れども他の諸君は」。抑々渠は他の諸童子に、如何なる大罪を負へるや、吾は如何なる價をばらいても、必ず之を發見せざれば止まじ、とは武安の決意なりき。渠は吳敦の歸り來るを待ちて、密かに其の弟と對語せし所を語つて、吳敦の己れに力を協せて共に、弱克をして其の心に秘する所を打ちあけしむるや

う、務めむとを請ひたるに、吳敦は之を斥けて、「武安、強ひて渠に逼りて、其の言ふを欲せざる所を言はしめむと務めたりとて、何の益あるや、唯だ渠をして其の爲さむと欲する所を爲さしめよ、何ぞ必ずしも他より之を強ひむ、渠の余等に負ふ所と言ふは、縦ひ何等か其事ありしとせしむるも、定めて何等かの兒戯的小過に過ぎざるべし、何ぞ強ひて之を問ふとを須ひむ、此の如きは皆な徒らに以て、渠のせまき心を苛責して、其の苦みを増さしむるのみ、若し言はむと欲する時至らば、他より強ひて之を要めざるも、渠自から之を言はむ、措けよ、措けよ」といへるに、武安は即ち口を噤みぬ。

童子等がさし向き急に其策を講ぜざるべからざるは、洞内の食物補給の一事なり。是時儲藏の食品は已でに著しく減少して、渠等がかねて湖畔に設けたる陥穽の時々其の獲ものを齎らざるに非るも、渠等の需用は是等小額の供給の能く充たす所にあらざれば、渠等は更らに湖畔、沼邊、茂林の中に於て、地を相し處を撰みて、ベツカリ及びヴィンヤ等の諸獸をも、捕ふるに足るほどの深大堅固の陥穽を、多く新たに造り設けるとせり。十一月は全一月是等の工

事に消過し了られぬ。

第 八 回

既舎の建作 ○砂糖の木 ○狐がり ○スロウ 灣遠
征 ○異様なる馬車 ○海豹の油 ○基督誕辰祭 ○
來冬 ○準備 ○東方探征論 ○探征艦の抜錨 ○
東方川 ○兩岸の風光 ○欺騙灣 ○巨熊岩上の眺
望 ○雲耶山耶 ○弱克の懺悔 ○無言の航行

年長者が致々として陥穽の構作に従事せる間に於て、年小の童子等は又た、馬克太を棟梁として、湖畔岩壁の下佛人洞の背戸口を距るを遠からざる處に於て、ラマ及びヴィンヤ等を收め繋ぐべき、一個の小舎を建作せり、小舎はスロウ號の船体より取り來りし木板を用ひて、之を造り、屋蓋は松脂を厚く塗りたる油布を以て、之を被ひ、小舎の四邊は茂林中より伐り來りし木材を以て、嚴重に柵をゆひ繞せり。小舎の内には吳敦等が遠征の途次捉らへ來りし者の外、更らに爾後陥穽にて捕らへたるラマ一隻と、馬克太が韋格と俱に飛彈を用ひて生擒したる、牝牡二隻のヴィンヤ有り、皆な日に益す渠等に馴れ來れり。吳敦は諸童子に勸めて、飛彈を用るを習練せしめたるが、最も早く熟達の功を見

たるは、馬克太と韋格となりき、柵内の一隅に、又た一區畫をつくりて養禽場となし、此處に七面鳥、鳩、珠鷄、雉の類を、捉らふるに隨ひて、放ち養ひぬ。此等の羽族を看守するは善均、伊播孫等幼年者の務にして、渠等は喜びて其の務に服事せり。莫科は既にグインツヤの乳汁を有するに、又た是等諸鳥の卵子をさへ得たりしかば、若し吳敦が成るべく砂糖を節約するの必要なるを論じて、之を制限して、日曜日と祭日とを除く外は、なすべからずと定めしに非ざば、渠は毎日、食膳にデザート（食後の甘味）を供して、一同殊に幼年者を悦ばしむるを願ひしならむ。然れども莫科の斯の憾みは長くつゝかざりき、一日、吳敦が他の童子等と、陷窰林を逍遙して、各種の植物を檢視する際、一簇の樹の其の葉濃紫の色をなせるを見て、懽然として喜び叫べり、「是シユガーマーブル（砂糖の木）なり」、是れ實に渠等が佛人洞に居を定めしより以來なせる所の諸發見中、最も緊要なる者の一なりき。童子等は是等のシユガーマーブルの幹を截りて、其の截痕より噴き出だす所の液を取りて、之を煮沸するに、鍋底に一種の固形物を留め遣せり。是れ即ち砂糖にして、甘蔗より製取せる者に比す

1110

れば、味稍や劣ると雖も、調理の料に用ふるには、彼此大異なるを見ず。童子等は既に多量の砂糖を有するを得たりしかば、酒を醸すに復た困難あるを見ず、莫科は吳敦の指揮を奉じて、童子等の採聚せるトラルカ及びアルガロツベの實を醸酵して、試みに之を醸せるに、一等の好酒を造り成すを得たり。又た渠來が嚮に採聚し來りたる茶の木の葉は、香味兩ながら佳良にして、支那産のものにも遜らざるほどの者なりしかば、渠等は此より復た此種の飲料の匱乏するを憂へざりき。是時に當りて、渠等の特に不足を覺えしは、菜蔬の類なりき。武安は幕員の遺物にして、今も尙は岩壁の下に在存する、野生のものに變形せる芋を復元して、舊の食ふべき者になさむと、百方力を盡せしが、功無かりき。渠等は僅かに、船中より取り來りたる罐づめの菜蔬及び菓物の猶ほ少しく有るを珍蔵して、時に少しづつ取り出だしては其の淡味を賞玩するのみ。吳敦は成るべく硝薬を節約せむとを欲して、飛彈を習練するを一同に奨勵したる外、又た馬克太に囑して、秦皮の枝を伐りて弓を作り、釘を鍛として蘆の箭を作らしめ、獵手をして試みに之を用ひしむるに、韋格虞路等は早くも之を

1111

用ひて以て、若干の獵ものを得るに至りたり。然れども茲に吳敦をして時に其の例規を破りて、硝薬を出だし用るるに同意せざる能はざらしめし一事件起りたりき。十二月七日、杜番は密かに吳敦をかたへに招きて「吳敦、狐とジャッカルとの暴害は、殆ど復た忍ぶべからずなれり、渠等は毎夜隊を成して、來りて余等の装置せる陷穽羅網をこはし、其の中に罹れる所の獲ものを肆に掠め去る」。吳敦「渠等は係蹄もて捕ふべからざるか」。杜番「ジャッカルは尙ほ可、狐は不可、韋格は既に連夜係蹄を設けて渠等を待ちたるが、渠等の甚だ狡黠なる、絶て余等の手にのらざる」。吳敦は終に已むを得ず、幾十個の硝包を出だして杜番に與へ杜番は武安、韋格、馬太、乙部、虞路、左毗等と共に、この夜をはじめとして、毎夜陷穽林の口、家族湖の濱邊に伏して、出で來る狐を狙ひ撃つほどに三夜に五十餘個を殲して、此より佛人洞の傍近に、復た渠等の足跡無きを致すを得たり、且つ渠等は由りて以て、將來大に用ふる所あるべき美麗なる狐の皮、五十餘枚を贏け得たり、

十二月十五日には、かねて久しく思ひたられたるスロウ灣遠征を舉行せり、遠征

の目的は、灣に群れ集ふ海豹を獵して、其の油を煮んと欲するに在り。嚮に冬ごもりの間雨天多くして、晝間さへ燈光を藉りて僅かに物の色を辨じたるを、少なからず、洞内の油は是がために殆ど用ひ盡され、莫科が意を用ひて貯へたる脂肪は、既に若干の蠟燭を製するに足るほどの量有れども、單に此のみに頼りて、久しく夜を照しつゝいけ得べきにあらず、故に是等動物の油を取りて以て、其の缺を補はむと欲するなり。斯の遠征は、其の目的とする所の事、極めて多く人の手を要するに加へて、其の地亦た甚だ近くして、絶て危険なれば、童子等は一個をのこさず、事に此に従ふべしと定められぬ。嚮に馬克太の經營苦辛して作りたる車に、頭來雅涅左毗の心を盡して馴らしたる二隻のラマを駕して、之を引かしめ、車の上には硝薬食物、及び鐵の大鍋、數個の空樽を裝載し、日出とも一同佛人洞をたち出でたり。八時には既に沼澤林中の沼澤のほとりに來りたり。土耳及び胡太は、さすがに年幼ければ、早くも脚疲れて歩行に難みはじめたるに、武安は吳敦に請ひて、兩個を車の上に附載しつ、徐かに沼澤の畔を進みゆくに、渠等を距ると五十間許、沼澤の中に一個の巨獸あり、

渠等の陸續としてねり来るさまを見るより、倏然として灌木叢の裡に没し去りぬ。土耳「何物なるや」吳敦「ヒツボ、ママス」。武安「又の名河馬」。胡太「毫も馬に像ざるにあらずや」。左毗「寧ろ豚ボマオマスと稱するの、其の形に副へるに如かず」。一同覺せず洪然と打ち笑つゝ、十時過ぐるころ、スロウ灣に到り着きぬ。

渠等は嚮に筏を作るとき、假りに露營を張りたりし川畔の樹叢の陰に、再び露營を設けて休息しつゝ、遙かに濱邊を看わたすに、百個餘りの海豹岩礁の上に群集游處しをり。童子等は渠等を驚かさざるやう、樹叢の陰に潜みて、中飯をしたゞめ身支度などするうち、亭午の日光は渠等を誘ひて、濱邊に登らしめ、沙場の上に臥し或は徜徉する者、亦た數十個あり。童子等は善均、伊播孫、弱克、土耳、胡太の五幼年者をば莫科に托して、露營の中に留めおき、其の他は各火器を執りて、堤の陰を縁ひて、川の口まで下り、此より濱邊の岩礁の間を匍匐して進みゆくに、本島の海豹は未だ他の地方の是等動物が、常に人の襲ひ取る所となりて、十分人の恐ろしさを習知し、常に見張りのものを置きて、

人の近づき来るを警報せしむるといふが如き、用心深きに至らざれば、童子等は難なく、互に十間十五間を隔て、相並び立ち、渠等と海との間を横一文字に仕切りて、渠等の逃路を断つを得たり。童子等は十分其の位置を計り定めたる後、それといふ合圖と共に、一齊に起りたちて、銃口をそろへて撃ちはじむるに、距離は近く、撃つ所の物は大なれば、一丸として命中を誤るは無く、早くも二十許頭を殫し得て、其餘は皆な右往左往に海中に逃げ入りて、忽ち見



はずなりにたり。渠等は其の獲もの、意外に多かりしを打ち喜びつゝ、一々之を川畔の露營のほとりに曳き來るに、莫科は既に二個の巨石を以て籠を作りかの大鍋を懸けて、湯をわかしてをり、吳敦等は海豹の皮を剥ぎて、其の肉を重さ六七百匁ほどづゝの大塊に切りて、之を鍋の裡に投じ、煮ると數分間するに、湯の上に一面のキラ浮びあがる、即ち純粹なる海豹の油なり。唯だ之を煮るに方りて、一種不快の異臭鼻を劈きて、實に堪ふべからず。然れども童子等は毫しも屈し撓むの色なく、其の油を扱みては、之をかの樽に盛り、又た直ちに次の肉を投じては、之を煮はじむ。此の如くして、是日の午後より次の日の夕まで、睡眠と食事との時を除く外、一刻の間斷なく之を煮つゝくるほどに、遂に二十許頭の海豹を煮畢りて、數百ガロン即ち數斛の清らかなる油を収め得たり。

して、午後六時には、無事に洞に歸り着くを得たり。試に海豹の油を焼くに、尋常の油ほどは光力強きを得ざるも、猶ほ以て闇を照らすに足れり。兎角するほどに是月も漸やく暮れて、二十五日となれり、是れ渠等の本國に於て、一年中第一の祝ひ日とする所の基督誕辰節なり。吳敦はかねてより、是日と翌日との兩日は一切課業勞作を休みて以て、斯の聖節を祝ふべしと定め、洞内には雅涅及び左毗の盡方にて、大小の國旗を懸けて、前夜より座敷を飾り、二十五日の朝は、曙の色始めて東の天を染むると共に祝砲の聲轟然としてアウクランド岡を震ひ、衆童子は皆互に手を握り頭を點して、聖節のめでたきを賀し次で最幼年者胡太は、一同の總代として、斯の島の太守吳敦の許に來りて、賀詞を陳るゝあり。幸ひに天晴れ風和かなりしかば、午前は一同湖畔の廣場に會して、迷藏かくれん坊等諸種の遊戯に嬉しみくらしつ、再び聞ゆる砲聲に、中餐の時至れるを知りて、食堂に入れば大なる卓子には、雪白の布を被ひ、卓子の中央には、草花及び薜苔もて絡ひ飾りたる一個の巨瓶の中に、一株のクリスマスの木を挿み、木の枝には多くの小さき英國旗佛國旗米國旗を吊りたるを

安置せり。中餐の献立は、

味つけのアグーチ（兎に似たる一種の四足獣）○鹽漬の鳥肉○兎の灸もの○七面鳥の全形のまゝ翼を張り首を仰ぎたる細工もの○罐詰の菜蔬三種○三角塔の状に盛りたるブツヂング（一種のねりもの菓子）

この外葡萄酒セリ酒之に副ひ、食後に茶及び珈琲を供するは言ふまでもなし。是れ皆な莫科が左毗の助けを藉りて、一週間前より準備し調製せし所なり。衆童子は一品膳に上る毎に、皆な其の料理の妙と鹽梅の巧みなるを賞賛して、口を絶たず。かくて、食事將さに央ならむとするとき、武安は起ちて、吳敦太守の功勞を稱して其の壽を祈るむねの、簡潔なる一場の演説をなし。吳敦は之に答へて、斯の小殖民地の繁榮を祝し又た遙かに故國の諸友を憶ひて、一杯を傾けたり。最後に胡太起ちて、幼年者一同を代表して、武安が平素常に幼年者のために心を盡すとを深謝し、武安の壽を祈りて、一杯を傾くるよしを、演説したりしは、尤も一同を感動せしめて、喝采讚呼の聲岩壁に震ひ、武安の面には言ふべからざる感激の色顯はれて見たりける。杜番は獨り黙然として、眼

を下向けてをり。

此より一週間を経て、渠等は一千八百六十一年の新年を迎へたるが、是等南方の緯度において一月は即ち夏の最中なり、指を俵ふれば、渠等が本島に漂着せしより、既に十個月を閲せり。渠等は來冬の冬ごもりの間に於て、家畜を遠く戸の外に繋ぎかくとの不便なるを思ひて、更らに洞に密接せる處を擇びて其の小舎を移し、又た成るべくは爐を設けて多少の煖氣を小舎に送りて、以て渠等を嚴寒の中に保護するの計をなさむと欲し、馬克太武安左毗莫科等は一月中は専ら是等の工事に身を委ねぬ。一方に於て杜番と其の黨の三童子は、例に因りて毎日獵獸捉禽の事に致々として亦た家に在るを鮮し、然れども是も亦た決して無益の勞作には非りき。多く食物を貯へて、冬ごもりの用に充つるは均しく緊要の事なればなり。然れども童子等は是等諸務の外に、尙ほ嚮に議決せる家族湖東岸探征なる一要務を、負へるを忘るべからず。是れ嚮に東方地平線上の模様を展望して、陸影の有無をたしかむるが爲めのみならず、亦た其の地形物産を檢視して、苟くも採りて己れに用ふべき天然の利益あらば、之を採用

せむとの、得策なるを以てなり。一日、武安は吳敦と對話せるとき、武安は特に斯の問題を提起して、東方に或は幕員の望み見る能はざりし陸影あらむ料るべからざるを論じて、東岸探征の事の忽かせにすべからざるを説き且つ之に言へるやう「思ふに君も心中には、必ず余と斯の説を同くするに疑なし、一日も速かに故國に還るの計を爲したしとは、君が必ず余と同く須臾も心中に忘るゝ能はざる所なり」。吳敦「然り、君の説く如く、探征員を派遣せむ、諸君に謀りて諸君の中、五六名を擇びて以て、君に伴行せしむべし」。「五六名は多きに過ぐ、若し、かく多くの人を派遣せば、必ず陸路湖畔を遶りて、以て東方に出でざるべからず、是れ途遠くして勞多し、余の策を以てすれば、如かず短艇を以て湖を渡るに、是れ勞少くして功捷し、然れども短艇は多くの人を容るゝ能はず、故に遠征員は二名若くは三名を過ぐべからず」。「君の策極めて妙なり、而して君は何人を伴ふべきや」。「莫料、渠は頗る操舟の術を會せり、而して余も亦た少しく之を知れり、風順なれば帆を揚げ、逆なれば櫂を盪かさむに、六七マイルの水路を走るは、甚だ爲し難きの事にあらじ、地圖に據るに、此處を

距る六七マイルの那方の岸に、一條の川ありて、湖より出でて本島の東灣に入る、乃ち余等はこの流を追ひて、東灣に達するを得べし」。「君の案甚だ好し、然れども更らに一人を從へむと、更らに便宜なるべし」。「そも亦た余にかねて心算の人あり、即ち余の弟弱克なり、渠が近來の狀は余をして益す不安の念を増さしむ、想ふに渠は必ず何等か他人に語るべからざる大罪を犯して、之をつとみをるに疑ひなし、余は百方嚇し或はすかして、之を吐かしめむと務めたれども、功無かりき、然れども若し人無き處に於て、余とさし向ひにならむをり」。「君の説是なり、弱克を偕に伴ひゆけ、今日より直ちに準備にかゝりて、速かに發足せ」。

かくて吳敦は一同に、三名を派遣して東岸探征の事に當らしむるよしを告ぐるに、常に洞内にのみ在りて戶外に出づると稀れなる莫料の喜びは、言ふもさならなり、弱克も亦た兄と偕にするをなれば敢て之を否まず、獨り杜番は己れの派遣中に加へられざるを、大に不平として、之を吳敦に懇ふるに、吳敦は乃ち密かに武安の言ひし所を語りて、かの三名に限りたる所以を告ぐるに、杜番は

益す之に不平にして「さらば吳敦、この行は唯だ武安が私しの都合のためには催さるゝか」吳敦「過言なり杜番、是れ獨り武安を誣るのみならず、併せて余を誣る者なり」。杜番は口を噤みて復た言はざりしが、其の心服さるるを面には顯はれたり。

武安等は短艇を細査して、其の破損處を修繕し、スロウ號より取り來れる三角帆を之に取りつけ、施條銃二個、短銃三個、硝薬若干、毛布數枚、及び五日分の食物と二個の糧とを裝備して、發足の準備悉く了りしかば、拔錨は明日、即ち二月四日の朝と定まりぬ。朝八時に及ぶ比はひ、武安は弱克と莫料とを従へて、一同に別れを告げ、ニウシランド川より家族湖に乗り出だすには日天氣晴朗にして、南西の風そよよと帆を吹きて、未だ一時間ならずして湖畔に群立してボートを送せる吳敦等衆童子の影は、早くも微茫の中に没し、更らに一時間したる後は、アウクランド岡の頂きも、漸やく地平線の下に沈みぬ。然れども湖の東岸は未だ眼界の裡に浮ばず。然れども十時前後より風漸やく衰へて、正午に及ぶ比はひに、風全く死たれば、

帆を下して一同中飲を喫したる後ち、莫料と武安とは糧を操り、弱克には舵を執らしめて、仍ほ北東にこぎゆくに四時に至りて始めて東岸の樹梢の低く水上に浮び出づるを望み見るを得たり、糧を操れる二童子は腕次第に疲れて、身漸やく熱するに、赫々たる斜日の光は頭を炙りて、汗流背を浹すばかり。湖面は玻璃の如く平かにして水清らかに、水面以下十五六尺の處に茂生せる湖底の植物と、是等植物の間を群行去來する無数の游魚と、皆な歷々として俯瞰するを得べし。

兎角して午後六時に、ボートは東岸なる一個の丘の下に着きたるが、丘は一面に松柏鬱生して、脚を着くべき地もあらねば、更らに北上するを數丁せるに、一個の川の口に至りぬ。武安「是れ即ち幕員の地圖に示す所の川なるべし」。莫料「然り、請ふ之に名を命ぜむ」。武安「汝の説是なり、請ふ之を東方川と呼ぶ」。この夜はボートを岸に繋ぎて、一同岸上に露宿せしが、翌朝は六時に起き出で、再びボートに上りて直ちに川に乗り入るに、方さに退潮の候に際せしかば、

ボートは面白きやうに流を下りて、莫料の獨り權を棹として、舟首に立ちて、其れをして岸に觸れしめざるやう、操つりゆくを須ふるのみ、武安は弱克と偕に舟尾に坐して、行く／＼兩岸の模様を観るに、川の堤はニウシランド川に比すれば甚だ高く、堤の上は一面に茂樹密木をひ壘なり、尤も松柏の二樹多し。川の幅はニウシランド川の如く廣からず、最も廣き處も三十尺を超えず、是れ斯の川の流の更らに急迅なる所以なり。堤上の密樹の中に、一種の喬木の其の枝涼傘の如く四方に廣がり蓋ひて、枝の上に長さ四五寸の圓錐形の實を着けたるが、多く有り。武安は吳敦の如く多くの本草的知識を有せずと雖ども、是れ曾てニウシランドに於て其の標本を見しとある、ストーンパイナップルなるを知れり。ストーンパイナップルの實の内には楕圓形の堅果ありて、食ふべく、亦た以て油を製すべし、堤上亦た多く羽毛二族を棲ましむと見ゆ、駝鳥野兎の群茂樹の間を遊行するを望み、亦た二隻のラマの突如として密木の陰より走せ出で、復た忽ち走せかくるゝを望みたり。十一時ころより、兩岸の樹木次第に疎になりて、空氣に著るしく鹽氣を帯びしは、既に海に近づきたるを證すべし。かくて

數分間を過ぐるほどに、果して一道の淺碧色、冉冉として地平線上に浮び出づるを見たり。川の流は一時間に略ぼ一マイルづゝの速度を以て、ボートを運びたりと見ゆれば、東方川の長さは、概算五六マイルの間なるべし。島の東面なる斯の灣は、西面なるスロウ灣とは、全く其の模様を異にして、スロウ灣の如く濱邊は一帶の沙場にして沙場の上に一道の岩壁聳立するにはあらで、濱邊は一面に無數の巨石累層横布して、處々に洞穴多く有り。若しスロウ號をして始め此處に漂着せしめば、渠等は容易に其の栖居の所を發見して、彼の如き多くの勞苦を須ひざりしならむ。武安は莫科と更る／＼望遠鏡を取りて、東方を望み視るに、只だ是れ森々寂々たる無邊の大洋にして、一點の帆影、一寸の陸影も見ゆる有る無し、武安は固より必ず陸影を望み得べしとは期さざりき。然れども亦た甚だ失望の情無きとを免れず、乃ち此處を名づけて、欺騙灣とぞしたりける。

武安はボートを濱邊に着けしめて、二童子と共に上陸して、更らに此邊の模様を細査するに巨石は皆な美麗なる花崗石にして、大小の洞穴の恰も人の栖居す

るに好き者、僅かに數丁の間に、既に十餘所あり、昔し幕員が親しく此處に遊びて、是等の好洞穴を看ながら、曾て此處に淹留したる跡無きは、既に佛人洞に其の宅を定めたる後なりしを以て、再び此處に移居するを重かりしが故なるべし、午後二時、三童子は一個の巨岩の其の形蹲まりたる熊に似たるに逢ひて、乃ち之に巨熊岩の名を命じつ、其の背に攀ぢ登るに、岩は高さ殆ど一百尺に近く、絶頂に立ちて眸を展ぶれば以て略ぼ四邊の大勢を總攬するを得べし、西方を回顧すれば、重疊たる茂林の梢黒く、家族湖をかくし。南方は、一面の大沙漠蜿蜒起伏しつゝ、白く雲に入り、よりく團簇せる矮松樹の、小さき黒點を成して、此處彼處に散落するを見るのみ、北方は、曲折出入せる濱邊の、一個の岬に至りて盡き、此より以北は亦た一面の沙漠を成せり、更らに望遠鏡を轉じて東方を望むに、空氣は澄みわたりて、直徑七八マイルの間は、飛鳥の影をも明かに見るとを得べし、三童子は更るく一様の漫々たる大洋の面を空く望み視たる後、終に意を絶ちて岩を下らむと欲するをり、莫科は俄かに武安を控へて「彼れは何物なるべきや」。

武安は黒人の子が指さすかたを望み視るに、北東のかた水天相連なる處に、一個の小さき白點あり、初めは雲片なるべしと等閑に看過せしが、熟視するに是れ決して雲片にあらざるに似たり、武安は良久しく之を瞻りたるが、依然一處に止りて、移らず變らず、武安「是れ山にあらざれば決して此の如きを能はじ、然れども山は亦た決して、此の如く見ゆべからず」是時太陽は次第に西方に傾きて、更らに數分間を過ぐるに、かの白點亦た杳茫の中にかくれぬ。彼れは果して山なりし歟。或は海波の太陽の光を反射せる影なりし歟。莫科と弱克とは後者なるべしと信ぜり、武安は獨り前者の疑ひを抱けり。三童子は河口のボートを繋げる處に返りて、途中に於て撃ちたる鷓鴣を炙りて、晩飯などしたむるに、既に六時を過ぎたるが、進潮の候までは尙ほ三時間餘りあれば、莫科は河の左岸に於て晝間見おきたる、ストーンパイン叢に往きて、其の實を採集すべしとて、獨り出でゆきつ。頃ありてボートに返れるに、武安兄弟はボートの中に在らず。忽ちにして岸上の方の茂樹の裡に、飲泣の聲怒責の聲と相交りて漏れ聞ゆるは、たしかに渠等兄弟なり、莫科は且つ驚き且つ

訝かりて、聲するかたに走せゆけるが。相距る數歩の處に至りしとき、莫科は愕然として覺はず立ちどまりぬ。但見れば弱克は武安の足下に身を投じて、何事か涕泣しつゝ打ちわびをれり。

是時天色は已でに漸やく黒くなれるも、仲夏黄昏の光は尙ほ明かに二人の姿を照らし出だせり。二人は莫科の近づき來れるを知らず、莫科は始めて心つきて、急に身を反へして却りさ回らむどしたりしが、已でに晩かりき、渠は圖らずも二人の語を耳にしたり。渠は弱克が方々に其の兄に懺悔せる詞を聞き、弱克の罪を知了せり。武安「おろか者が、今日諸君が斯の島に——、其の原因は即ち汝が——」。弱克「饒るしたまへ兄うへ、饒るしたまへ余の愚かを」。武安「汝が常に諸君と面を對するを恐るゝ狀有りしは是故なり、諸君は決して汝を饒るさるべし、汝は諸君に語らずして、暗に其の罪を償ふの道を講ぜざるべからず——」。莫科は實に偶然兄弟の斯の秘密をたち聞きせる不幸を千悔萬恨せり、然れども既に之を聞けるからは、之を包みかくすべきに非ず。此より幾分間を過ぎて、三人再びボートの中に會せるとき、莫科は弱克の不在の間を伺ひて「主

公、余は圖らず一切をたち聞きたり」。武安は失叫して「何といふ、汝は弱克が余に語れる」。然り主公、請ふ渠の過ちを饒るせ。汝は他の諸君が亦た渠を、能く饒るすべしと謂ふか。恐らくは饒るすまじ、如かず他の諸君には之を知らさずして已まむには、秘密は余等三人の外に決して泄るべからず。ア、吾が好莫科」とつぶやきつゝ武安は莫科の手を握りぬ。

十時に至りて、三童子は進潮に乗じて、川を溯りはじめしが、是夜は幸に満月にして、清輝晝の如くなれば、ボートをやるに些の危険もあらず、午前一時に至りて潮再び退きはじめたれば、ボートを繋ぎて暫らく潮の回へるを待ち、六時に再び纜を解きて、九時には無事家族湖にこぎ入りぬ。幸いに風は東より吹きたれば、莫科は直ちに帆を揚げて、佛人洞を望みてまどり走りたり。武安は弱克の懺悔を聞きてより、常に沈吟の中にありて、言を發するを希れなれば、莫科も亦た敢て多く口を開かず、一同黙々として、午後六時に佛人洞の前に歸り着きぬ。適々湖畔に出で、釣糸を垂れたる雅涅の、之を望み見て洞に報せしかば、吳敦等衆童子は、相率ひて川の上に出で迎へつゝ、一同に三名が無事の歸

着をよるこびぬ。

第九回

- 報告 ○南澤の一邊 ○珍禽異鳥 ○杜番の人望
- 環投げの戯 ○口論に次げる拳闘 ○傳書燕
- 六月十日の選挙 ○陰氣なる冬 ○氷すべり
- 霧中の人影

是夜武安は一同を會して、其の探征の結果を報告し、其の北東のかたに望み見たる怪しき白點の事など、詳かに語りたるが、其の白點の果して山影なるや否やは、固より未定なり、又た萬に一つ幸ひに山影ならしめしとするも、其の果して大洋の中に多く有る所の、無人の一小嶼などの類に非るを得るや否やは、亦た未定なり。渠等は此の如き未定の物を目的として、多くの困苦勞力を賭して、新たに船を造り航海の危険を冒すべきにあらず。故に渠等は只だ何時までも斯の島にありて、自然外來の救ひありて至るをりを、待つより外に復たすべ無きと、甚だ明かとなりぬ。故に此より、一同は従前に倍する熱心もて、専ら來冬の冬ごもりの準備に致々として従事せり。中に就て、武安は探征より歸りて後は、従前の如く多く人と語らず、其の弟弱克と同居成るべく之を避くるの

狀あり。然れども其の一同のために盡力勞作するの熱心は、更らに幾倍相加はりぬ。加るに何等か非常の勇氣を要し、若くは危険を冒すを要する困難の事あるをりには、越ち自から弱克を薦めて、之に當らしめむを務むるの狀あり。吳敦は早く安武の舉動の斯く變化を生ぜるに着目して、機を見て其の故を窮め問はむと欲したれども、武安は毎ねに心を用ひて、吳敦の語次或は此の事に及ばむとするを防ぎて、吳敦に其の機を得さしめず。然れども吳敦は益す意を留めて兄弟のそぶりを視れば、視るほど益す、たしかに兄弟の間には、既に其の心解けあひて、何等か秘密の約束の成立てるを猜したり。是月の中旬章格は、一日多くの鮭の隊を成して湖より、ニウジランド川に下りゆくを發見し、此より毎日網を下して之を漁りたるに、意外に多くの獲もの有り。因りて又た之を醃藏するために、俄かに多くの鹽を須ふるの必要を生じて、渠等は新たにスロウ灣に、一個の製鹽場を興したり。其の法、濱邊に一個の四角なる巨槽を設け造りて、此の裡に海水を汲み入れ、天日の熱を假りて、其の水分を蒸發せしめし後、乃ち其の底に少しづつ遺留する所の、鹽を採聚するな

り。是れ實に多くの時と勞力とを須ふる所のものなりき、然れども一同の熱心盡力は、終に其の需用するだけの鹽を製したるを得たり。

二月の月は、此の如く一同スロウ灣と佛人洞との間を往返して、打ち過ぎたるが。三月の上旬には、渠等が假りに南澤と名づけたりし、ニウシランド川の左岸なる、沼澤の一分を探征するの議あり、首唱者は杜番にして、沼澤の中に多く群集する羽族を獵して、冬ごもりの食物に備へむといふなり。三月九日の朝、杜番は乙部及び韋格の二名と共に、馬克太の作りたる高履を帯びて、短艇に乗りて川を渡り、岸に登るや否や、各其の高履を穿ちて、沼澤の中に進み入りぬ。言ふまでも無く、獵犬ラハンは三個に跟随したりしが、渠は獨り高履を有さざりしかば、ざんぶくと泥水を踏みつゝ進みゆきにける。

南西に進み行くと一マイル許りにして沼澤中の乾地に抵りたれば、三個は此の處にて高履を脱し、奔走自在なるやう身輕に支度しつゝ。さて四邊を看まはすに、鵞、鴨、黒胸鵞、小鴨、及びもぐり鳥等沼澤の面を蔽ひて、相交錯群集し、若し渠等をして硝薬を齎まざらしめば、渠等は容易に是等鳥類の幾百個を撃つ

とを得しならむ。然れども硝薬の經濟は、渠等をして僅かに其の數十個を得て、以て自から満足せざる能はざらしめぬ。其の他、濱ひばり、蒼鷺、多くありたれども、是等は以て食物となすべからず。又た紅色の翼を有して、首より尾に至るまで長さ四尺以上に及ぶ紅鶴あり。紅鶴は好で濁水の上に集り、其の肉の味ひの美きを、鷓鴣に譲らず、然れども渠等は常に一行の列を成して、列中に見張りのもの幾個かあり、苟も常に異なる事あれば、直ちに喇叭の如き大きな聲を發して、一同を警戒す。故に童子等も徒らに渠等を驚かし逃飛せしめしのみにて、終に其の一個をだも撃ちとめ得ず。然れども、三個は半日の獵くらに、十分の獲ものを得て、午後洞に歸り來れり。

冬ごもりに第一必要なるは薪にして、其の亦た非常の多量を須ふると、去冬の經驗にて明かになりたれば、吳敦は諸童子を指揮して、陷穿林沼澤林に往きて薪を採らしめ、二頭のラマを駕したる異様の馬車は、凡そ半月許の間毎日、日に幾度となく、是等茂林と洞との間を往返して、薪を洞に運び入れしほどに、今は縦ひ六個月焼きつゆけに焼けばとて、薪の供給には不足を告ぐる憂決して

有るまじく見ゆるに至れり。吳敦は是等の勞作の間にも、かねて定めたる日課の修學をば廢することを許さず、又た一週間に兩度の討論會も、會て一度も之を休まず。杜番は例に因りて毎ねに、討論會場裡の雄と稱せられぬ。然れども渠が常に自から其の能辯を矜りて、暗に諸童子を輕視するの風有るは、亦た渠をして人望を失はしむる一つの原因となりしこそ、己むを得ざる次第なれ。抑も吳敦が本島大守としての任期は、こ二ヶ月の内に盡くべく、諸童子は更らに一たび選舉の手續を行ひて、新大守を定立せざるべからず。而して杜番は、其の新大守に推さるゝ者は必ず己れならむと、自から信じ、又たかねて杜番の黨たる章格乙部虞路の三名は、杜番に向ひて常に、渠を舍きて他に吳敦に繼で其の椅子を占むべき適當の人ある無し、との意をはのめかし、三名の心中にも、亦た實にしか思ひこみてをり、皆な杜番の成功に些の疑ひをも容れざりしなり。然れども是れ渠等の大ひなる誤解なりき、杜番は實に吳敦に繼ぐべき、其の年齢と伎倆とに於て、恰好の資格を有せり。然れども渠は人望を有せず、幼年者に於て殊に然り。幼年者は獨り杜番を好まざりしのみならず、吳敦に對しても

亦た多少の不平有り。吳敦が施政の一年間、公共の利益のためを計るに銳志して、常に嚴重なる規律を以て、一同に臨みたりしは、頗る其の徳望を損するの原因となりて、陰かに渠の任期の早く盡さむとを祈る者少からず。殊に幼年者は其の衣服を汚し、ボタンを失ひ、靴を破りて、其の都度に或は減食、或は禁足の罰に遭へる者、殆ど一二もて數ふべからず。吳敦が限りある調度を畜み、治め難き幼年者のわんぱくを治むるの、處置としては、是れも亦た己むを得ざるの道なれども、幼年者は之を怨みて「若し親切なる武安をして太守たらしめば」と思ふに至れるも、亦た復た己むを得ざる人の情なり。然れども、渠等は全日をたゞ勞作と修學とに費やして、更らに他事に及ばざるには非りき。一日の中幾時間かは、運動時間ありて、已がじこに、或は木に升り、或は水に涵ぎ、或は競走捧飛等諸種の戯れして以て、鬱を宣べ快を取る。而して斯の運動時間に於て、ある日、特書せざるべからざる一事件起りたり。四月二十五日の午後なりき。一方には杜番、乙部、章格、虞路の四名一隊となり、他の一方には武安、馬克太、雅涅、左毗の四名一隊となり、環投げの戯れ

といふを作しき。環投げの戯れといふは、平地の上に二條の鐵の針を植て、戯者は各手に二個の直径八九寸の鐵の環を持ちて、二隊に分れて、一定の足場に立ち、各其の的どかねて定められたる針を望みて、其の環を投げ、其の針にはまりし者は、二點と算し、或ははまらざるも、其の針に觸るとまでの處に達し得たる者は、一點と算し、之を合算して以て、彼此の輸贏を決するなり。是日渠等は既に二番を闘ひたるが、初めは合計七點を以て武安の隊贏を得、次は六點を以て杜番の隊贏を得たり。故に最後の斯の一番こそ、即ち兩隊の是日の勝負を決する大切の闘ひなりしなれ。既にして兩隊の諸童子は、更るく其の環を投じて、最後に杜番と武安との手に各一環を剩すのみとなりしとき、兩隊の所得の點、各均しく五點と數へられぬ。

乙部「杜番、こたびは君の番なり、意を用ひよ、我が隊の運命は、懸けて君が斯の一環の上在り。杜番「憂ふる勿れ、乙部。杜番は口を結び、眉を擡めて、一奴の爛たる眼、的を凝視して、ねらひを定むるを良や久しくしたる後、や聲ととも擲ちたる環は殆ど針にはまらむと欲して、はまらず、環邊も

撃ちたるまゝ、空しく地に墜ちぬ。虞路「咄、敗せり」。韋格「然れども猶ほ是れ一點に數へらる、若し敵の環をして命中せざらしむる限りは、輸贏の決、未だ定むべからず」。

此方に立てる左毗は「意を用ひよ、武安」。武安は點頭したるのみ、敢て一言をも發せず、足場を計り、ねらひを定めて、擲ちたる環は誤またず針の上に命中せり。左毗「二點、合計七點、我が隊萬歲」。

彼方に立てる杜番は、左毗の呼ばくる聲を遮りて「否な、只今の勝負には異論有り」。馬克太「何を以て」。杜番は武安等の立てる處に走せ來りて「何となれば、武安が詐りを行ひたれば」。武安は面色を變じて「余が詐りを行ひしと」。杜番「武安は足場より外に、其の足をふみ出したり」。左毗「そは杜番、君の誤りなり、武安の足は常に足場の内に在りたり」。武安「且つ來りて余が靴の跡を看よ、余が足場の外に出でたりといふは、杜番の看たがひに非ずば、即ち其の虚言なり」。杜番「虚言なり」と叫びつゝ、武安のかたに詰寄りたり。杜番の背後には乙部、虞路等引添ひて、スハといはく杜番を助けて、打てかゝらむと欲し、武安

の背後には、亦た左毗馬克太等、武安を助けむと欲して、臂を攘げてをり。武安は憤然として、怒色面に顯はれしが、復た忽ち思ひなほせる如く「杜番、君は已でに余を辱かしむるさへあるに、亦た余に闘ひを挑まむとするか」。杜番「君は心怯れたるか」。武安「余は此の如き事のために、闘ふべき所以を知らず」。即ち心怯れたるなり。余が心怯れしと。即ち君は臆病ものなり。武安は終に復た忍ぶ能はざりき、俄かにして一場の拳闘は、兩個の間に開かれたり。是より先き、兩個の口角次第に厲しきを加ふるを傍觀したりし土耳胡太等の幼年者は、洞内に走せもどりて、吳敦に事の急を告げたるに、吳敦は大に驚きつ、此の處にかけ來りて、兩個の間に身を横へて「武安、杜番」。杜番「渠は余を虚言者なりと嘲けりたり」。武安「然れども、そは初めに渠が余を以て、詐りを行ひし者と誣ひ、又た臆病ものと罵りたれば」。吳敦は聲を厲して「杜番、余は武安の決して事を好む者に非るを知れり、先づ事の端を發せし者は必ず君なり」。杜番「多謝吳敦、君は例に因りて余を貶す、余は君の好意を多謝す」。吳敦「余をして君を貶せしむるは、君の罪なり」。杜番「善し、再び君の好意を感謝

す、君の教訓既に訖りたらば、請ふ去て、余等をして余等の事務を完了せしめよ。吳敦「否な杜番、余は君等の首長として、君等が此の如き不法の争鬪をなすを禁ず、武安、君は洞に歸れ、杜番、君は欲する所に往きて、其の怒氣を消し、君の常態に復せる後を待ちて、余等の許に歸り來れ。圈立環視せる諸童子は、乙部韋格虞路の三個を除く外、皆な一同に「然り、然り、吳敦の言是なり」と賛しける。杜番は是夜、一同が寢に就かむと欲するころに至りて、初めて洞に



（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）

歸り來りしが、武安の事につきては、敢て復た一言をいはず。翌日より、再び平生の如く、一同と共に冬ごもりの準備に致々として従事せるが、其の團忿懣の氣、常に胸に横はれるは、其の居動言貌の上に自から掩ふべからず見えにける。

五月に入りてよりは、寒威既に著るしくなりて、洞内のストーヴには晝夜火を燒きつゝくるやうになり、鳥類は多く更らに温暖の地を求めて、島を去らむと欲す。童子等は中に就て幾十個の燕を捕らへて、各其の頸に、渠等が漂流の始末と、現在の状とを詞短かに記して、斯の書を拾ひ看む者は、速かに之をニウジランドの首府アウクランドに報じくるやう、乞ふむねを併せ記したる小紙片を結びつけて、放ちやりぬ。五月二十五日には、既に初雪を見たり。去冬に比ぶれば早きを若干日なり、斯の冬の寒威は去冬に比べて、或は幾層の烈しさを加ふるやも知るべからず。然れども洞内には幸ひに、薪、油、及び食物を饒有すれば、縦ひ數個月を洞内に蟄してくらさざる可らざるに、至らしむるも、敢て恐るべきにわらず。

吳敦の任期は六月十日を以て終るべし、新太守の選舉は即日之を行なふべしと定められぬ。吳敦は固より己れの既に多數の童子に厭かれたるを知りて、敢て再選さるべしとも望まず、亦たされむをも願はず。武安に至ては、其の佛人の子なるを以て英人の子の組成せる斯の殖民地に於て、其の首長に推さるべしなどとは、初めより夢にも想はず。選舉の日の次第に近づくに隨ひて、隠すとすれど、其の掛念の色の自然面に顯はれしは、獨り杜番なり。蓋し杜番の如きは其の凡に越えたる勇氣、其の儔希れなる才能、斯の一群の童子の首長として、本島の太守に推さるべき、最も適當の人なりしなり。若し渠をして其の剛復他を凌ぎ、妒忌人を嫉むといふ缺點の、常に其の徳を損する無からしめば、渠は必ず第一に本島太守に推さるべき、最も適當の人なりしなり。

既にして六月十日となりぬ、選舉の會は午後を以て開かるべく、童子等は各小さき紙片に、其の選舉せむと欲する候補者の名を記して、之に投じ、第一回の投票にて、最多數を得たる者、即ち當選者たるべしとの定めなり。本島の人口は、十五名なれども、莫科は黑人なるを以て選舉權を有する能はず。故に投票

の数は總計十四枚にして、八票以上を得たる者は、即ち當選者たるを得べし。選舉會は午後二時を以て開かれぬ。吳敦選舉長の椅子に坐し、衆童子は、かのアングロサクソン人種に特有の、嚴肅なる態度を以て、逐次其の票を投じたり。已でに畢りて、選舉長が其の結果を讀みあぐるを聞けば、

武安八點。

杜番三點。

吳敦一點。

即ち武安最多數を得たり。蓋し吳敦と杜番とは、其の選舉權を棄て、武安は吳敦に投票し、其の他は乙部、虞路、韋格の三名か杜番に投票したる外、皆な齊しく武安を推せしなり。

之を聞きしとき、杜番が失望と不快との色は、面に掩ふべからざりき。武安に至りては、事の意外に驚きて、忙がはじく身を起しつ、之を辭さむとしたりしが、復た忽ち其の心に思ひつきし所ある如く、其の弟弱克を視やりつゝ、徐ろに「多謝諸君、謹で諸君の命の辱なきを拜す」。

この日、弱克は人無きをり、其の兄に密かに語りて「兄うへ、汝が直ちに太守の職に就くを諾きたるは」武安「即ち諸君のために、余と汝とが身を捐て、

力を盡くさむと欲するには、余が斯の職に居るをの、尤も便宜ならむと思ひたればなり。弱克は双眼に涙を浮べて、「多謝兄うへ、若し一命を擲ちて、諸君のために身を致すべきを有らば、必ず余を用ふるを忘るゝ勿れ」。

スロウ灣の上に樹てたる英國旗は、既にさんく破れて、殆ど目じるしの用を爲さざれば、武安は戸外の運動の猶ほ自由なるうちに、之を新たにせんと欲して、馬克太に囑して、沼邊に叢生せる蘆を採りて、一個の球を作り、旗に代へて之を竿頭に掲げしめぬ。兎角する間に、陰氣なる冬は去年の如く、次第に

チエイマン島を罩みて、童子等は復た一步を洞外にふみ出だす能はずなりぬ。武安は傲らず、矜らず、忠實に、其の職に務めて、致々洞内庶務の整理に従事し、童子等は皆な喜びて其の指揮に服し、殊に吳敦の初めより率先して、自か

ら武安の號令に遵奉して以て、其の例を示せしは、尤も武安の號令をして、圓滑に行はれしむるの助けをなせり。杜番等四名のものさへも、敢て公然武安の

命に抗する者はあらず、唯だ武安が百方渠等を慰諭撫安して、其の惡感情を去らむを務めたるにも拘はらず、渠等が到底武安に不満にして、心之に服さ

るは、常に其の舉動のはしく、に顯はれて、得て之を掩ふべからず。
 善均、伊播孫、土耳及び胡太等の幼年者が、其の學業の上にて、著るしき進
 歩をなしたるより外に、別に記すべき事もなく、六月七月を過ぎて、八月の初
 めとなりぬ。八月の初めには、百度わりの寒暖計の水銀、零點以下三十度に降
 りし日四日ありき。此ころに至りては、年長童子等が時々厩舎に繋ぎたる諸動
 物のために、其の煖爐に薪を添ゆるが爲め、止むを得ず、更るゝ厩舎に往く
 を除く外は、一人の戸外に出るを得る者なく、厩舎より歸る者は、皆な半ば凍
 死の人となりて、歸り来るを常とせり。是月九日より、風西方に吹きかはりて、
 やがて大風烈風となり、殆ど二週間吹きつゞけて、陷穽林及び沼澤林の樹木多
 く是がために吹き折れ、吹き倒されぬ。他日童子等が薪を採るの必要に逢はむ
 をりは、是れ大に童子等が斧鋸の勞を省くの助けとなるべし。八月下旬といへ
 ば、余輩北半球の二月の末に當れば、暖氣已でに次第に回へりそむる候なるに、
 斯の大風は又大に温度を變化するの効ありて、八月下旬には戸外の運動稍や
 自由なるを得るに至れり。然れども湖及び川は猶ほ渾べて是れ一面の厚氷なれ

ば、打魚の事は未だ之を得試むるに至らず。一日、武安は少しく瑟縮せる一同
 の筋肉を舒べるため、走水の戯れを催さむと欲して、之を一同に語れるに、皆
 な喜びて之を賛せるにぞ。乃ち馬克太に囑して若干隻の水靴を製せしめ、其の
 製し了るを待ちて、二十五日の朝、武安、吳敦、杜番、乙部、虞路、韋格、馬
 克太、雅涅、左毗、善均及び弱克の十一名相率て佛人洞を出で、家族湖の畔
 に抵りぬ。斯の戯れに熟練せざる伊播孫土耳胡太の三幼年者は、莫科ととも
 家に留守してをり。
 佛人洞附近の灣邊は、氷の面起伏凹凸一様ならずして、すべり走るに宜しから
 ざれば、一同は已むを得ず、湖畔に沿ひて三十丁許を北に進ゆくに、此處の前
 方一望無邊の玻璃を展べたる如く、坦々蕩々として、其の涯際を見ず。武安は
 先づ一同を會して、規約を定めたるは「興に乗じ能を街ひて、危険を冒すを
 許さず、群を離れて遠く行くを許さず、誤まりて群を離れ路を失ふ者あらば、
 吳敦と余との始終この濱邊に停立して、諸君の歸來を待つとを忘るゝ勿く、必
 ず此處に歸り來れ、又余がこの喇叭を吹き鳴さば、一同直ちに此處に歸り來

れ。一同は武安が告ぐる所の規約を聞き畢れる後、湖のうへに下りたちて、氷靴を着け、吳敦が發する所の合圖ととも、一齊に氷の面を走りはじめしが、中に就て最も熟練の功を見せしは弱克なりき。杜番と虞路とは、かねて斯の戯れに巧者なりとの名を博せし者なるが、流石の二人も弱克が、各種の曲線、圓線を描きつゝ、縦横にすべり走る、圓轉自在の働さには、遠く及ぶ能はずして、後に瞠若たるばかり。

杜番は弱克が連りに一同の喝采を博するを見て、心の中甚だ面しるからず、やがて一同の列を脱して、虞路をかたへに招きつゝ「君は那方に一群の鴨の下りたるを見ずや」虞路「然り那方の沖なかに」。「君と余とは幸ひに例に因りて銃を負ひたり、往て之を獵取せむ」。「然れども、武安は余等の群を離れて、遠く行くを禁じたり」。「請ふ武安の名を説く勿れ、只だ余と共に隨ひ來れ」此方の岸に停立して、衆童子の面白げに、すべり走るを望視しむたる、武安と、吳敦とは、杜番と虞路の二人が、俄かに群を離れて、沖のかたに去せ去るを見て、大に之を怪しみつゝ、武安「渠等は何處にゆかむと欲するや」吳敦「何等

か獲ものを發見して、其のかたに赴くに非るなきか。」言ふうち二人の影は只だ二個の小黒點と化し了りしが、復た忽ち眼界の外に没して、見るべからずなりぬ。日没までは尙ほ數多時間あれば、渠等は直ちに歸路に迷ふの憂ありといふには非るも、此ごろの空氣の状には、動もすれば、劇變多くして、少しの風むきの變りかたに因りて、忽ち雪を下らし或は霧を起すとあり。されば、二人の見ずなりてより、未だ幾時を閱せず、午後二時に至りて、一帶の重霧地平線を抹して、湖上の物色俄に暗淡となれるとき、武安の驚きは一かたならざりき。「之を憂へ懼ればこそ、余が群を離れて遠く行くを、豫じめ禁ぜしなれ、渠等は斯の重霧の裡に於て、如何にして歸路を求むるを得べきや」吳敦「兎に角に、喇叭を鳴らして、他の諸群を召び還へさむ」。他の童子等は皆な直ちに岸に返りしが、二人は未だ歸り來らず。喇叭は衆童子の口によりて、更なる吹き鳴らされたり。若し二人をして之を聞らしめば、必ず其の銃を放ちて、之に答へ應ずるならむ。一同は耳を敬て、之を聽きたれども、湖上は寂然として、何等の響きをも反へさず。兎角するうちに、霧は

益す廣がり、益す重なりて、更らに數分間を過ぐさば、湖上の全面は凡へて冥濛の中に、罩み了らるへく見ゆるに。
 吳敦「余等は之を如何にすべき」武安「有らゆる力と手段とを竭して、二人を救はざるべからず、先づ余等の中、一人試みに渠等のゆきし方に赴きて、行く／＼喇叭を吹き鳴らして、渠等に方位を知らさば、如何」馬克太「善し、請ふ余之に赴かむ」。「余往かむ」といへる聲、二三個の口より齊しく起りたり。武安「否な、余往かむ」弱克は兄の前に進みて「否、兄うへ、余こそ之に赴くべき適當の人ならめ、氷の上を走るをば、余が得意の藝なれば」。武安は弟の面を熟視して「善し、弟、汝を遣はさむ、且つ行き、且つ吹き、且つ聽けよ。渠等が或は發つべき銃聲を聞き取れとす勿」。弱克は兄が授くる所の、喇叭を受けて、之を帯びたるまゝ、重霧の裡に走せ入りて、姿は忽ち見ゆるなりぬ。

第十回

二童子の歸來 ○弱克の迷路 ○恐ろしき道づれ
 ○東方の義務 ○湖畔の露營 ○四子の分難
 ○東川畔の樹下 ○一夜の營 ○撰擇 ○欺騙
 ○頭の新植地 ○巨熊港 ○北部探征 ○北方
 川頭 ○猿 ○山毛櫟林 ○大あらし ○破れたる
 ポートと二個の人体

既にして半時間を経過せるが、杜番及び虞路よりも、又た二人を尋ねゆける弱克よりも、曾て何等の音耗あらず。左毗「若し火器さへ茲にあらしめば」。武安「然り、請ふ疾く洞に歸りて、砲銃を連發して、以て渠等に洞の所在を知らしめむ」。三十分許の間に、一同は三マイルを走せ過ぎて、佛人洞に歸り到りぬ、平素は粒々寶玉の如く珍惜せる硝薬をも、吝しげも無く取り出だして、二個の大砲に填装しつ、更る／＼之を發つに、一發を發つ毎に、轟然たる砲聲は岡に震ひ水を度りて、數里の間に反響し、物凄さばかりなるが、湖上は依然寂々冥々として、曾て何等の應答をも齎らさず。此の如くして、午後五時に及ぶるに、湖上北東のかたに當りて、遙かに二三發の銃聲起るを聞けり。一同大に喜びつ

、仍ほも大砲を連發するに、幾分間を隔て、二個の人影のおぼろげに重霧の中に見え來れり。俄かにして此方に立てる一同が懽呼の聲は、二個が應答の聲と相和して、高く空中に揚りたり。

二個は、即ち杜番と眞路となりき。弱克は二個と偕にあらざ、二個は曾て其の喇叭の聲をだに耳にせざりしといふ。蓋し二個は湖上の北方を徘徊せるに、弱克は正東を指して尋ねゆきたればなり。是時武安はじめ一同の憂懼は、言はむもさらなり、若し渠をして斯の零點以下の寒氣に暴らされて、一夜湖上を彷徨するの己むを得ざるに至らしめば、其の能く生きて還らむとの望みは、殆ど十に八九これ無ければなり、是時蒼然たる暮色は既に湖上を蔽ひはじめて、全島闇々たる夜色の中に單み了られむも、復た一時間を出でじ。此の如きをりに於て、我の所在を示さむと欲するには、火を擧ぐるより善きはなければ、韋格馬克太左毗等は、早くも手に、乾柴枯枝を採り聚めて、之を濱邊に積むをりしも、吳敦は急に之を止めて、望遠鏡を取りあげつゝ、「待て諸君、那里に何等か物ありて動きをるに似たり」。武安も均しく眼鏡を取りて、北東のかたを注視せ

しが。「多謝す上帝、是れ渠なり、弱克なり」。

童子等は一同一齊に聲を揚げて懽呼せり、計るに、弱克は尙ほ一同を距ると、十餘町の外に在り。然れども渠はかの氷靴に藉りて、氷上を快走すれば、看るゝ其の距離縮まりて、早や更に三五分間を開さば、一同の處に反り到るべく見ゆるまでに至りたり。俄かにして馬克太は驚き怪める聲を發して、「渠は何物をか従がへ來れるに似たり」。信に然り、弱克より三四十間を後れて、二個の黑影あり、弱克に隨ひて轟然走り來る。吳敦「何物ならむ」。馬克太「人歟」。韋格「否な、毛族なるに似たり」。杜番「恐くは是れ狼なり」と言ひもあへず、銃を提げて、最先きに弱克のかたに走せゆきつ、連りに二丸を發せるに、渠等は忽ち身を反して、やみの裡に遁れ去りぬ。

弱克を追ひ來れるは、衆童子の意外にも、是れ二個の熊なりき。渠等は是まで曾て本島に、此の恐ろしき猛獸の棲める迹ありしを見ざりき、想ふに是れ凍結せる海の上を涉り、或は海上に漂流せる氷塊の上に乗りて、附近の大陸より此ころ此の島に渡り來りし者なるべし。果して然らば、是も亦た此の島を距ると

national forest
revised 1917
Kilbann

遠からざる處に何等か大陸の在る
有るを證する者にあらずや。蓋し
弱克は武安等に別れて東方に杜番
等二人の跡を尋ねゆけるが、行け
どもく二人に逢ふを得ず、重
霧の中を彷徨するを多時するうち、
終には己れも亦た方位を失ひて、
歸路に迷ふに至りたり、時に殷々
たる砲聲の、遙かに一方に起るを
聞きて、是れ必ず佛人洞なる諸童
子の發てるものならむを料り、砲
聲の起れるかたを望みて、歸り來
る途中、忽ちにしてかの二個の熊
の己れに尾し來るを知りぬ、幸ひ



にして渠が氷すべりの熟練は渠を助けて、常に幾十間の距離を保ちて走るを
渠に得せしめたりしかども、若し渠にして一步を踏み倒れしめば、恐らく渠は
復た生きて一同に會する能はざりしならむ。

武安は洞に入らむとして首を回へせるに、偶々後についきし杜番と、恰かも面
を對せるに、杜番、余は君に一同に相離るゝ勿れと命ぜり、而かも君は余の
命に背きて、非常の危懼と狼狽とを余等一同に齎したり、余は之を君に責め
ざる能はず、然れども君が一身を抛ちて、最先きに余の弟の急に赴きくれたる
高義と深情とは、余の亦た厚く心に荷ひて永く忘るゝ能はざる所なり。杜番は
冷然として、「余は唯だ余の義務をなせるのみ」と言ひすて、武安が恭やしく
さし伸べたる手には肯て指だも觸れず、其まゝに洞の中に入り去りぬ。

以上の事ありてより六週問許を経て、ある日の夕、家族湖の南岸に、我々とし
て露營を張る四個の童子ありき。ころは十月暮春の候にして、樹上地上皆な一
様に青緑の衣を被り、鼻々たる和風は湖の面を吹き皺めて、斜陽萬段の金を碎

一七四
き、子に集まり子に飛ぶ禽鳥は、各其の宿巢を求めて、聲を限りに百轉千轉す、
一個の老樾樹の下には、正さに燃ゆる火ありて、火の邊には二隻の巨鴨の、
申に貫かれたるが懸けありて炙りて方さに熟せり。四個の童子は晩飯を畢りた
る後、各毛布に身を包みて、火を圍みて横臥せるが、翌朝日既に高く昇れるま
で、齟々として眠未だ覺めざりき。

四個の童子は即ち、杜番と其の黨虞路乙部韋格の三人なりき。四個が佛人洞な
る他の諸童子と分離して、此に至りたる始末は、一言するに乃ち左の如し。
去る冬の冬ごもりの間に於て、杜番と武安との不和は日に益す増長して、吳敦
が間に居りて百方力を盡して、兩者の交情をやはらげむと務めたるも、其の功
無く、終には杜番及び其の黨の三人は、食事の時の外、一同と面を對するを幾
ど希れになり、多くは洞内の一隅に四個別に團坐して、首を聚め何事か低々相
語りをり。ある日武安は吳敦を招きて、四個の狀を指し示して、「渠等は何事
か陰かに圖りをる所あるに疑ひなし」。吳敦「縦ひ陰かに圖る所あらしむるも、
是れ君に對する謀反のたぐひならぬは、必せり、他の諸君一同が君を棄てて杜

番に與みせざるをば、杜番と雖も明かに之を察せり。「渠等は、蓋し余等を棄
てて此處を去らむと欲するに非ずや、と疑ふなり、余は昨日韋格が陰かに募員
の地圖を寫し取るを目撃せり、因て思ふに渠等の不滿は、其の本皆な余の一身
に快からざる上より發せり、故に余は速かに余が現在の職を辭して、之を君或
は杜番に譲りて、以て斯の不和の根を絶たむと欲す、如何。「否な、否な、武
安、そは君の平生に似ざるの言なり、若し此の如くせば、君は何に縁りて君を
選舉せる諸君の心に答へむとするぞ、何に縁りて諸君に對する君の義務を盡く
すべからず」。

十月上旬に至りて、暖氣俄かに回へりて、湖川の氷も一時に泮け、洞外の運動
全く自由になれるとき、一夕杜番は其の黨の三子と偕に、洞を去らむと欲する
むねを言ひ出だしぬ。吳敦「君等は余等一同を棄てて、此處を去らむと欲する
か」。「諸君を棄つるといふにはあらず、余等四人は暫く諸君と別居したしどお
もふのみ」。馬克太「そは何故に杜番」。杜番「一には別居して勝手の生活をな
したき故に、然れども最も重なる趣意は、淡泊に直言すれば、余等は武安の治

下に立つとを願はざるが故に。武安「四君が余に不満なりとせらるゝは、何の故に由りてなるや、請ふ之を聞くを得べきか」。杜番「何の故もあるに非ず、唯だ君は余等の首長たるべき權利無き者なりといふに在り、余等は皆な英國人なり、而して嚮きには米國人を首長とし、今は又た佛國人を首長とす、次回の選舉には、余は恐る必ず莫科（黒人の子）を首長とせざるべからざらむを」。吳敦「杜番、そは君のまじめの事には非るべし」。杜番「余はまじめなり、亦た熱心なり、他の諸君はいざ知らず、余等四人は英國人にあらぬ首長の治下に、復た一日も忍屈しをるを能はず」。武安「若し此の如くば、余等も亦た之を奈何ともする能はず、君と韋格乙部虞路との四君は、随意に此處を去らるべし、又た其同財産の中四君の權利に屬すべき四分之一のものだけは、随意に携帶し去らるべし」。吳敦も四人の決意の到底動かすべからざるを見て、愁然として只だ、「余は君等が他日今日の決意を悔恨する如きをなからむを祈る」といひしのみ。さて杜番が此處を去りて後の計畫といふは、數月前武安が欺騙灣の濱邊に於て見しと語れる岩窟の中に就て、其の居を卜し、東方川畔の茂林に獵して給を取

らば、眼食に不自由を懇ふるをば之れなかるべしといふに在り。欺騙灣は佛人洞と相距ると、十二マイル即ち五里弱に過ぎざれば、佛人洞の諸童子と消息を相通ずるも、亦た甚だ容易なり、渠等は先づ家族湖の南岸に沿ひ、陸路東方川に抵り、川に沿ひ茂林を穿ちて、欺騙灣の濱邊に出で、川の水流緩慢なる處に至りて、かの護謨製のたゞみ舟に由りて川を渡り、かの岩窟の中に就て、恰好の處を選択し、其の宅とすべきもの既に定まりたる後、洞に歸りて其の權利に屬する財産を分ち取り、更めて之を其の新宅に運ぶべし。渠等が此の如く往反陸路に由りて水路を取らざるは、渠等は全くポートを操るの知識と熟練とに缺くればなり。かくて翌日即ち十月十日の朝、四人は施條銃二個、連發短銃四個、斧二個、硝藥若干、打魚の具若干、懷中磁石一個、毛布數枚、護謨製の舟、及び少許の食物を携帶して、佛人洞をたち出でたり。諸童子は皆な愁然として之を洞外まで送りたり。四人は牢として動かすべからざる決意を持したるにも拘はらず、さすがに心悄然と打ちしほるゝを、皆な強て然あらぬさまに作りつゝ、ニウシラ

ンド川の畔に抵れば、此處にハ莫科のボートを藏して、四人を待ちてをり。四人は川を渡り、莫科に別れて、徐ろに南澤に沿ひて湖の南端を指して進み行けり。行くを五マイル餘りにして、午後五時湖の南端に達したり。渠等が此處に露營を張り、途中獵取せる所の巨鴨に飽くまで飢を療して、穩睡したりしは、余輩の既に目撃して知悉する所なり。

翌朝再び此處を發して、復た湖畔を進み行くに、忽ち一個の砂丘に撞着せり、丘上に立ちて左右を回視するに、一方には湖光鏡を開き、他の一方には無數の砂丘起伏連綿するを見る。渠等は此處を下りて復た進み行くに、愈も行けば愈よ丘陵多くなりて、終には一登一降、殆ど間斷ある無きに至れるに、渠等は地面の光景の、將さに一變せむとするを豫測せり。十一時に湖の一舷の水折入して小さく灣を成せる處に至りて、四人は暫らく足を休め、中飯をたうべなごす。灣の上は即ち一座の茂林の盡頭にして、四人の此より進み行かむとする東北二方は、全く斯の茂林の蔽ふ所となりて、其の前路を辨ずべからず。四人は此より茂林に分け入りて北方に進み行くに、林中には駝鳥、ヤマ、ベツカリ

一、及び鳩鳩其の他の羽族甚だ多く、其の富本島内地の他の諸林に譲らざる如く見ゆるは、四人の尤も喜びに堪へざりし所なり。六時に至りて、一條の川の畔に到着せり、四人は是れ必ず東方川なるべしと斷せり、四邊を熟視するに、灣の岸頭に焚きすてたる火の痕あり、即ち嚮きに武安兄弟と莫科とが、將さに欺騙灣に下らむとする前夜、停宿したる處なるを知るべく、亦た斯の川の果して東方川にまざれ無きを知るべし。四人は晩飯の後、武安等の露宿せし同じ樹の下に横臥して、早くも熟睡の中に入りぬ。

八個月前、武安が其の弟と黑人の子を従へて、始めて斯の樹下に露宿せしとき焉が夢にだも八個月の後、其の同伴の四名が一同と分離して、別に居を此のほとりに求むるがため、斯の樹下に來りて露宿するをあるべしと想はむや。

若し夫れ眞路乙部韋格の三名も、今更遠く佛人洞の安樂居を離れて、獨り寂寞たる斯の樹下に臥横せるとき、嚮きに斯の樹下に眠りたりし人を憶ひ、延て佛人洞の事を懐へば、豈其の心の中自から悔ゆる如く恨む如き一種の念を萌すを禁め得むや。然れど渠等の進退は今や杜番と相聯なりて、斷らむと欲して斷

るべからず。杜番に至りては、剛愎倨傲は其の性なり、一たび爲さむと欲せる所は、縦ひ中ごろ自から其の非を悟るも、必ず之を遂げざれば已まず。翌朝杜番は一行に向ひ、初めの計書を變じて、先づ此處にて川を渡り、左岸に沿ひて欺騙灣まで下りゆくべし、と發議せるに、渡りて後ち下りゆくも、下りゆきて後ち渡るも、歸する所同一なるに加へて、武安等がストーンパインを多く發見せしも、左岸の林中に於てなりしといへば、兼て行く／＼其の堅果を採聚するの便宜もあるを得べしとて、一行直ちに之を賛成し、さて川を渡り左岸の林中に分け入りて、東方に下りゆくに、いやが上にをひ疊なれる下艸は、腰を没し脛に縲ひ、或は沼澤道を斷ちて、大迂回をなさざるを得ざる處あり、或は密木縦横地を蔽ひて、斧を用ひて斫り開きつゝ纒かに進み行ける處あり、渠等は意外の困苦と疲勞とを贏け得たる後、やう／＼林を出で離れ得たるは、天既に全く黒みたる午後七時過ぎなりき。翌朝は四人起き出づるや否や、直ちに先づ濱邊に走せ出で、東方の地平線上を展望せしが、東方は依然、無邊の海波森々として天を蘸すを見るのみ、曾て

一物の眼を遮るもの有る無し。杜番「然りと雖も余は猶ほ飽くまでも、本島の亞米利加大陸に近きことを信ずる者なり、智利若くは白露に赴かむと欲して、ホルン岬を遠ぐる所の船隻は、必ず路を本島の東方に取りて、この沖を過ぎらざるべからず、余が諸君と俱に、居を此處に卜さむと決意せしは、一つには此處にありて、是等船隻を見張りしたしと思ひたればなり、武安は失望の餘り、此處に名づくるに欺騙灣を以てしたり、然れども、余は斯の灣の長く余輩を欺かず、早晚必ず何等かの帆影をこの沖に浮べ出ださむを期する者なり」。この日は濱邊を徜徉して、將來の宅とすべき洞を彼此と選擇し、二三隻の松雞を獵取し、魚を網し、貝を拾ひなどして、夕に至りぬ。渠等は斯の灣の全形を總覽せむと欲して、かの巨熊岩に登り、更らに一たび東方を展望せるが、依然只だ雲霧の茫々たるを見るのみ、武安が北東のかたに望み見たるといふ白點さへも、曾て眸に入らず、四人は是れ武安が一時の幻視に欺かれしに過ぎずと爲し空しく岩を下りしが、杜番はこの岩下の一水區を名づけて巨熊港となせり。この夜、晩飯畢りて後、四人は將來の運動を商議せるに、新宅の選擇既に定ま

りたれば、次には唯だ其の財産を新宅に運搬すべき一事あるのみ、然れども之を運搬するに當りて、陸路よりするとの到底能ふべからざるは、來時の所見に徴して、甚だ明かなり、故に運搬の一事は、佛人洞の莫科に囑みて、ボートを用以、水路よりするをすべしといふに決議せり。又た佛人洞に歸るの道すぢに就ては、杜番は一議を發して、其の佛人洞に歸るの前、便宜この濱邊に沿ひて、本島の北部を探征すべしといひ、一同之を賛成せり。

いよ／＼北部の探征に従事するとせば、往復少くとも更らに兩三日を費するべからざるべければ、是夜は一同早く寢に就きて、翌朝未明に起き出で、早飯を畢り、直ちに北方を指して此處を打ち立ちたるが、凡そ三マイル許の間は、濱邊一帶の岩つつきにして、唯だ左方の林際に、幅百尺許の一すぢの砂道をのこせるのみ。既にして行きて岩盡くる處に至るに、一條の小さき流ありて、道を斷てり。蓋し亦た家族湖の泄れて海に往くものなり、杜番は之に北方川の名を命ぜり。四人は此處に中飯をしたゝめたる後、川を渡りて、暫く川畔の密林の中を徘徊し、さて再び濱邊に返らむと欲するをり、虞路は俄かに足を停め

て、「看よ杜番、彼れを看よ」虞路の指さすかたを注視するに、一個の巨獸あり、生ひ繁れる灌木を左右に排しつゝ行動するさま、明かに見るべし、杜番は乙部及び章格を留めおき、虞路と二人して、ぬき足しつゝ忍び寄りて、相距る二十間許の處に至りて、兩人齊しく銃を發せるが、獸は皮甚だ厚くして、銃丸も之を透す能はず、獸は只だ一驚を吃したるまゝ、早くも密樹の中に竄入して、見えざるなりぬ。然れども杜番は其の遁げゆく背影を見て、直ちに知るを得たり、是れ南亞米利加の河畔に多く見る所の獺の一種なり、獺は人に害を加へず、亦た人に用をも爲さざる一個の長物なれば、渠等は甚だこれを逸したるを惜ま

ず。かくて復た濱邊を北方に進み行くに、此邊は渾べて是れ一面の茂林にして、茂林は亦た渾べて山毛櫸より成れるが多し、故に渠等は斯の地方を總名して山毛櫸林と爲せり、是日渠等は凡そ九マイルを跋渉せり、更らに九マイルを行かば、渠等は本島の北濱に達するを得べし、即ち明日の日没までには、渠等は其の目的地に達するを得べし。

次の日即ち十月十五日は、朝より天氣穩やかならず、動もすればあらしなどに

變ぜむと欲する模様なるに、四人は益す足を疾めて進み行くに、風は刻一刻
 烈しく吹き加はりて、午後五時に及ふ比には、幾道の電光頭上に縦横するど
 こもに、忽ち轟然なる霹靂耳を劈きて續き起り、風は萬木を震ひて、鞞鞞の聲
 霹靂の聲と相聞ひ、物凄きを言は
 ひはかりも無し。然れども渠等は
 其の目的地既に次第に近づけるを
 知れば、屈せず撓まず、喘ぎく
 走りゆくに、八時に至りて、般々
 たる別様の風濤の聲ありて、茂林
 を隔て、起るを聞けり。渠等は其
 の既に本島の北濱に出でしを
 知るに、益す足を疾めて走りゆ
 くに、茂林の轉ずる處、豁然とし
 て一帶の沙嘴、眼前に開展して、



雪浪滾々其の上に卷舒するを見る。
 是時天色漸やく黒くして、幾丁の
 外を視る能はざりしと雖も、渠等
 は猶ほ夜色未だ海面を鎖さるに
 先きだちて、本島北方海面の概景
 を看一看せむと欲して、瑟縮たる
 脚を曳きずり、沙嘴を望みて
 走せゆくに、衆に一步先きだちた
 る章格は、忽ち足を停めて、前方
 に横はれる黒き影をば指ざしつゝ、
 他の三子を顧みたり。

渠等は眸を凝らして、前方をすかし視るに、渠等と相距る十餘間の那方に、一
 隻のボートの打ちあげられたるが、右舷を沙場に膠着して欹立しをり、ボート
 を距ると三五間左には、退潮が正さに留め遺したる海藻の堆を成せる邊に、二

